

東京大学構内遺跡調査研究年報 9

2011・2012 年度

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学構内遺跡調査研究年報 9

2011・2012 年度

東京大学埋蔵文化財調査室

例 言

1. 本書は2011年4月1日から2013年3月31日までに東京大学埋蔵文化財調査室が実施した埋蔵文化財発掘調査およびそれに関わる研究、教育、普及などの諸活動をまとめた東京大学構内遺跡調査研究年報と東京大学構内遺跡に関わる調査・研究成果である東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要を合冊したものである。
2. 上記期間に行った発掘調査のうち、埋蔵文化財が確認できたものについてその略報を第1・2部に掲載した。
3. 遺構の略号は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所で採用している方式を参照し、前に遺構の性格、後ろに各調査地点ごとに1から通し番号を付与した。前に付した遺構番号の性格の略称は、個々の報告の凡例を参考にされたい。
4. 本文の執筆者は、第1・2部は文頭、第3部は例言、第4部は文頭に記した。
5. 本年報の作成は室員があたり、堀内秀樹・小林照子が編集を行った。
6. 本年報に添付したCD-ROMには、印刷本と同内容の電子版（PDF形式）に加え、「第3部東京大学構内遺跡発掘調査報告」では、内容に関わる遺構、遺物の写真データ（JPEG形式）、観察・集計・組成表（Excel形式）を収録している。ただし、著作権保護のため一部の資料についてはマスクを施している。
7. 本書掲載・収録の諸データは、営利を伴わない学術目的の個人論文などを除いて無断転載を禁止する。
8. 発掘調査に伴う出土遺物等は、東京大学埋蔵文化財調査室が、東京大学駒場Ⅱリサーチキャンパス（東京都目黒区駒場4-6-1）および東京大学工学系研究科柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡414）において管理、運用、保管を行っている。

目 次

例 言

目 次

東京大学構内遺跡の調査	1
東京大学構内遺跡調査一覧	2

第1部 2011年度調査室事業概要

第I章 埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）	15
第1節 本郷構内の事前調査	17
1. 本郷99 法学部3号館3期（HLS10-3）	17
2. 本郷100 工学部3号館（HK311）	20
第2節 本郷構内の試掘調査	32
1. 本郷110 クリニカルリサーチセンター（CRC）A棟Ⅱ期	32
2. 本郷112 クリニカルリサーチセンター（CRC）B棟	32
3. 本郷117 農学部3号館西舗装改修	35
第3節 本郷構内の立会調査	36
1. 本郷107 総合図書館前クスノキ移植	36
2. 本郷111 総合図書館西側道路	37
第II章 調査資料の整理・研究および公開・活用	39
第1節 調査資料の整理	39
1. 整理事業概要	39
2. 外部委託	39
第2節 調査・研究成果の公開・活用	40
1. 広報活動	40
2. 教育・普及	41
3. 資料の提供・貸出	44
第3節 室員研究・活動報告	45
附 埋蔵文化財調査室要項	47
埋蔵文化財調査室規則	47
埋蔵文化財調査室組織表	48

第2部 2012年度調査室事業概要

第I章 埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）	51
第1節 本郷構内の事前調査	52
1. 本郷103 春日門横教育研究棟（HKK11）	52
2. 本郷113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期1次（HHWB12）	89
3. 本郷115 図書館前クスノキ移植（HTP12）	103

第Ⅱ章 調査資料の整理・研究および公開・活用		
第1節 調査資料の整理	107	
1. 整理事業概要	107	
2. 外部委託	107	
第2節 調査・研究成果の公開・活用	108	
1. 広報活動	108	
2. 教育・普及	108	
3. 資料の提供・貸出	109	
第3節 室員研究・活動報告	110	
附 埋蔵文化財調査室要項	113	
埋蔵文化財調査室規則	113	
埋蔵文化財調査室組織表	114	
第3部 東京大学構内遺跡発掘調査報告		
玄蕃所遺跡 東京大学検見川体育セミナーハウス地点発掘調査報告書	117	
第4部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要9		
漆パレット・漆溜容器の研究	阿部常樹・都築由里子・難波道成	187
	服部哲則・原祐一・堀内秀樹	
	湯沢丈	
文献・絵図資料にみる富山藩江戸屋敷	小松愛子	235

東京大学構内遺跡の調査

東京大学は、農学生命科学研究科附属演習林を併せると全国15都道府県におよび、327,203,682㎡を所有（一部借入）している。このうち本郷（東京都文京区）、駒場（東京都目黒区）、柏（千葉県柏市）の3地区を拠点キャンパスと位置付けている。本郷地区は本郷、弥生、浅野の3キャンパス全体で559,176㎡、駒場地区はⅠ（教養学部）、Ⅱ（リサーチキャンパス）全体で352,213㎡、柏地区は320,452㎡を所有している。また、その他周知の遺跡として登録され、現在までに試掘を含め調査を実施した所有地に、研究関連施設では理学系研究科附属植物園本園、農学生命科学研究科附属小石川樹木園、総合研究博物館小石川分館が所在する白山地区（東京都文京区、160,787㎡）、医科学研究所が所在する白金地区（東京都港区、68,906㎡）、理学系研究科附属臨海実験所（神奈川県三浦市、68,737㎡）、福利厚生関連施設では追分国際学生宿舎（東京都文京区）、白金学寮（東京都港区、2,453㎡）、三鷹国際学生宿舎（東京都三鷹市、32,380㎡）、検見川総合運動場（千葉県千葉市、273,027㎡）がある。

本郷地区は旧石器時代（ブロック・礫群）、縄文時代（早期末集落・後晩期包蔵地）、弥生時代（後期集落）、古墳時代（前～後期集落）、平安時代（集落）、江戸時代（大名屋敷・武家地・町屋・寺社地）、近代にわたる大規模複合遺跡群で、「文京区No.47 本郷台遺跡群」として登録されている。またその一部（浅野地区内）は、「文京区No.28 弥生町遺跡群」と登録され、1975年に文学部考古学研究室、理学部人類学教室が合同調査を行った「向ヶ岡貝塚」（No.28-C 地点）は、1976年に「弥生二丁目遺跡」として国史跡に指定されている。

駒場地区のうち駒場Ⅱキャンパスは、近年の再開発に伴い構内の試掘調査を実施しているが、遺跡は確認されていない。駒場Ⅰキャンパスは、旧石器時代（ブロック・礫群）、縄文時代（早期末集落）、平安時代、近世（農村）の遺跡が確認され、キャンパス全域が「目黒区No.1 東京大学駒場構内遺跡」として登録されている。

柏地区（現状所有範囲）は開発前に千葉県教育委員会による試掘調査が行われたが、遺跡は確認されていない。

白山地区は、すでに明治初頭、エドワード・S・モースによって貝塚の存在が紹介されており、小石川植物園内貝塚として周知されてきた。また大正7年には東京府の旧跡として指定された歴史を持つ。現在では構内全域が縄文時代（前～晩期集落・貝塚）、江戸時代（大名屋敷・幕府御用地・武家地）の複合遺跡「文京区No.81 小石川御薬園跡」、その一部が「文京区No.21 小石川植物園内貝塚・原町遺跡」として登録されている。2012年9月19日に「小石川植物園（御薬園跡及び養生所跡）」として国の名勝および史跡に指定された。

医科学研究所は、旧石器時代（ブロック）、江戸時代（大名屋敷）の遺跡が確認され、「港区No.135 遺跡」として登録されている。理学系研究科附属臨海実験所は、中世城館跡（新井城跡）が確認され、「新井城跡」として登録されている。追分国際学生宿舎は、江戸時代（武家地）の遺跡が確認され、「文京区No.64 駒込追分町遺跡」として登録されている。三鷹国際学生宿舎は、旧石器時代（ブロック・礫群）、縄文時代、江戸時代（農村）の遺跡が確認され、「三鷹市No.24 長嶋遺跡」として登録されている。

検見川総合運動場は、旧石器時代（ブロック）、縄文時代（前期集落）、古墳時代、平安時代（集落）の複合遺跡で、「玄蕃所遺跡」として登録されている。

東京大学構内遺跡調査一覧

本郷地区調査一覧

地区	番号	年度	略称	調査名(略称)	調査種別	調査期間	面積㎡	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	1	1983	U	山上会館	事前	1984.3.7 ~ 1986.7.17	1500	西田・谷大貫	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 山上会館・御殿下記念館地点』
本郷	2	1984	HHB	法学部4号館・文学部3号館	事前	1984.4.1 ~ 1985.3.31	2500	大塚	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
本郷	3	1985	HGS	御殿下記念館	事前	1985.7.29 ~ 1987.6.30	6000	寺島・大貫・倉林	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 山上会館・御殿下記念館地点』
本郷	4	1984	HHC	医学部附属病院中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝	事前	1984.10.1 ~ 1987.3.31	7700	藤本・小川	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 医学部附属病院地点』
本郷	5	1984	HS7	理学部7号館	事前	1985.2.1 ~ 10.8	750	羽生	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 理学部7号館地点』
本郷	6	1986	-	バス通り上水	立会	1986.5.12 ~ 7.20	-	寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	7	1987	-	タンDEM棟	試掘	1988.2.15 ~ 17	28	成瀬・武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	8	1987	-	弥生門脇変電施設	立会	1987.12.15 ~ 16	-	武藤	江戸
本郷	9	1989	VMC	農学部家畜病院	事前	1990.1.31 ~ 3.14	1040	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	10	1990	HG	医学部附属病院外来診療棟	事前	1990.6.27 ~ 1991.2.21	5500	成瀬・堀内武藤	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5 医学部附属病院外来診療棟地点』
本郷	11	1991	-	農学部ガラス室	試掘	1991.8.12 ~ 13	7	堀内	遺構・遺物なし
本郷	12	1992	-	農学部図書館	試掘	1992.10.21	4	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	12	1992	FAL	農学部図書館	事前	1993.3.9 ~ 3.25	408	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	13	1992	FA792	農学部7号館A棟I期	事前	1992.10.6 ~ 11.16	1170	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	14	1992	K14	工学部14号館	事前	1992.11.26 ~ 1993.2.23	1785	成瀬・堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7 工学部14号館地点』
本郷	15	1992	YS	薬学部新館	事前	1992.10.21 ~ 12.18	1300	堀内・寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	16	1993	FA793	農学部7号館A棟II期	事前	1993.11.3 ~ 26	1000	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	17	1993	FE1	工学部1号館	事前	1993.12.6 ~ 1994.2.10	616	武藤	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書6 工学部1号館地点』
本郷	18	1993	SK	教育学部総合研究棟	事前	1993.11.18 ~ 12.28	1007	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書10 教育学部総合研究棟地点・IML地点』
本郷	19	1993	HN	医学部附属病院看護師宿舎	事前	1993.8.4 ~ 1994.1.17	746	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	20	1993	TUM	総合研究博物館新館	事前	1994.2.14 ~ 4.8	600	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書11 総合研究博物館新館地点』
本郷	21	1993	MRI	医学部附属病院MRI-CT棟	事前	1994.1.18 ~ 3.12	400	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	22	1994	HF	山上会館龍岡門別館	事前	1994.8.17 ~ 10.17	593	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	23	1994	HW	医学部附属病院入院棟A(旧名:医学部附属病院病棟)	事前	1994.4.21 ~ 11.16、 1995.1.31 ~ 1996.6.6	6096	成瀬・原 鯨島・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	24	1994	HIKN	医学部教育研究棟	事前	1994.11.17 ~ 1995.4.28、 1997.3.10 ~ 4.25、 1998.11.2 ~ 12.25、 2002.9.3 ~ 12.25	2415	堀内・鯨島 大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	25	1994	HND	医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場	事前	1995.1.30 ~ 3.3	45	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	26	1994	-	法文十字路外灯	立会	1994.9.5	-	成瀬・鯨島	江戸
本郷	27	1994	-	理学部1号館	立会	1994.10.3 ~ 18	-	寺島	遺構・遺物なし
本郷	28	1995	FPS	薬学部資料館	事前	1995.7.24 ~ 9.1	600	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	29	1995	ACC	情報基盤センター変電室1	事前	1995.7.18 ~ 31	78	鯨島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	30	1995	AFC	工学部風工学実験室支障ケーブル地点	事前	1995.8.22 ~ 9.22	63	鯨島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	31	1995	ATM	ATMネットワーク施設整備	立会	1995.11.20 ~ 24	-	武藤・堀内 鯨島・原	江戸
本郷	32	1994	-	医学部附属病院看護師宿舎電気ケーブル埋設	立会	1995.3.2	-	原	遺構・遺物なし
本郷	33	1996	EQL	地震研テレメタリング地震観測施設	事前	1996.4.15 ~ 5.2	360	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	34	1996	-	野球グラウンド	立会	1996	-	寺島	遺構・遺物なし
本郷	35	1993	-	経済学部前路面陥没	立会	1993.9.28、1994.5.14	-	成瀬	江戸
本郷	36	1993	-	農学部ガス管理設	立会	1993.10.15	-	成瀬	江戸

地区	番号	年度	略称	調査名(略称)	調査種別	調査期間	面積㎡	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	37	1994	-	屋外環境整備等工事龍岡門~附属病院	立会	1994.10.13	-	成瀬・原	江戸
本郷	38	1994	-	医学部附属病院内エアタンク設置	立会	1994.12.18	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	39	1994	-	史料編纂所前埋設	立会	1995.3.10	-	成瀬	江戸
本郷	40	1995	AFL	工学部風工学実験室	事前	1996.1.22 ~ 3.7	252	鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	41	1996	IML	インテリジェント・モデリング・ラボラトリー	事前	1996.4.15 ~ 6.20	626	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書10 教育学部総合研究棟地点・IML地点』
本郷	42	1996	-	医学部附属病院基幹整備に伴う樹木移植	立会	1996.4	-	成瀬	江戸
本郷	43	1996	HWK1	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.5.12 ~ 5.18	20	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	44	1996	HWK2	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.5.27 ~ 6.27	102	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	45	1996	HWK3	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.6.3 ~ 6.20	184	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	46	1994	-	龍岡門門衛所移築	立会	1994.8.24	-	成瀬	江戸
本郷	47	1996	HWK4	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.6.24 ~ 6.28	5	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	48	1996	HN II	医学部附属病院看護師宿舎II期	事前	1996.11.5 ~ 1997.1.31	525	原・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	49	1997	-	外灯整備工事1	立会	1997.4.13 ~ 30	-	原	江戸
本郷	50	1997	-	外灯整備工事2	立会	1997.4.13 ~ 30	-	原	江戸
本郷	51	1997	-	外灯整備工事3	立会	1997.4.13 ~ 30	-	原	江戸
本郷	52	1997	-	農学部(21世紀館)木質ホール	試掘	1997.7.14 ~ 18	50	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	53	1998	AF IV	工学部風環境シミュレーション風洞実験室	事前	1999.1.7 ~ 25	300	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	54	1999	HES99	総合研究棟(文・経・教・社研)	事前	1999.5.24 ~ 11.2	1000	堀内・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
本郷	55	1999	HHC299	医学部附属病院第2中央診療棟	事前	1999.10.12 ~ 2000.2.25、 2001.7.23 ~ 2002.12.19	4017	成瀬・原 追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	56	1999	-	文系4研究所等暫定建物	試掘	1999.12.16 ~ 17	16	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
本郷	57	1999	-	環境安全センター	立会	2000.1.17	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	58	1999	YM	医学部附属病院受変電設備棟	事前	2000.2.5 ~ 3.31	300	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書12 医学部附属病院受変電設備棟地点』
本郷	59	2000	KK	工学部基幹整備共同溝	事前	2000.7.3 ~ 7.12、10.11 ~ 10.14、2001.2.21 ~ 2.28	900	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	60	2000	HWK6	医学部附属病院基幹整備外構施設等	事前	2000.9.21 ~ 11.14	200	成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	61	2001	TS	工学部武田先端知ビル	事前	2001.6.4 ~ 8.7、11.28 ~ 12.28	740	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	62	2001	NSK01	農学部生命科学総合研究棟	事前	2001.9.21 ~ 10.19	1800	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	63	2001	-	薬学部暫定建物	立会	2002.2.5 ~ 6	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	64	2001	-	情報学環暫定建物	立会	2002.2.7	-	成瀬	江戸
本郷	65	2002	LS03	法学系総合研究棟	事前	2003.2.17 ~ 4.18	946	成瀬・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	66	2002	YGS01	薬学系総合研究棟1期	事前	2002.8.1 ~ 2003.2.28	1260	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	66	2004	YGS04	薬学系総合研究棟2期	事前	2004.7.26 ~ 8.4、11.17 ~ 2005.2.4	540	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	67	2002	-	地震研究所総合研究棟	試掘	2002.5.9 ~ 17	32	堀内	近代・江戸・古墳・弥生・縄文
本郷	68	2002	INC	インキュベーション施設	事前	2003.3.6 ~ 6.7	1051	堀内・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	69	2002	-	地震研仮設建物	立会	2002.5.14 ~ 16	-	堀内	遺構・遺物なし
本郷	70	2002	-	工学系総合研究棟	立会	2003.2.28	-	堀内	遺構・遺物なし
本郷	71	2004	HEQ04	地震研究所総合研究棟	事前	2004.8.30 ~ 2005.2.28	1474	追川・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	72	2004	SC1	理学部1号館前	事前	2004.11.29 ~ 12.3	32	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	73	2004	-	クリニカルリサーチセンターA棟I期(旧名:疾患生命研究センター)	試掘	2004.11.29 ~ 12.1	24	成瀬	江戸・古墳
本郷	74	2008	HHN308	医学部附属病院看護師宿舎III期	事前	2008.4.1 ~ 8.1	550	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	75	2005	KOS05	工学系総合研究棟立坑	事前	2005.9.13 ~ 14	17	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	76	2005	HVP06	ベンチャープラザ	事前	2006.3.6 ~ 5.16	760	追川・堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収

地区	番号	年度	略称	調査名(略称)	調査種別	調査期間	面積㎡	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	77	2005	-	農学部弥生講堂アネックス	立会	2006.1.12	5	大成	江戸
本郷	78	2006	HJF06	情報学環・福武ホール	事前	2006.6.5～12.8、2007.2.5～23	1766	大成・成瀬 追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	79	2006	-	農学部コイトロン温室	立会	2007.1.16	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	80	2006	-	工学部もの作り実験工房	立会	2007.2.22	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	81	2007	HEA07	経済学研究科学術交流棟	事前	2008.3.17～7.11、9.11～24、2009.2.2～10	433	成瀬	近代・江戸
本郷	82	2007	HKM07	懐徳門	事前	2007.6.20～7.20	34	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	83	2007	-	向ヶ丘ファカルティハウス	試掘	2007.10.22～25	50	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	84	1984	NK84	農学部共同溝	事前	1984.7.9～23	50	今村 啓爾	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	85	2007	-	薬学部東法面階段設置	立会	2008.3.14	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	86	2008	-	雨水管改修工事	立会	2009.2.2～16	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	87	2009	HTG08	東京都下水道工事	事前	2008.12.7～12.25、 2009.11.27～12.8	39	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7、8所収
本郷	88-1	2008	-	耐震対策事業ガス管改修工事	立会	2008.11.19、11.20	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	88-2	2009	-	耐震対策事業ガス管改修工事	立会	2009.5.11～13、15、23、 31、6.18、8.27	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	89	2008	-	弥生地区屋外ガス配管改修工事	立会	2008.11.25～12.17	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	90	2009	-	薬学部研究実験棟	試掘	2009.4.16	10	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	91	2009	HHP09	医学部附属病院立体駐車場	事前	2009.12.13～2010.2.25	3034	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	92	2009	HGG09	学生支援センター	事前	2009.7.21～7.30	440	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	93	2009	H7I09	伊藤国際学術研究センター	事前	2009.7.30～2010.2.12、 5.17～5.31	1710	成瀬・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	93	2011	H7I09	伊藤国際学術研究センター外構	事前	2011.7.21～26	-	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	94	2009	HNS09	分生研・農学部総合研究棟	事前	2010.1.25～3.31、7.28～ 8.11	1731	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	95	2009	-	農学生命科学研究科フードサイ エンス棟	立会	2009.10.22、11.2	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	96	2009	-	工学部新3号館建替時待避用仮 設建物	試掘	2009.12.14～12.17	64	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	97-1	2009	HKS09	基幹整備(流域⑧排水)A区	事前	2010.3.3～3.19	26	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	97-2	2010	HKS09	基幹整備(流域⑧排水)B区	事前	2010.11.27～12.6	42	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	98	2010	-	原子動力実験棟	試掘	2010.4.9	16	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	99	2011	HLS10	法学部3号館増築	事前	2010.7.20～8.23、 2011.1.18～26、2011.5.16 ～7.26	734	追川・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収 『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	100	2011	HK311	工学部3号館	事前	2011.1.4～10.11	4595	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	101	2010	HMH10	ドナルド・マクドナルド・ハウ ス東大	事前	2010.12.9～2011.1.26	30	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	102	2010	-	本郷通り圍障改修立会	立会	2010.12.2、12.13	-	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	103	2010	HKK11	春日門横教育研究棟	試掘	2010.7.30～8.11	-	大成・小川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収 『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	104	2010	-	防犯用ネットワークカメラ貸 借工事	立会	2010.7.30～8.11	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	105	2010	-	弥生地区屋外ガス配管改修工事	立会	2010.8.31～9.11	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	106	2010	-	薬学ゲート前舗装改修工事	立会	2011.2.7、9、15～16、 18、21～22	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	107	2011	-	総合図書館前クスノキ移植	立会	2011.6.09～15	-	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	108	2011	-	旧原子力センター別館改修	立会	2011.6.22	16	堀内	遺構・遺物なし
本郷	109	2011	-	仮設キュービクル設置工事	立会	2011.9.1	18	大成	遺構・遺物なし
本郷	110	2011	-	クリニカルリサーチセンターA 棟Ⅱ期	試掘	2011.11.29～12.02	6	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	111	2011	-	総合図書館西側道路	立会	2011.10.18	4	堀内	江戸
本郷	112	2011	-	クリニカルリサーチセンターB 棟	試掘	2011.11.29～12.02	25	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	113	2011	HHWB12	医学部附属病院入院棟Ⅱ期	事前	2012.3.1～11.30	2786	成瀬・香取	近代、江戸、古墳、縄文、旧石器
本郷	114	2010	-	下水本管改修	立会	2010.6.17、21	-	原	遺構・遺物なし
本郷	115	2012	HTP12	図書館前クスノキ移植	事前	2012.5.07～6.18	60	追川	試掘なし・江戸
本郷	116	2011	-	旧原子力研究総合センター別館 電気設備工事	立会	2011.9.20、10.25	-	原	遺構・遺物なし
本郷	117	2011	-	農学部3号館西側舗装改修	試掘	2011.12.14～2012.2.5	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	118	2011	-	ガス管改修工事	試掘	2011.9.5～9.19	18	原	遺構・遺物なし

地区	番号	年度	略称	調査名(略称)	調査種別	調査期間	面積㎡	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	119	2011	HNS09	分生研・農学部総合研究棟	事前	2011.7.26～27	7	原	遺物のみ
本郷	120	2011	-	分生研・農学部総合研究棟基幹整備工事	試掘	2011.9.10～17、11.20～21	9	原	遺構・遺物なし
本郷	121	2012	-	農学部1号館北側舗装改修工事	立会	2012.7.10～14	2	原	近代
本郷	122	2012	-	理学部2号館北側舗装改修工事	立会	2012.7.14	1	原	遺構・遺物なし
本郷	123	2012	-	春日門扉やりかえ	立会	2012.9.4、10	5	大成	遺構・遺物なし
本郷	124	2012	-	農学生命科学研究科閉鎖系温室新営工事	立会	2012.9.26～27	31	原	遺構・遺物なし
本郷	125	2012	未定	クリニカルリサーチセンターA棟I期	事前	2012.12.17～2014.9.12	3341	追川・小川	江戸・古墳・縄文・旧石器
本郷	126	2012	-	原子力別館北側雨水配管改修その他	立会	2012.12.17～	21	原	遺構・遺物なし
本郷	127	2012	-	工学部4号館屋外排水管改修工事	試掘	2012.2.20	10	原	遺構・遺物なし
本郷	128	2012	-	農学部1号館北側他舗装改修工事	立会	2013.1.21、2.1、20、3.7、11、12、14、15、18、19	2750	原	遺構・遺物なし
本郷	129	2012	-	理学部2号館舗装改修工事	立会	2012.12.25、26、2013.1.21、2.1、3	1000	原	遺構・遺物なし
本郷	130	2012	-	工学部3号館施設整備(ガス)	事前	2012.11.5、13		成瀬・堀内	遺構・遺物なし
本郷	131	2012	-	医学部モニュメント	立会	2013.3.25	11	追川	近代

駒場I地区調査一覧

地区	番号	年度	略称	調査名(略称)	調査種別	調査期間	面積㎡	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
駒I	1	1992	-	教養学部保健センター	試掘	1992.3.19	28	武藤	遺構・遺物なし
駒I	2	1993	FGE	教養学部情報教育棟(FGE)	事前	1993.8.10～10.20	940	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
駒I	3	1993	-	数理学部研究科棟	試掘	1993.5.8～15	350	堀内	縄文
駒I	4	1994	-	数理学部研究科棟擁壁工事	立会	1995.1.20～27	-	武藤	近代
駒I	5	1994	-	数理学部研究科棟関連東電マンホール増設・管路新設工事	立会	1995.1.24～4.12	-	武藤	平安・縄文
駒I	6	1995	-	教養学部伝統文化活動施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒I	7	1995	-	教養学部学生用浴室・シャワー施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒I	8	1995	-	数理学部研究科棟ガス・水道管理設工事	立会	1995.5.17～18、6.27～28	-	武藤	遺構・遺物なし
駒I	9	1996	数理	数理学部研究科II期棟(数理)	事前	1996.12.12～1997.2.6	1160	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
駒I	10	1997	-	教養学部キャンパス・プラザ	試掘	1997.4.24	41	武藤	遺構・遺物なし
駒I	11	1999	-	教養学部総合研究棟	試掘	1999.7.26～8.3	130	原	遺構・遺物なし
駒I	12	2000	KL	駒場図書館(KL)	事前	2000.7.27～8.30	1778	大成・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
駒I	13	2001	-	教養学部総合研究棟	試掘	2001.10.24～25	60	堀内	遺物・遺構なし
駒I	14	2002	-	教養学部総合研究棟	試掘	2002.3.25～26	53.4	大成	遺物・遺構なし
駒I	15	2005	KCP	コミュニケーションプラザ	事前	2005.4.22～7.21	4327	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
駒I	16	2003	KGK	国際学術交流棟	事前	2003.5.16～7.9	620	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
駒I	17	2005	-	教養学部5号館他改修工事	立会	2005.8.10、17、19	300	大成	遺構・遺物なし
駒I	18	2006	-	教養学部8号館エレベーター敷設工事	立会	2006.10.20	-	堀内	遺構・遺物なし
駒I	19	2006	-	教養学部ロッカー棟	試掘	2006.11.13～16	21	堀内	遺構・遺物なし
駒I	20	2007	-	初年次活動センター新築工事	立会	2007.12.20	85.39	追川	遺構・遺物なし
駒I	21	2009	-	基幹整備(排水)工事	立会	2010.1.14、21、28	34	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
駒I	22	2009	-	理想の教育棟	試掘	2010.2.1～5	220	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
駒I	23	2011	-	巻薬練習場	立会	2012.1.23	-	成瀬	遺構・遺物なし
駒I	24	2012	-	屋外トイレ新営工事	立会	2012.7.23～25	-	堀内	遺構・遺物なし
駒I	25	2012	-	理想の教育棟II期棟	試掘	2012.7.30～8.3		堀内	遺構なし・近代遺物あり
駒I	26	2012	-	コミュニケーションプラザ横共同溝埋設工事	試掘	2012.9.24～27		小川	遺構・遺物なし
駒I	27	2012	-	倉庫新営工事	立会	2013.2.28	40	香取・堀内	遺構・遺物なし

駒場Ⅱ地区調査一覧

地区	番号	年度	略称	調査名(略称)	調査種別	調査期間	面積㎡	担当者	遺構・遺物の年代
駒Ⅱ	1	1996	-	生産技術研究所校舎	試掘	1996.5.14	25	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	2	1996	-	先端科学技術研究センター校舎4号館	試掘	1996.5.15～17	92	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	3	1996	-	生産技術研究所校舎	試掘	1996.10.24～25	20	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	4	1998	-	設備センター	試掘	1998.4.27	13	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	5	1998	-	国際・産学共同研究センター	試掘	1998.8.5	90	原	縄文
駒Ⅱ	6	1998	-	生産技術研究所事務図書棟暫定施設	試掘	1998.12.13～15	50	大成	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	7	2002	-	駒場オープンラボラトリー	試掘	2002.12.5	55	成瀬	縄文土器(阿玉台)
駒Ⅱ	8	2003	-	総合研究実験棟	試掘	2003.8.6	34	追川	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	9	2008	-	保育施設	立会	2008.7.9～14	-	大成	遺構・遺物なし

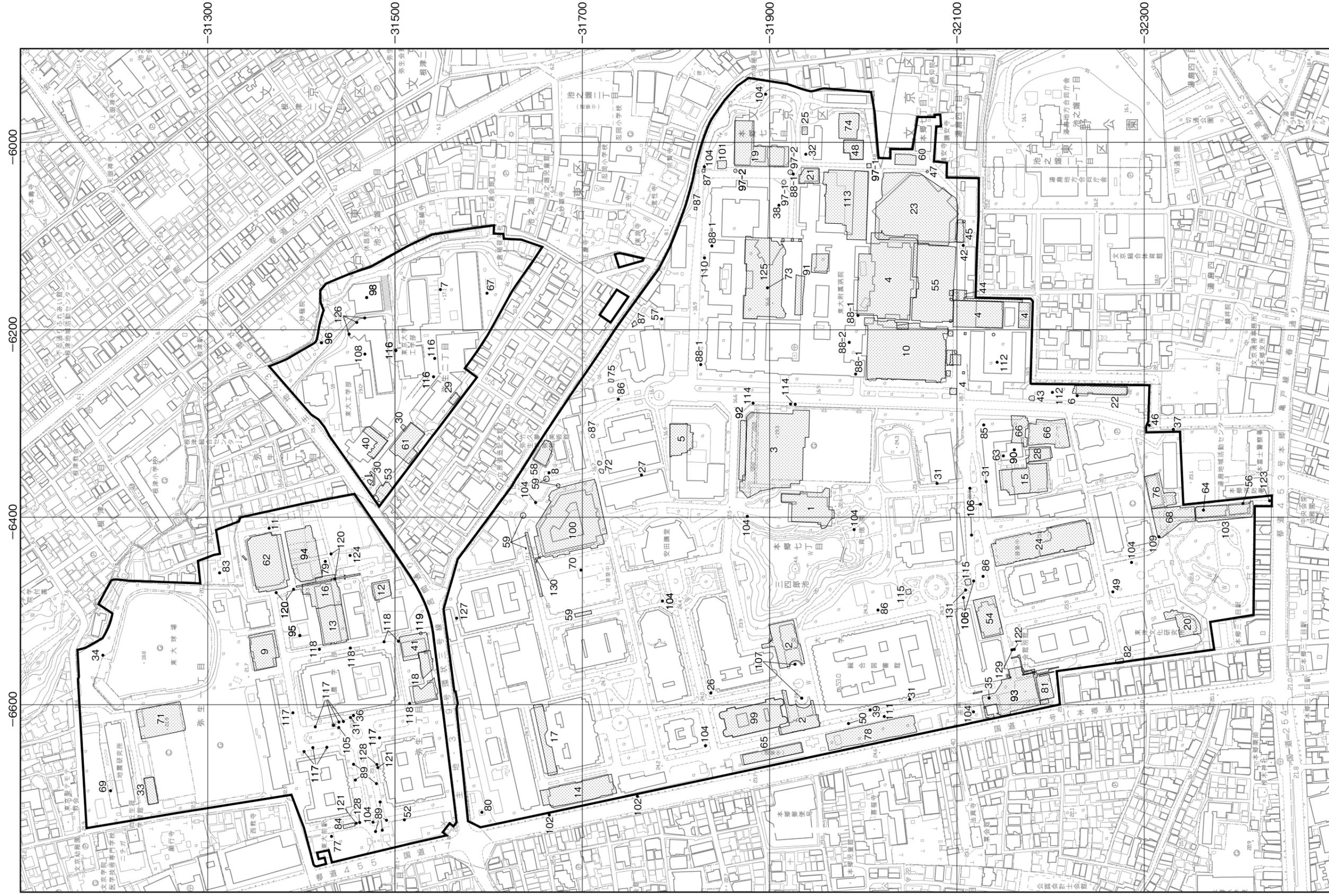
白山地区調査一覧

地区	番号	年度	略称	調査名(略称)	調査種別	調査期間	面積㎡	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
白山	1	1991	-	理学部附属植物園研究温室Ⅰ期 [原町遺跡]	試掘	1991.7.24～25	5	武藤	縄文
白山	2	1992	KO	理学部附属植物園研究温室Ⅱ期 [原町遺跡]	事前	1992.5.25～6.6	200	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
白山	3	2000	KI	総合研究博物館小石川分館増築	事前	2000.11.27～12.4	70	成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
白山	4	2002	KNK	農学生命科学研究科附属小石川 樹木園・根圏観察室	試掘	2002.9.2	21	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
白山	4	2002	KNK	農学生命科学研究科附属小石川 樹木園・根圏観察室	事前	2002.9.24～10.7	91	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
白山	5	2007	BGY07	理学系研究科附属植物園・医学 部創設150周年記念(小石川養 生所復元)建物	試掘	2007.9.3～4	43	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
白山	6	2010	KBG10	理学系研究科附属植物園本園・ 下水・電源ケーブル埋設溝・埋 設溝	事前	2010.9.6～15	102	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
白山	7	2010	-	理学系研究科附属植物園本園・ 旧小石川養生所井戸欄改修	立会	2011.1.17	-	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
白山	8	2011	-	農学生命科学研究科小石川樹木 園・万年堀改修	立会	2011.4.1	30	成瀬	遺構・遺物なし

その他の地区調査一覧

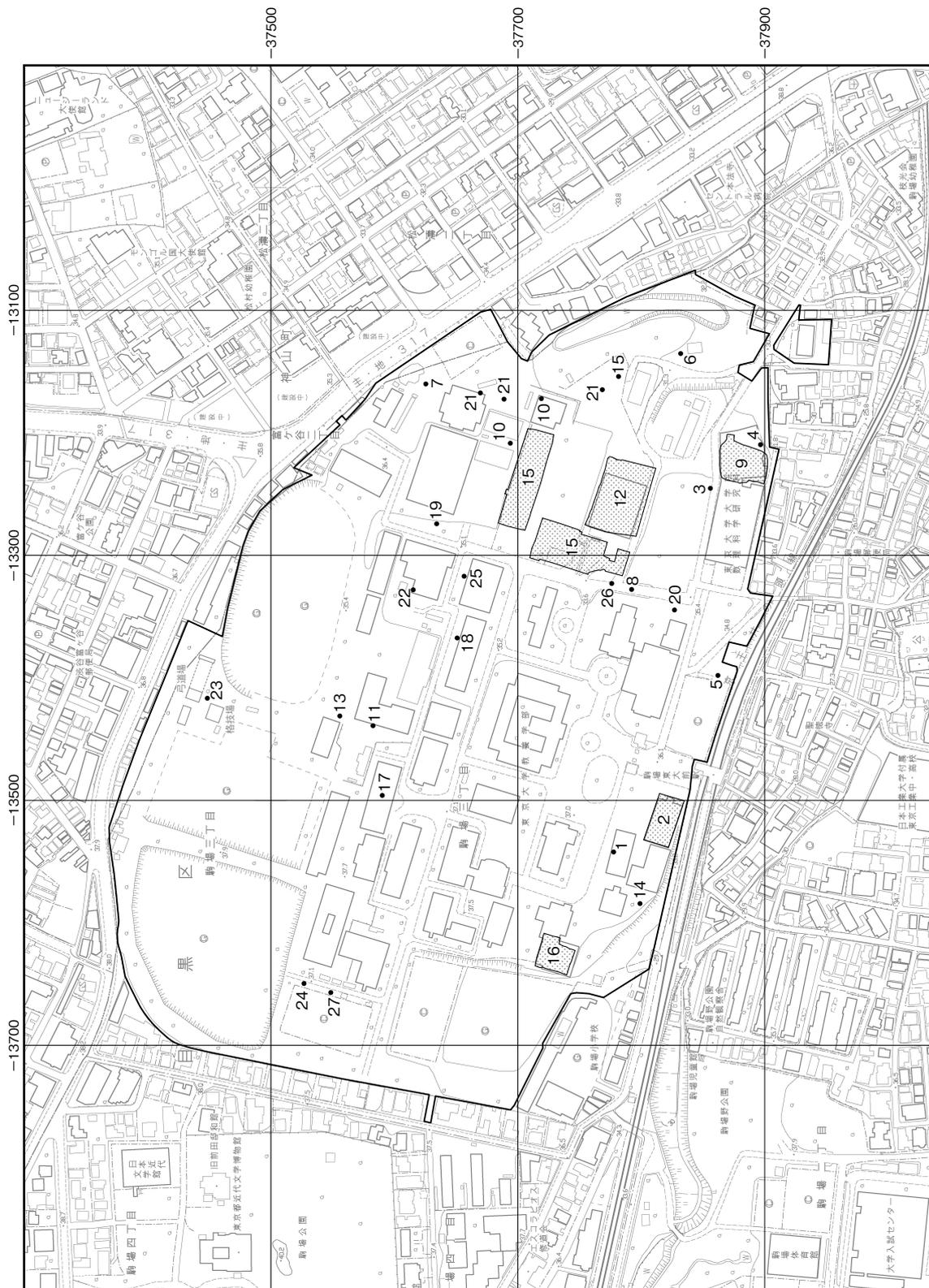
地区	番号	行政区	年度	略称	調査名(略称)	調査種別	調査期間	面積㎡	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
他	1	三浦市	1988	-	理学部附属臨海実験所新研究棟 [新井城]	試掘	1988.7.4～8.2	80	寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
他	2	文京区	1991	-	追分学寮	試掘	1991.8.23～24	16	成瀬	江戸
他	3	豊島区	1991	-	豊島学寮	試掘	1991.8.26～30	29	武藤	遺構・遺物なし
他	4	三鷹市	1991	-	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]	試掘	1991.9.15～30	350	堀内・成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8 長嶋遺跡』
他	5	三鷹市	1991	-	井の頭学寮	試掘	1991.9.30～10.15	20	成瀬	遺構・遺物なし
他	6	港区	1991	-	白金学寮	試掘	1991.11.25～26	10	武藤	江戸
他	7	三鷹市	1992	三广1	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡] Ⅰ期	事前	1992.6.29～9.19	2100	堀内・成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8 長嶋遺跡』
他	8	港区	1992	-	医科学研究所看護師宿舎	試掘	1992.7.1	8	武藤	遺構・遺物なし
他	9	三浦市	1992	MMBS	理学部附属臨海実験所新研究棟 [新井城]	事前	1992.7.20～9.25	1700	武藤・寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
他	10	三浦市	1993	-	理学部附属臨海実験所新研究棟 関連電機・水道管路新設工事	立会	1993.4.20～23	-	武藤	中世
他	11	三浦市	1993	-	理学部附属臨海実験所新研究棟 関連海水循環水路新築工事	立会	1993.5.7～8	-	武藤	中世
他	12	三鷹市	1993	三广2	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡] Ⅱ期	事前	1993.5.28～11.8	3280	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8 長嶋遺跡』

地区	番号	行政区	年度	略称	調査名(略称)	調査種別	調査期間	面積 ㎡	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
他	13	三鷹市	1994	三广3	三鷹国際交流会館 [長嶋遺跡] Ⅱ期	事前	1994.5.13 ~ 8.17	1950	堀内・鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発 掘調査報告書8 長嶋遺跡』
他	14	千葉市	1994	GMB	検見川運動場体育セミナーハウス [玄蕃所遺跡]	確認	1994.7.11 ~ 18	930	堀内・鮫島	『東京大学構内遺跡調査研究年 報』1所収
他	15	千葉市	1994	GMB	検見川運動場体育セミナーハウス [玄蕃所遺跡]	事前	1994.7.19 ~ 8.21	496	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年 報』1所収
他	16	港区	1994	-	医科学研究所 MRI-CT 棟装置棟	試掘	1995.3.9	8	武藤	遺構・遺物なし
他	17	港区	1995	-	医科学研究所ヒトゲノム解析セ ンター棟	試掘	1995.7.11	8	武藤	遺構・遺物なし
他	18	柏市	1996	-	柏キャンパス校舎	試掘	1996.10.28 ~ 29	125	武藤	遺構・遺物なし
他	19	港	2000	SBS00	医科学研究所附属病院診療棟・ 総合研究棟	事前	2000.10.27 ~ 2001.3.9	4280	堀内・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年 報』4所収
他	20	文京	2007	-	追分国際学生宿舎	試掘	2007.8.27 ~ 31	84	原・堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年 報』7所収
他	21	文京	2007	-	追分国際学生宿舎	事前	2007.12.3 ~ 2008.3.25	776	原	『東京大学構内遺跡調査研究年 報』7所収



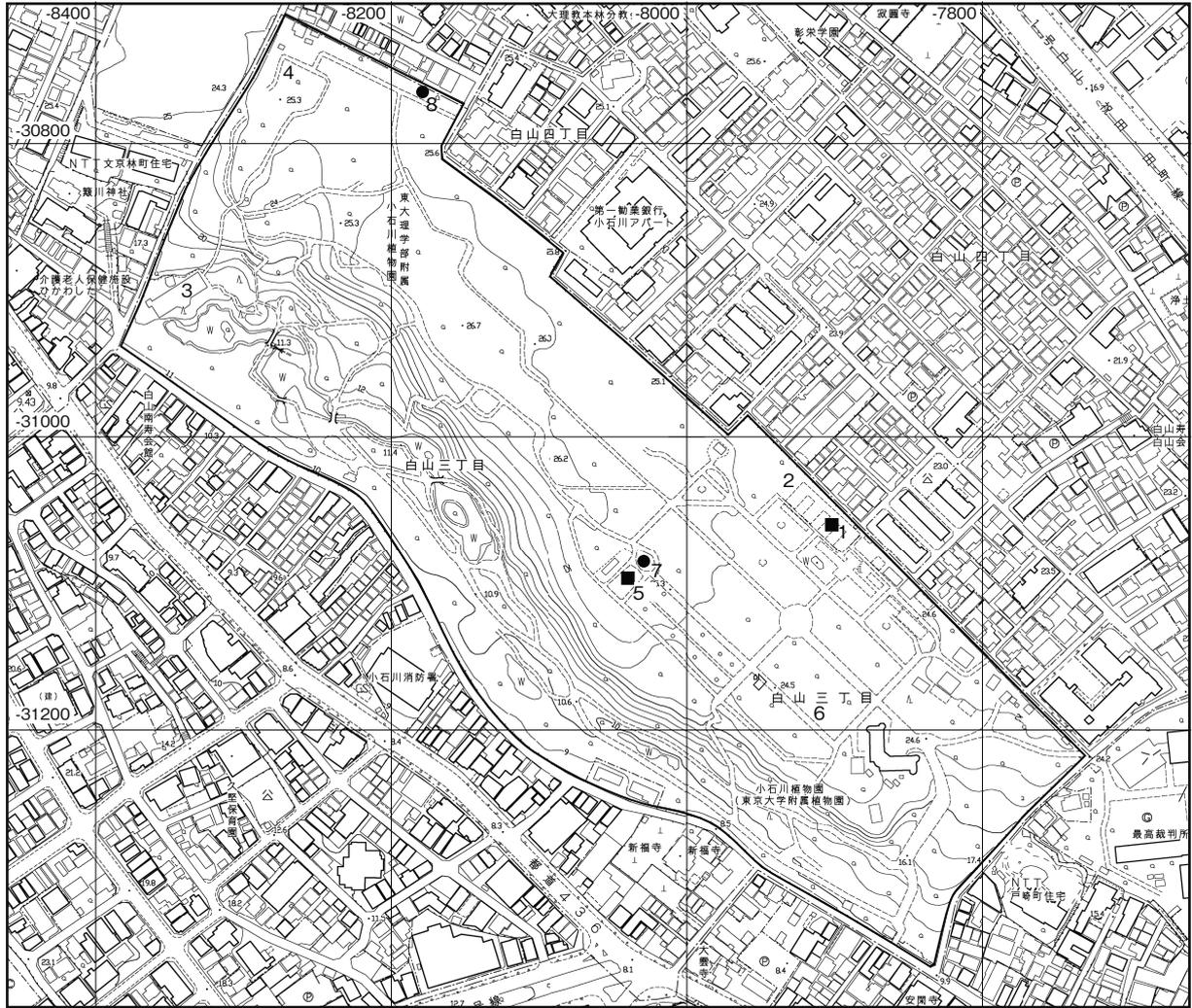
本郷地区調査地点

世界測地系
 ※北緯 35° 42'
 東経 139° 45'
 S=1/4000



世界測地系

駒場I地区調査地点



白山地区調査地点

第 1 部 2011 年度調査室事業概要

第 I 章 埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）

2011 年度は、本郷地区、駒場地区、白金地区において、以下の通りの調査を実施した。

本郷地区では、事前調査が前年度から継続中の本郷 100 工学部 3 号館を含めて 5 件、試掘調査が 6 件、立会調査が 5 件を行った。このうち次年度にまたがって継続している調査は、事前調査の本郷 103 春日門横教育研究棟、本郷 113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期である。

事前調査を行った本郷 100 工学部 3 号館は、縄文時代、平安時代（住居跡 3 棟）、江戸時代（加賀藩本郷邸、水戸藩駒込邸）、近代（東京帝国大学）、本郷 99 法学部 3 号館増築 3 期では江戸時代（加賀藩本郷邸）、本郷 119 分生研・農学部総合研究棟では江戸時代（水戸藩駒込邸）、本郷 103 春日門横教育研究棟では江戸時代（幕臣地、加賀藩本郷邸）、本郷 113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期では古墳時代、江戸時代（富山藩邸）の遺構、遺物が出土している。

〈事前調査〉

- ・継続（2011 年 1 月 4 日）～ 10 月 11 日 本郷 100 工学部 3 号館（担当：堀内）
- ・2011 年 5 月 16 日～ 7 月 26 日 本郷 99 法学部 3 号館 3 期（担当：追川）
- ・2011 年 7 月 26 日～ 27 日 本郷 119 分生研・農学部総合研究棟（担当：原）
- ・2011 年 12 月 1 日～継続 本郷 103 春日門横教育研究棟（担当：大成）
- ・2012 年 3 月 1 日～継続 本郷 113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期（担当：成瀬・香取）

〈試掘調査〉

- ・2011 年 4 月 13 日～ 19 日 本郷 99 法学部 3 号館 3 期（担当：追川）
- ・2011 年 9 月 5 日～ 19 日 本郷 118 ガス管改修工事（担当：原）
- ・2011 年 9 月 10 日～ 17 日、11 月 20 日～ 21 日 本郷 120 分生研・農学部総合研究棟基幹整備工事（担当：原）
- ・2011 年 11 月 29 日～ 12 月 2 日 本郷 110 クリニカルリサーチセンター A 棟Ⅱ期（担当：追川）
- ・2011 年 11 月 29 日～ 12 月 2 日 本郷 112 クリニカルリサーチセンター B 棟（担当：追川）
- ・2011 年 12 月 14 日～ 2012 年 2 月 5 日 本郷 117 農学部 3 号館西側舗装改修（担当：原）

〈立会調査〉

- ・2011 年 6 月 9 日～ 15 日 本郷 107 総合図書館前クスノキ移植（担当：追川）
- ・2011 年 6 月 22 日 本郷 108 旧原子力センター別館改修（担当：堀内）
- ・2011 年 9 月 1 日 本郷 109 仮設キュービクル設置工事（担当：大成）
- ・2011 年 9 月 20 日、10 月 25 日 本郷 116 旧原子力研究総合センター別館電気設備工事（担当：原）
- ・2011 年 10 月 18 日 本郷 111 総合図書館西側道路（担当：堀内）

駒場 I 地区では、1 件の立会調査を行った。

〈立会調査〉

- ・2012 年 1 月 23 日 駒場 I 23 巻藁練習場（担当：成瀬）

白山地区では、1件の立会調査を行った。

〈立会調査〉

- ・2011年4月1日 白山8農学生命科学研究科小石川樹木園・万年堀改修（担当：成瀬）

第1節 本郷構内の事前調査

1. 本郷99 法学部3号館3期 (HLS10-3)

所在地 東京都文京区7-3-1 (文京区No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2011年5月16日～7月26日

調査面積 406.17㎡

調査担当 追川 吉生

1. 調査の経緯と経過

東京大学は本郷キャンパス(文京区本郷7丁目)内に所在する法学部3号館の中庭部分に増築と、それに伴う既存建物内の耐震補強工事を計画した。キャンパス内は本郷台遺跡群として登録されており、隣接する法学部4号館の建設に際しては、旧石器時代から江戸時代の遺跡が発掘されている(東京大学遺跡調査室1990)。そのため造築工事を行う中庭部分に関して2010年7月と12月に事前調査を実施した。

一方、耐震補強工事を行う既存建物内部に関しては、当該建物が地階を有しないものの、基礎やそれ以前の校舎による攪乱の影響が予想された。そこで2011年4月13日～19日まで試掘調査を実施して遺跡の遺存状況を確認した。その結果、既存建物の基礎などによって一部は破壊されているものの、江戸時代の遺構が面的に残っていることが明らかになった。これを受けて5月16日～7月26日の日程で、事前調査を実施した。



1 図 調査地点位置図

2. 調査結果

発掘調査は耐震補強工事に伴う掘削対象となる部分を、A区～F区の6区画に区切り実施した(2図)。各区ともに生活面が3面認められ、江戸時代の遺構を約160基検出した。江戸時代以前の遺構は認められないが、縄文時代後期を主体とする土器片が23点出土した。そのうち17点がC区から出土している(3図)。またD・E区東側に本地点1期、B・F区間に同じく2期の調査区が位置するが、本期の調査ではそれらと連続する遺構は検出していない。

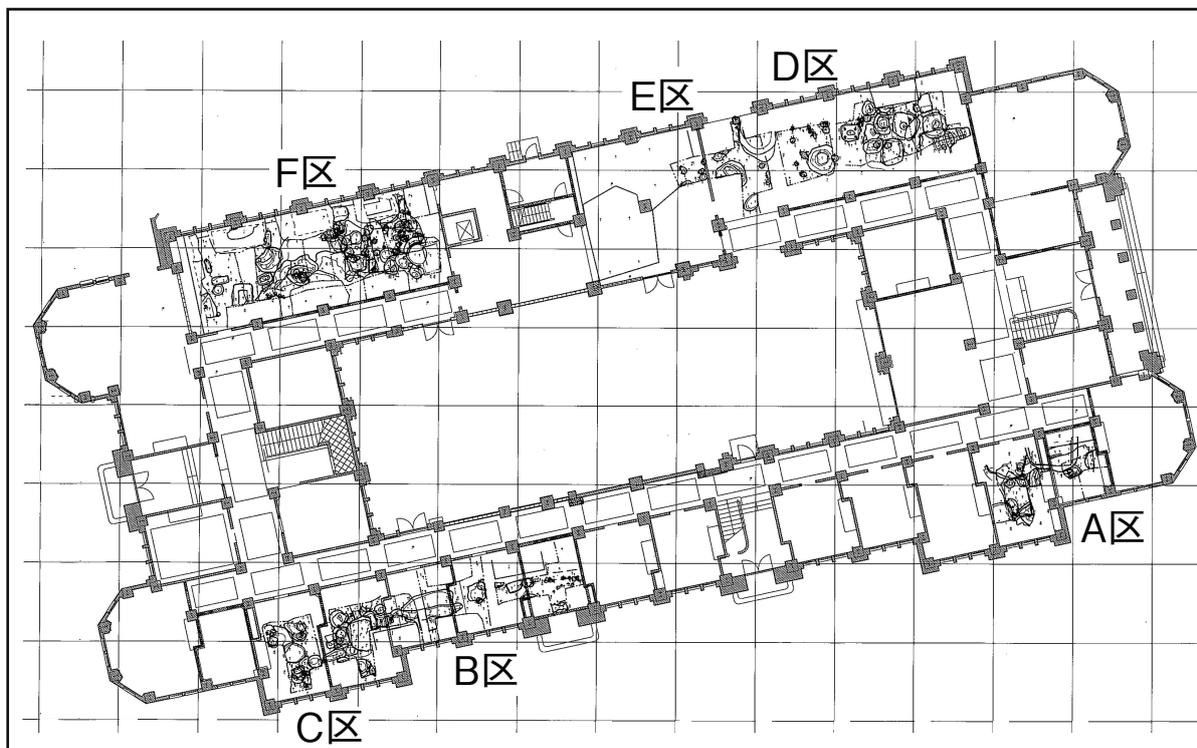
江戸時代の遺構には地下室・土坑・ピット・便所・植栽痕などがある。特に地下室は確認面から2～3mと深いものを10基検出した(5、6図)。中でもD区SU176(4図)は、開口部が南北3.0m、東西1.5m以上、深さ4m以上で7段の階段を有するD区のSU176(4図)をはじめ、これらの遺構の南北軸は春日通りに直交しており、加賀藩邸内の建物配置に照らし合わせれば詰人空間のあり方を踏襲していることがうかがえる。植栽痕はC区南側、D区南側、A区南側で、著しく切り合いながら検出された。しかし地下室と重なりあう状況は認められない。

1840～45年頃の藩邸を描いたとされる『加賀藩本郷邸図』をみると、本地点周辺は桁行方向を東西とする長屋が並ぶ一角に位置している。法学部3号館敷地内に隣り合う長屋の境があると予想されたが、改築工事の工法上調査対象外となっている部分もあり、この点については更に検討を加える必要がある。

【参考文献】

「法学部3号館増築地点1期」『東京大学構内遺跡調査研究年報8』

「法学部3号館増築地点2期」『東京大学構内遺跡調査研究年報8』



2図 調査区全体図



3 図 縄文土器出土状況 (C区)



4 図 SU176 (D区)



5 図 遺構検出状況 (D区・右端がSU176)



6 図 遺構検出状況 (A区)

2. 本郷100 工学部3号館 (HK311)

所在地 東京都文京区7-3-1 (文京区No.47本郷台遺跡群内)

調査期間 2011年1月4日～10月11日

調査面積 4,595㎡

調査担当 堀内 秀樹

1. 調査の経緯と経過

東京大学は、工学部3号館の解体し、新3号館の建築を計画した(1図)。建設予定地点は、文京区47本郷台遺跡群として周知の遺跡の範囲内であり、発掘調査の必要があった。当該地は、解体まで現存した帝国大学時代に建築された工学部3号館のコンクリート基礎、1階、ドライエリアによって大きく削平を受けていることが遺存している設計図面などより推定されていたが、近接する発掘調査地点の状況や明治16年に作られた陸軍による測量図などとの照合により基礎の下部に埋蔵文化財が遺存している可能性が強いと判断された。

発掘調査は2011年1月4日から開始し、同年10月11日に終了した。

2. 遺跡の概要

発掘調査の結果、近代、近世、中世、平安時代、縄文時代の遺構、遺物が確認された。遺跡は南北に延びる本郷台地東側に位置し、現在も湧水である三四郎池から流下する小河川によって開析された谷が遺跡のほぼ中央を南北に貫き、それに接合する東西に延びる小支谷が工学部2号館側(西側)に確認された。

近代の遺構・遺物は帝国大学時代に建設された建物とそれに伴う上下水道、井戸などが確認された。江戸時代は加賀藩本郷邸、水戸藩駒込邸に伴う建物跡、下水道、井戸、地下室、硬化面、土取坑、廃棄土坑、段切りなど約600基が確認された。また、これらに伴う遺物は、陶磁器類、瓦、金属製品、木製品、自然遺物などコンテナ箱に約900箱出土した。中世は詳細な年代は不明であるものの溝状遺構と板碑などの遺物が少量出土した。平安時代は竪穴式住居が2棟とピットが約10基、それに伴って須恵器、土師器などの遺物がコンテナ箱3箱出土した。縄文時代は明瞭な遺構は確認できなかったが、早期～晩期にかけての土器片が少量出土した。

(1) 出土した遺構・遺物 (2図)

○近代 (2-1図)

調査前に解体した旧工学部3号館は内田祥三により設計され、昭和14年に完成した建物であった。建物は127本の直径1.5～1.8mのコンクリートの円柱基礎によって支える設計となっていた。設計図によると円柱は長さは11.15～15.30mで内部空洞の筒状を呈しており、上部には円盤状のコンクリートが被せられている。調査時には円柱の周囲には板が隙間なく巡らされた状態で確認されており、この基礎は井戸のように円柱状に掘り下げ、周囲に板を巡らした上でコンクリートを流し込む工法で作られたことが確認できた(3図)。この旧工学部3号館と建物周囲に設けられたドライエリアによって調査区南東、南西、北東部の台地にかかる比較的高い部分の遺跡が壊されていた。また、調査区南

側に「コ」の字状にレンガ基礎が確認された。このレンガ基礎は位置や基礎の形状、図面との照合により明治43年に建築された旧帝国大学の動物学地質学鉱物学教室の建物であったことが確認された。建物は近世に遺跡中央を南北に貫いていた谷を最大3m埋めて平坦地を作り出して建てられていた。基礎は、ロームが遺存している南東、南西の比較的高い場所では人頭大の栗石の上にコンクリートを5層に分けて流し、その上にレンガを積み上げられ(4図)、低い場所では栗石の下部に松杭が密に打たれていた。建物周囲にはこれに伴う土管などが確認された。

○近世 (2-2 図)

近世の遺跡は、旧3号館の他に前述した旧帝国大学の動物学地質学鉱物学教室の建物によって大きく破壊され、遺跡の南側における遺存度は不良であった。遺構の多くは調査区北側、深い部分を中心に確認された。これらは加賀藩本郷邸と水戸藩駒込邸に伴う遺構・遺物である。

[17世紀]

17世紀、特に中葉以前に比定される遺構の数は少なく、下屋敷時代には積極的に当該地が利用されていないと推定された。しかし、中央の流路は17世紀初頭以前の谷の東側を人工的に開削し、流路として利用していることが判明し、17世紀前葉には(SD404下段・SD448・SD264下段)調査区南側で「S」字状にカーブしていたものを17世紀中～後葉には(南からSD404上段・SD264上段・SD408・SD667)直線的に作り直している。他の遺構は17世紀前半にはSD264西岸D・E-6区付近にいくつかの土坑が確認されている。17世紀後半にはSD264西側の傾斜地に盛土が形成され、D・E-6区付近にはピットを伴う建物跡、硬化面、炉址などが確認される。また、これにアクセスするように道状の硬化面(D-8、C-8区～SR114)、SD264に架かる橋と思われる遺構(SK145)が検出され、17世紀後半には溝とその周囲の土地利用が本格化した。

・水路遺構 (SD404下段・SD448・SD264下段 (17c前)、SD404上段・SD264・SD408・SD667 (17c後))

17世紀段階の水路遺構(同一遺構であるが攪乱によって分断されていたため別番号で調査を行った)は、前述のようにその当初自然地形を一部改変して構築された。

17世紀前半には調査区南側(SD448部分)で「S」字状に蛇行していたことが確認された(5図)。また、南壁付近ではあまり人為的に手を入れていなかったらしく、流路は場所を変えながら2m以上砂を多く含んだ土が重層的に堆積し、側板などの設備は確認されなかった。流路中程のD-7区付近では橋に伴うと思われる部分のみ側板が設置されており、下流にあたる北側にも人工的な施設は構築されていない。

17世紀後半では蛇行部分が直線的に変更され、側板などの区画が構築されるように変化が窺える。しかし、これも部分的に構築されるにとどまっており、全体的に側板あるいは石積みなどが構築されるようになるのは、18世紀前半である。この段階から遺構の覆土に玉砂利が多く含まれるようになり、溝底に敷いたか上流の育徳園改修により洲浜などが新たに設けられたものと考えている(6図)。

この水路遺構からは漆、桶、箱、下駄、曲物などの多くの木製品が出土している他、蓋状の銅製品、中世の板碑なども確認されている(7図)。

・土取り遺構 (SK286)

調査区北西から中央にかけて、加賀藩本郷邸縁辺部に位置する大土坑である(8図)。遺構の西は調査区域外になるが、区内で確認された規模は、長径33m、短径16m、深さは約3mを計測する。共伴する遺物は微量であるが、土坑埋没後にその上に構築された遺構との切り合いから17世紀中葉頃に廃絶されたと推定できる。遺構は規模や形状から土取り穴であると考えられるが、水戸藩との屋

敷境に沿って構築されており、当該地が空閑地であったことが看取できる。屋敷の変遷から本土坑は、慶安3（1650）年、天和2（1682）年に起こった屋敷の火災の後に行われた御殿の造成に伴う遺構であろうと推定される。

[18世紀]

18世紀前半以降、遺構数が増加する。加賀藩邸縁辺部に構築された大土坑SK286の埋没後、一定の間隔で列状に並ぶ地下室群（SK265、SU280、SU278、SU458、SU504、SU486、SU576、SU500、SU539、SU614など）、主水路を側板や間知石を使用して改修したSD186に注ぐ支水路群（SD499、SD450、SD528、SD582、SD585など）（11図）、井戸（SE447）、硬化面など長屋に伴うと考えられる生活遺構群が有機的に確認された。こうした状況は現存している18世紀の絵図からも確認でき、この土地利用は基本的に幕末まで大きな変化なく継続されている。また、これらの南側（E-5・6、F-6区）に展開する硬化面と遺構群は、近世段階に埋没していた東西方向の谷の上に構築された遺構群であり、これらを含めた長屋空間は主水路を挟んで東側にも延びていた。主水路の東側は連続的に斜面の段切りを行い、低い部分に地下室（SU99、SU127、SU173、SU178、SU232）、井戸（SE222）が構築されている。また、水路の藩邸境部分も明確化し、境には土留めと推定される木柵などの施設も設けられていた。

・地下室（SU504）

F-4区で確認された地下室である。地下室の下半は水の影響で白色シルト化した土壌であった。地下室の坑底中央には堀込みを持った木組みの施設が認められるが（9図）、これは水はけあるいは昇降用の施設であったと推定できる。調査時においても降雨などにより地下水位が上昇すると遺構が浸水する状況になることから、水はけと共に遺構の補強なども行われており、坑底の周囲には壁補強用と思われるピットが巡っていた。

・井戸（SE447）

F-5区で確認された井戸である。井戸は井戸側が良好な状態で遺存しており、円形土坑状の付帯施設は最上部の化粧側と井戸を覆う上屋に伴うものと判断される。付帯施設の土層はロームと小礫を含む褐色土で互層をなし、版築状に突き固められていた。井戸側は約1間の長さの板を用いて筒状に組み立てられ、4箇所には箍（たが）の痕跡が確認された。井戸側の覆土内からは、片口鉢の中に入れ子状に完形の天目茶碗が2個体出土した（10図）。

・支水路（SD449、SD450）

調査区中央D-5区でメインの水路であるSD186に注ぐ。支水路は地下室や井戸などの建物軸と平行に構築され、掘方の両脇に側板を配し、木杭で止めている（11図）。側板の多くは腐食しているものの、その痕跡から必要に応じて補修、作り替えがされ、維持されていたことが確認された。また、支水路は生活面のかさ上げ、建物の変更など土地利用の変化によって位置を変えてはいるが、水路そのものは廃絶されることなく幕末近くまで機能しており、傾斜地における藩邸居住空間の雨水や生活排水処理への対応が看取された。

[19世紀]

18世紀には利用されていた主水路東側は埋め立てが進行し、同時に行われた段切り部分には一部生活ゴミなどを廃棄する最終処分場として利用されている（SK7）。西側は盛土を行いかさ上げされている部分はあるものの、基本的には18世紀同様の土地利用が継続されている。ただし、遺構、遺物量が減少していることから居住者の人数が減少している可能性が考えられる。主水路（SD281・SD186・SD186北・SD470・SD459）は幅が減少し、その両側に側板が構築されるが、多頻度

の補修、作り替え、かさ上げを行った状況が確認された。水路の勾配も一定ではなく、砂礫の堆積が顕著であった部分は、次の時代には緩傾斜となり、その前後は急傾斜になるといった状況が繰り返し確認され、堆積して河床がかさ上げされた部分には新たに側板をこれまでであったものより上に構築するなどの改修が行われている。この河床の上昇が周囲の盛土を促したとも考えられる。

屋敷境の状況は、主水路付近のみ18世紀末頃から石を用いて区画している。幕末期には加賀藩側では間知石を使用して3～4段、水戸藩側では自然石・間知石を混ぜて2～3段程度の石積みが施されるが(12図)、加賀藩と比較して水戸藩邸側がラフな作りとなっていた。その他の部分では屋敷境と明確に断定できるような遺構は確認されなかった。構築面がその後の造成などにより削平されてしまった可能性も考えられる。

13図は1840年代に描かれた「江戸御上屋敷絵図」に調査区を照射した図であるが、主水路の西側屋敷境に沿って東西方向に1棟、それよりやや南に南北方向、水路の東側は原図には高低差を示すトーンが水路沿いに描かれ、長屋建物は屋敷境の低い部分に境に平行して1棟、高い部分に東西方向に数棟が描かれている。こうした状況は発掘調査によって得られた成果とおおむね一致している。

・ゴミ廃棄土坑 (SK7)

C・D-8区付近で確認された廃棄土坑で、主水流へ向かう谷地形を利用して構築されている。遺構は近代の帝国大学工学部に伴う建物によって大きく削平され、全体の様子は窺えなかったが、遺存している規模は東西約10m、南北8m、深さは最大で3m程度であった。壁の傾斜は緩く、坑底に近い部分には掘込みが作られていたが、東斜面上側は斜面にゴミを投げ込んでいるような状況であった。遺物は陶磁器・土器類を中心に骨・貝などの自然遺物も多く確認された他、金属製品、木製品などコンテナ箱で100箱以上出土した(14図)。このうちイヌの骨が多く出土したことも特筆されるが、ゴミ廃棄場所から出土した状況から屋敷内で捕まえた野犬であろうと考えられる。これらは遺物の質や器種構成から詰人空間から出された日常生活廃棄物であろうと思われる。

・主水路 (北からSD281・SD186・SD186北・SD470・SD459)

19世紀にはほぼ全域にわたり、側板や石積みによって護岸される様になる(15図)。溝幅の縮小によって河床面が1m以上上昇している。これに伴い側板の補修も多頻度におよんでいるが、側板には通常の板材と丸杭の他、建築材などを転用したものも多く、角材やほぞ穴などが穿たれている材を用いて構築されている。また、水路の覆土からは陶磁器類をはじめ多量の遺物が出土し、斜面上に構築された廃棄土坑からの流れ込みの他、斜面上から投げ込まれたものも多く存在すると推定される。

・井戸 (SE373)

SE373は井戸枠、井戸側と立板、息抜き竹などの木部が極めて良好な状態で検出された(16図)。井戸枠は角材を四隅に配し、それを渡すように三段に丸材の横木で方形に組まれていた。隅木は横木が組まれる部分に刳りを入れ、横木は45度に先端を削り合わせた上に木楔で固定されていた(17図)。組まれた井戸枠の外側には枠を囲むように幅3～4寸の板材が密に差し込まれていた。隅木には墨書や刻印などが認められ、あらかじめ位置や用いられる材が選定されていたことを想起させる。

井戸側は3段分調査を行ったが、最上段の化粧側の遺存は不良であったものの、それ以下は良好な状態で遺存していた。二段目の井戸側は17枚の板材を筒状に回し、上下に隠し木釘によって連結し、これを3本の箍(たが)で固定している。その上端と下端は上下の井戸側とのすりあわせを良くするために内側が調整されており、合わせ部分もすき間ができないように角度を持たせて多角形状に組まれていた(18図)。また、井戸側の内部には廃棄時に埋められたと思われる息抜きと思われる竹が立って確認された(19図)。

○中世 (2-3 図)

中世に比定される遺構・遺物は少ない。遺構では東西に傾斜地を降るように構築されていた切り通し状遺構 (SD279) (20 図) とその周囲に点在する小ピットが該当すると思われるが、遺物が出土していないため、正確な廃棄時期は不明である。遺物は板碑が2点出土しているが、いずれも近世の層や遺構から出土したものであり、プライマリーな状態ではなかった。

○平安時代 (2-3 図)

竪穴式住居が2棟と遺跡に散在して小ピットが確認された。竪穴はいずれも近代以降に大きく削平され、全体の様子を窺うことはできなかった。竪穴は出土遺物からいずれも9世紀前半に比定され、周囲の削平や住居内外からの遺物出土状況から2棟の他に竪穴が存在していた可能性が高いと推定している。

・竪穴 (SI1001)

近代以降の削平によって遺構の南、東側の過半が失われていた。住居はいわゆる焼失住居であり、覆土には多くの焼土、床面付近には炭化材が多く出土した。出土遺物も二次的な火熱を受け表面が赤化していた。遺物は須恵器の底部周縁部ヘラケズリと糸切り離し坏、甕、土師器坏、「コ」の字状武蔵型甕等がカマド付近から出土している。このうち須恵器の坏は8個体が重なった状態で完形で出土しており (21 図)、1点には朱書き、2点には墨書で文字が書かれていた。

○縄文時代

縄文時代は早期撚糸文系、前期竹管文系、後期後葉、晩期前葉の土器片が包含層中から少量出土している。

3. 調査の成果と課題

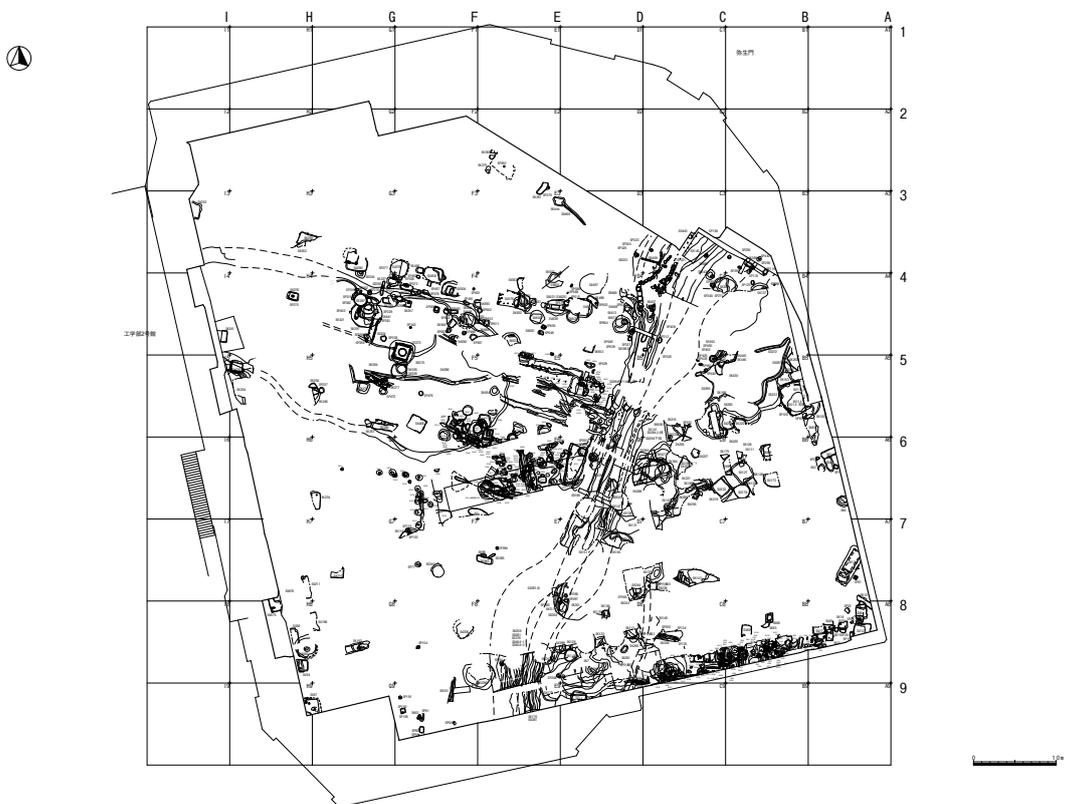
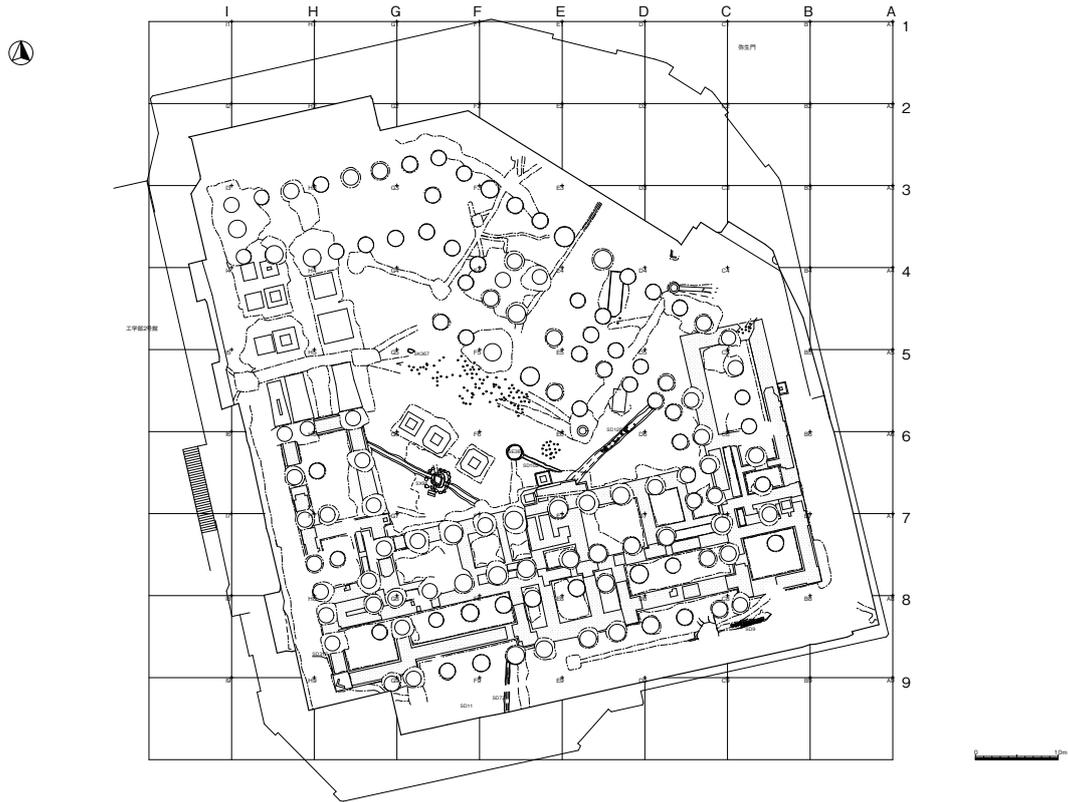
本調査は、東京大学本郷構内遺跡には数少ない低地の遺跡であったことから、木製品など台地上の遺跡では腐食して遺存しにくい遺構、遺物が出土したことが特筆される。藩邸裏の屋敷境、藩邸縁辺部の土地利用の状況などが確認できたことも大きな収穫であった。また、構内で平安時代の資料が比較的多く確認されたことも成果であった。これまで構内遺跡では弥生時代後期から古墳時代中期にかけて拠点的な集落が経営されていたことは看護師宿舎地点などの状況から判明しているが、古墳時代後期以降の活動の痕跡が希薄であった。平安時代の竪穴は御殿下記念館地点と医学部附属病院中央診療棟地点で1棟ずつしか確認されていなかった。

水路は想定していたより流路自体の変遷が確認でき、この過程で堆積した土も年代的に位置づけることも可能である。そうした土の中から確認できるであろう花粉、種子、珪藻などの分析を行い御殿庭園の植林相の変遷、園地の状況などが復元できる可能性も考えられ、考古学的成果とも合わせて今後の課題としたい。

2. 工学部3号館 (HK311)

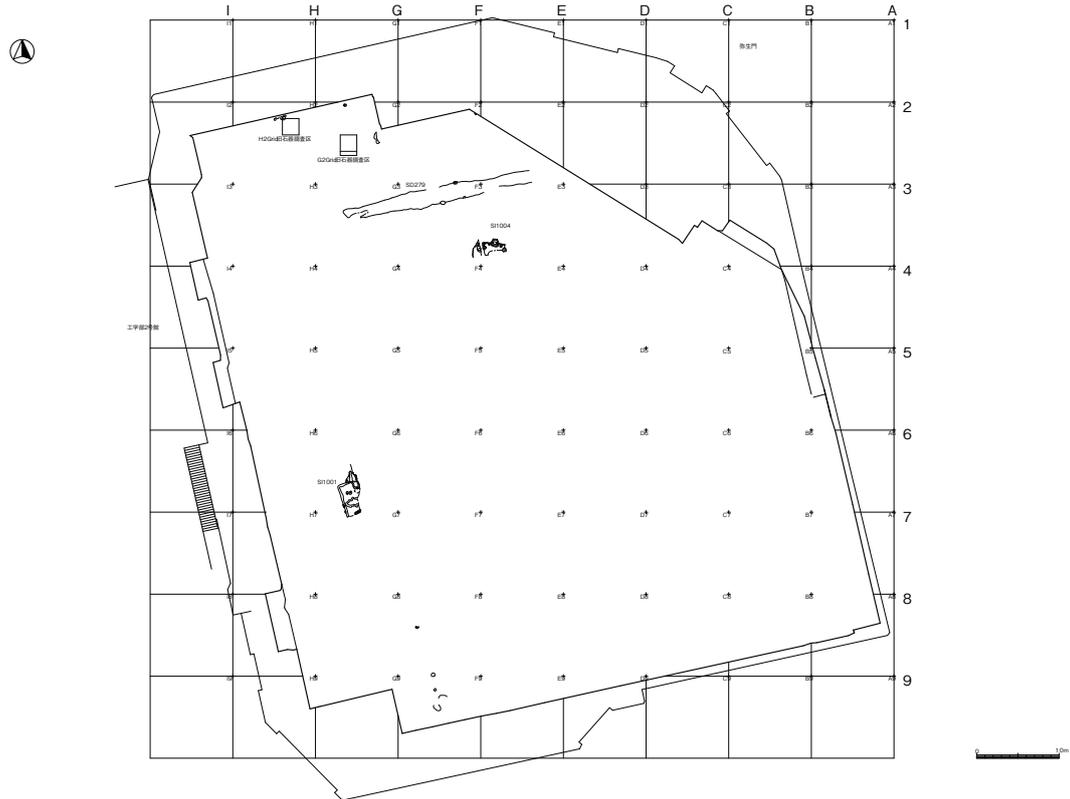


1 図 工学部3号館地点の位置



2図 遺構配置図(上:2-1図近代、下:2-2図近世)

2. 工学部3号館 (HK311)



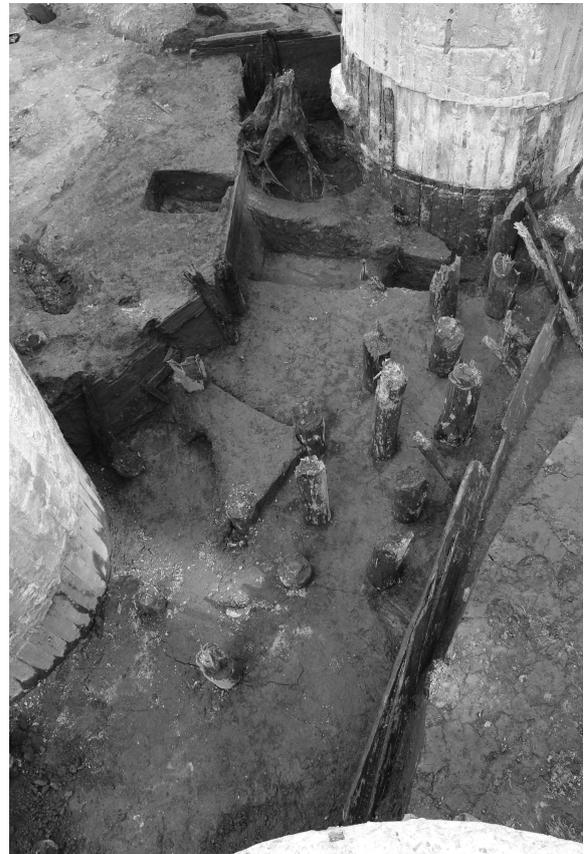
2 図 遺構配置図 (2-3 図 中世以前)



3 図 円柱状のコンクリート基礎



4 図 レンガ基礎



5 図 「S」字状に曲がる水路 (SD448)



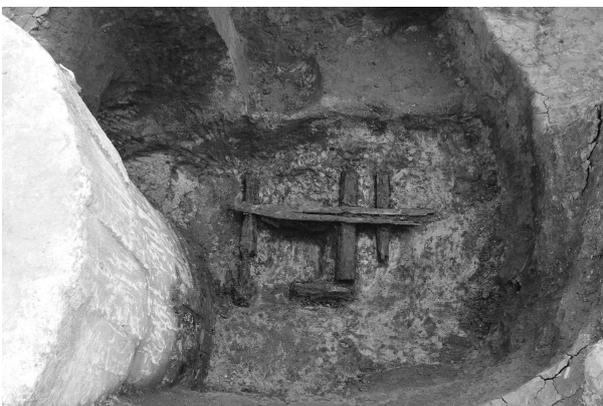
6図 SD408 砂利を含む土層



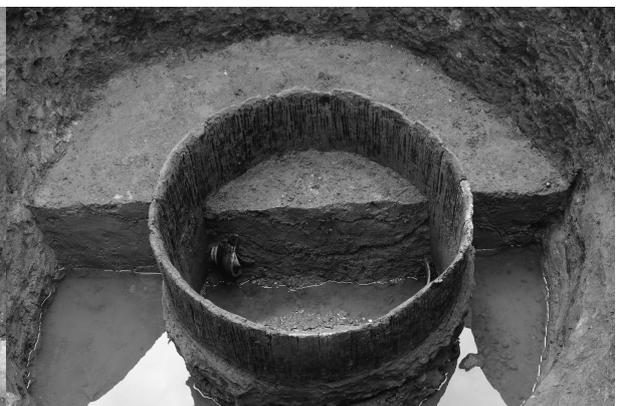
7図 SD264 出土木製品



8図 SK286 大型土取土坑



9図 SU504 木組み施設を持つ地下室

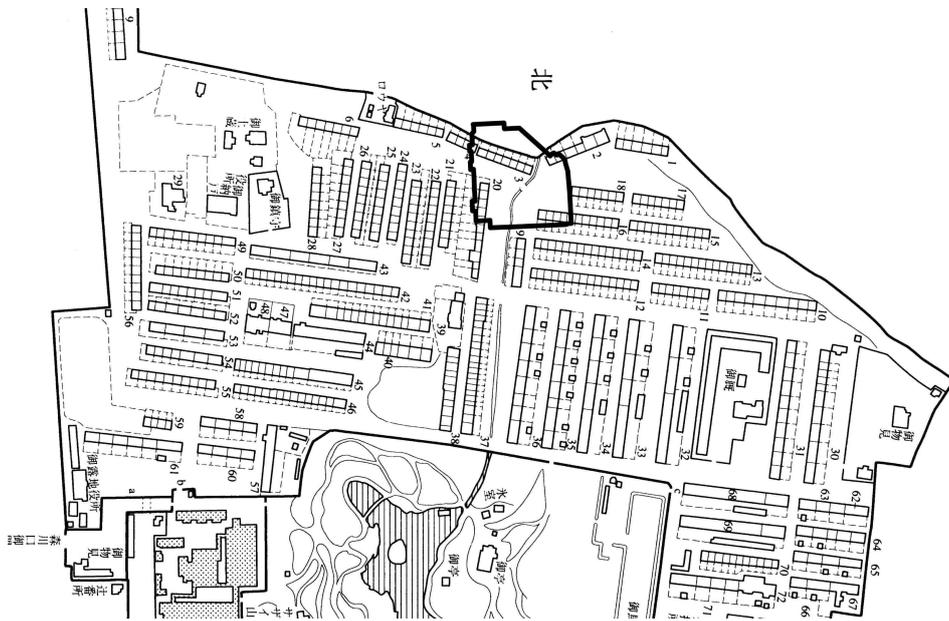


10図 SE447 井戸側を持つ井戸と出土遺物

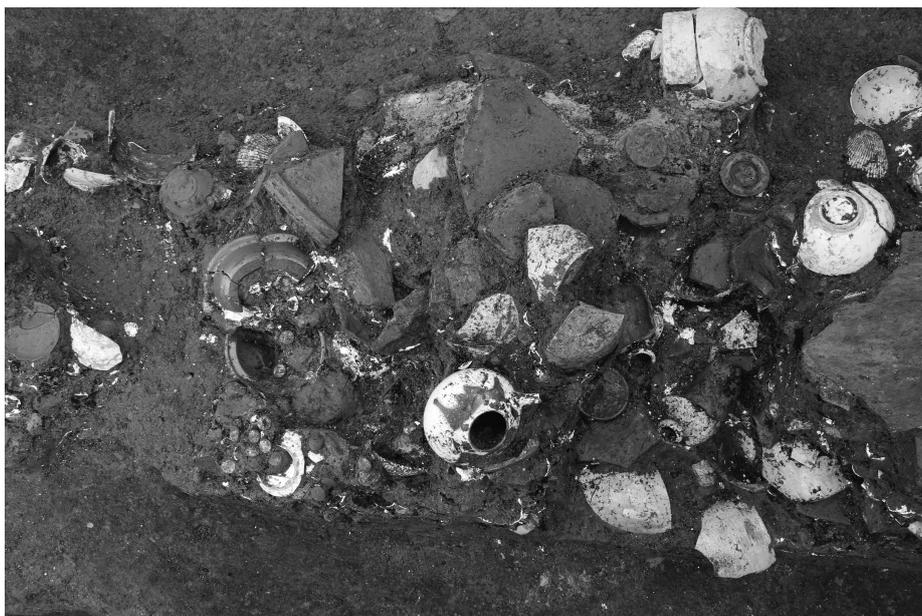


11 図 主水路（下）に注ぐ支水路（SD449、SD450）

12 図 主水路付近の藩邸境（奥が加賀藩邸）



13 図 工学部3号館地点と「江戸御上屋敷絵図」



14 図 SK7 廃棄土坑出土遺物



15 図 SD186 (石積みと側板で護岸された主水路)



16 図 SE373 井戸側と井戸枠



17 図 横木を固定する木楔



18 図 多角形に成形された井戸側の板材



19 図 息抜きの竹



20 図
中世の切り通し
状遺構



21 図 平安時代の竪穴出土の須恵器 (右の底部に朱書きが確認できる)

第2節 本郷構内の試掘調査

1. 本郷 110 クリニカルリサーチセンター（CRC）A棟Ⅱ期
2. 本郷 112 クリニカルリサーチセンター（CRC）B棟

所在地 東京都文京区7-3-1（文京区No.47本郷台遺跡群内）

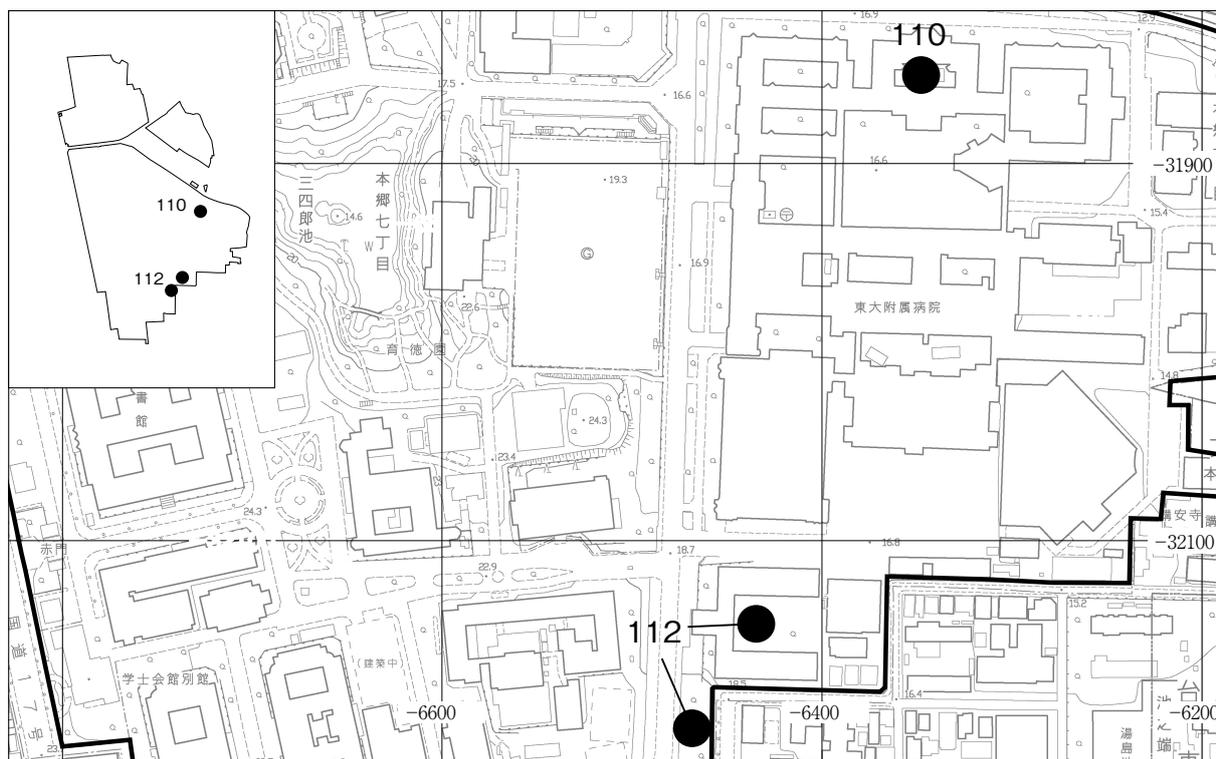
調査期間 2011年11月29日～12月2日

調査面積 23.26㎡

調査担当 追川 吉生

調査の経緯と概要

東京大学は、医学部附属病院構内にクリニカルリサーチセンターの新営を計画した。本施設はA棟、B棟の2棟で構成され、調査は工程に応じてA棟で2期、B棟で1期の計3期に分けて実施する予定である。そのうちA棟Ⅰ期の試掘調査（本郷73）は2004年11月に実施している。本試掘調査は、それ以外の調査地について実施したものである。



1図 試掘地点位置図

(1) A棟Ⅱ期

内科研究棟の北側に試掘トレンチ1（南北2×東西3m）を設定した（2図）。現地表面から2m掘削したところ、内科研究棟以前の建物基礎を検出した。基礎を除去することを断念し調査を終了した

ため、遺跡の遺存状況に関しては不明である。

(2) B棟

南研究棟の中庭に試掘トレンチ2（南北7.2×東西2m）、西側の駐車場に試掘トレンチ3（南北2.2×東西3.3m）を設定した(3図)。トレンチ2では現地表面から0.3m下で江戸時代の遺構面を確認した。地下室や土坑など、遺存状況は極めて良好である。トレンチ内の攪乱部分を利用して堆積状況を確認したところ、現地表面から1.0mで関東ローム層の堆積が認められ、その間に計3枚の生活面がある。

トレンチ3ではトレンチ内の西側2mの範囲にガス管が通っていたため、それ以外の部分を掘削した。現地表面から2mで江戸時代の石組遺構、礎石遺構、土坑を検出した。トレンチ3の北側にあたる山上会館龍岡門別館地点（本郷22）では東御長屋関連の遺構が検出されている。トレンチ3で確認した遺構も、その一部と思われる。遺構保護のため、これより下位の堆積状況は確認せずに終了した。

附属病院とその周辺の発掘調査では、第2中央診療棟地点（本郷55）、設備管理棟地点（同4）、薬学系総合研究棟地点（同66）において、東西方向に延びる埋没谷が検出されている。B棟はこの埋没谷にかかる位置にあるため、2点でボーリング調査を実施した。そのうちトレンチ3の北側で行ったボーリング調査の結果、GL-5m以下に水成堆積層が存在することが判明した。

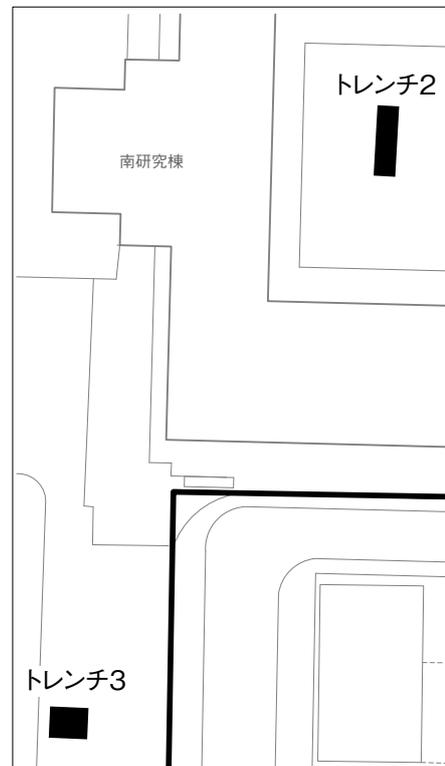
調査結果

A棟Ⅱ期の調査範囲に関しては建物基礎の攪乱により遺存状況の把握には至らなかった。しかし南側の立体駐車場地点（本郷91）では標高11.7m（現地表面-5.2m）まで遺構が残存している。A棟Ⅰ期の試掘結果も鑑みると、工事予定地には内科研究棟外を除いて遺跡が遺存している可能性が高い。

B棟では当初の予測どおり、トレンチ3で東御長屋に伴う遺構が良好に遺存していることを確認した。また中庭部分のトレンチ2でも、遺構の状況は極めて良好だった。



2図 110 地点トレンチ配置図



3図 112 地点トレンチ配置図



4図 トレンチ1掘削状況



5図 トレンチ2掘削状況



6図 トレンチ3掘削状況

3. 本郷 117 農学部 3 号館西舗装改修

所在地 東京都文京区弥生 1 - 1 - 1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2011 年 12 月 14 日～2012 年 2 月 5 日

調査担当 原 祐一

調査結果

東京大学は農学部 3 号館西側他舗装改修工事を計画している。弥生地区は江戸時代の水戸藩駒込邸の一部、明治時代の第一高等学校の範囲で、これまで農学部 3 号館周辺で行った本郷 118 ガス管改修工事の立会調査では第一高等学校の基礎等を検出している。本地点でも埋蔵文化財の有無を確認するため試掘 3 か所、80～110cm 掘削を行う集水枡と排水管施設埋設部 6 か所、25cm～45cm の掘削を伴う舗装改修部分の調査を行った。

調査の結果、調査区北側で一部ローム層を確認することができたほか、A 区・B 区・C 区では遺構を確認し、調査区南西部では第一高等学校の基礎を検出した。基礎の規模は幅 46cm で 600cm 四方、下から砂利 (厚さ 10cm)、コンクリート (厚さ 30cm)、レンガ 3 段 (厚さ 24cm)、砕けた漆喰層の順で構築されていた。遺物は A・B 区から縄文土器、瀬戸・美濃系陶器、丸瓦が出土している。

水戸藩駒込邸の遺構は第一高等学校基礎、共同溝、配管などで破壊された部分も多いが、今回の調査で遺跡が保存されていることを確認することができた。工事に伴う破壊は最小限で、遺跡は道路の下に保存された。



1 図 調査地点位置図

第3節 本郷構内の立会調査

1. 本郷 107 総合図書館前クスノキ移植

所在地 東京都文京区7-3-1 (文京区No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2011年6月9日～15日

調査担当 追川 吉生

調査結果

総合図書館前にある2本のクスノキを移植するための根回し作業に際して立会調査を実施した。

掘削範囲は木の中心からおよそ3m付近を、根に沿って幅80cm、深さ1.5m程度である。どちらの掘削範囲も、南側は旧図書館の攪乱を著しく受けている。また東側のクスノキは東側に、西側のクスノキは西側に、それぞれ文学部・法学部の校舎による攪乱が認められた。攪乱の影響が及んでいない部分に関しては、現地表面からおよそ1.2mの深さで立川ローム層を確認した。

西側の掘削で、江戸時代の磁器片と瓦片が各1点出土したが、遺構に伴うものではない。



1 図 調査地点位置図

2. 本郷 111 総合図書館西側道路

所在地 東京都文京区 7-3-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2011 年 10 月 18 日

調査担当 堀内 秀樹

調査結果

東京大学では、総合図書館西側道路において路面構造調査を計画している。当該地点は文京区 No.47「本郷台遺跡群」として周知の遺跡として登録されており、調査を行うにあたって埋蔵文化財の遺存状況を確認する必要があった。

立会調査は、図 1 のように構造把握のために掘削する位置に、2 箇所の特レンチを設定し、埋蔵文化財の有無、遺存状況を確認した。特レンチは、北側を北特レンチ、南側を南特レンチと命名し、それぞれ東西 1.5m、南北 1.5 m、深さ 1m の規模で、重機による表土掘削の後、遺構の確認を行い、掘削底までの調査を行った。

現表である路面アスファルト以下には、アスファルトの栗石、レンガを含む近代以降の盛土が確認された。北特レンチでは盛土下においても大きく攪乱され、特に東側では掘削深まで削平されていた。比較的攪乱されていなかった西側では江戸時代加賀藩邸に伴うと推定される盛土と落ち込みが確認された。また、南特レンチでは現表下約 60cm 程度の厚さまで近代以降の盛土層が検出したが、以下には近世の盛土と土坑と思われる落ち込みが確認された。

出土遺物は、両特レンチから江戸時代加賀藩邸と近代帝国大学と推定される 17 世紀後半から現代にいたる陶磁器類、瓦、食物残渣、レンガなどが二十点程度出土した。



1 図 調査地点位置図

第Ⅱ章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節 調査資料の整理

1. 整理事業概要

本年度は、発掘調査報告書刊行にむけて以下のような整理作業を行った。

- ・本郷 19 医学部附属病院看護師宿舎、本郷 48 医学部附属病院看護師宿舎Ⅱ期、本郷 25 医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場出土遺物デジタルトレース、観察表作成
 - ・本郷 20 総合研究博物館新館出土遺物写真撮影、出土遺物事実記載
 - ・本郷 21 医学部附属病院 MRI-CT 棟出土遺物観察表作成
 - ・本郷 23 医学部附属病院入院棟 A 遺構図版作成
 - ・本郷 43、44、45、47 医学部附属病院基幹整備共同溝等遺構図版作成
 - ・本郷 54 総合研究棟（文・経・教・社研）出土遺物実測
 - ・本郷 55 医学部附属病院第2中央診療棟出土遺物実測、出土遺物写真撮影
 - ・本郷 58 医学部附属病院受変電設備棟出土遺物事実記載、出土遺物観察表作成
 - ・本郷 59 工学部基幹整備共同溝出土遺物事実記載
 - ・本郷 65 法学系総合研究棟出土遺物写真撮影、トレース
 - ・駒場 I 2 教養学部情報教育棟出土遺物写真撮影
 - ・白山 4 農学生命科学研究科附属小石川樹木園・根圏観察室出土遺物実測
 - ・他 19 港区医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟出土遺物写真撮影、遺物図版作成
- その他、出土自然遺物整理に関しては阿部常樹氏に依頼、行った。

2. 外部委託

(1) 基礎整理

検見川運動場体育セミナーハウス、教養学部情報教育棟遺構図のデジタル化（イラストレータによるトレース）、図版作成を株式会社 Acube に、医学部附属病院受変電設備棟の遺構図デジタル化（イラストレータによるトレース）、図版作成を有限会社 CEL に依頼し、完了した。

(2) 自然科学分析

工学部 3 号館土壌分析（珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、重鉍物・火山ガラス分析、テフラ分析）を依頼し、完了した。

第2節 調査・研究成果の公開・活用

1. 広報活動

(1) 遺跡見学会

2011年4月17日

浅野地区・弥生地区史跡見学（日本銃砲史学会：15名）

2011年4月27、5月1、11、15、17、22、31、6月4、6、10、11、26日

東京大学総合研究博物館特別展示「弥生誌」史跡見学（NPO法人小石川後楽園庭園保存会、NPO法人たいとう歴史都市研究会、NPO法人東京シティガイドクラブ、小石川後楽園ガイドクラブ、社団法人学士会、日本石造文化学会、八千代栗谷遺跡研究会 他：158名）

2011年10月14日

浅野地区・弥生地区・本郷地区史跡見学（史跡見学 加賀百万石・百万歩の会：21名）

2011年10月9日、10月10日、10月15日

修復のお仕事展Ⅲワークショップ「水戸徳川家ゆかりの地を巡る」（一般：17名）

2011年11月11日

浅野地区・本郷地区史跡見学（新日鉄OB会：32名）

2011年11月2日

本郷地区・浅野地区・弥生地区史跡見学（茨城県退職校長会水戸支部：27名）

2011年11月4日

浅野地区・弥生地区史跡見学（徳川ミュージアム主催：10名）

2011年12月3日

本郷地区・浅野地区・弥生地区史跡見学（東京スリバチ学会：10名）

2011年12月11日

本郷地区・浅野地区・弥生地区史跡見学（埼玉県富士見市 歴史散歩会：43名）

2011年12月22日、2012年1月7日

浅野地区・弥生地区史跡見学（NPO法人文化財保存支援機構：16名）

2012年1月8日

NPO法人文化財保存支援機構主催シンポジウム「今、文化財が社会に出来ること」浅野地区・弥生地区史跡見学（一般：60名）

2012年1月24日

浅野地区・弥生地区史跡見学（日本石造文化学会研究会：9名）

2012年3月7日

浅野地区・弥生地区史跡見学（新荘ふるさと研究会研修会：41名）

(2) ホームページ

『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書10 東京大学本郷構内の遺跡 教育学部総合研究棟地点・インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点』、『東京大学構内遺跡調査研究年報8』オンライン版、発掘調査速報、遺跡見学会案内、調査室所蔵遺物学外展示などを掲載した。また報告書1

～4 および年報1、2のデジタルスキャンによるPDF化を行い、掲載した。

2. 教育・普及

(1) 学内外授業

- ・2011年7月15日 明治大学文学部専門科目（歴史時代の考古学）校外学習にて10名見学
見学先：法学部3号館地点・工学部3号館地点の発掘調査、旧育徳園、藩邸の石垣ほか

(2) 博物館展示

2011年4月29日から6月26日まで東京大学総合研究博物館との共同主催にて平成23年度春期企画特別展示『弥生誌 向岡記碑をめぐって The Archaeology of Yayoi』を同館で開催した。展示は同年3月末より開催予定であったが、3月11日に起こった東日本大震災の影響で上記に順延、短縮となった。また、同展に伴って展示図録の作成、関連イベントとして連続講座、ギャラリートーク、学内の史跡ツアーめぐりを行った。

東京大学総合研究博物館 URL <http://www.um.u-tokyo.ac.jp/exhibition/2011YAYOI.html>

〈展示図録〉

『弥生誌 向岡記碑をめぐって The Archaeology of Yayoi』の製作協力（発行・製作：東京大学総合研究博物館、編者：堀内秀樹、西秋良宏）

〈連続講座〉

- ・5月7日
堀内秀樹「本郷キャンパスの発掘調査と埋蔵文化財調査室」
原 祐一「向ヶ岡弥生町の研究向岡記碑をめぐって」
- ・5月14日
石原道知（武蔵野文化財修復研究所）「弥生町遺跡の方形周溝墓・弥生土器と「向岡記」碑の保存修復」
- ・5月21日
小泉好延（武蔵野文化財修復研究所）「工学部武田先端知ビルから出土したガラス小玉・管玉の材質分析と弥生時代のガラスについて」
- ・6月4日 設楽博己（東京大学人文社会系研究科）「弥生式土器第1号の謎」
- ・6月11日 竹内啓（日本画家）「東大農学部構内遺跡（旧向ヶ岡弥生町）での制作」

〈ギャラリートーク〉

- ・5月6日、5月20日、6月3日、6月17日に各3回行った。

〈史跡ツアーめぐり〉

- ・5月22日、6月11日、6月18日に行った。

特別展示「弥生誌」および遺跡・史跡見学会報告書

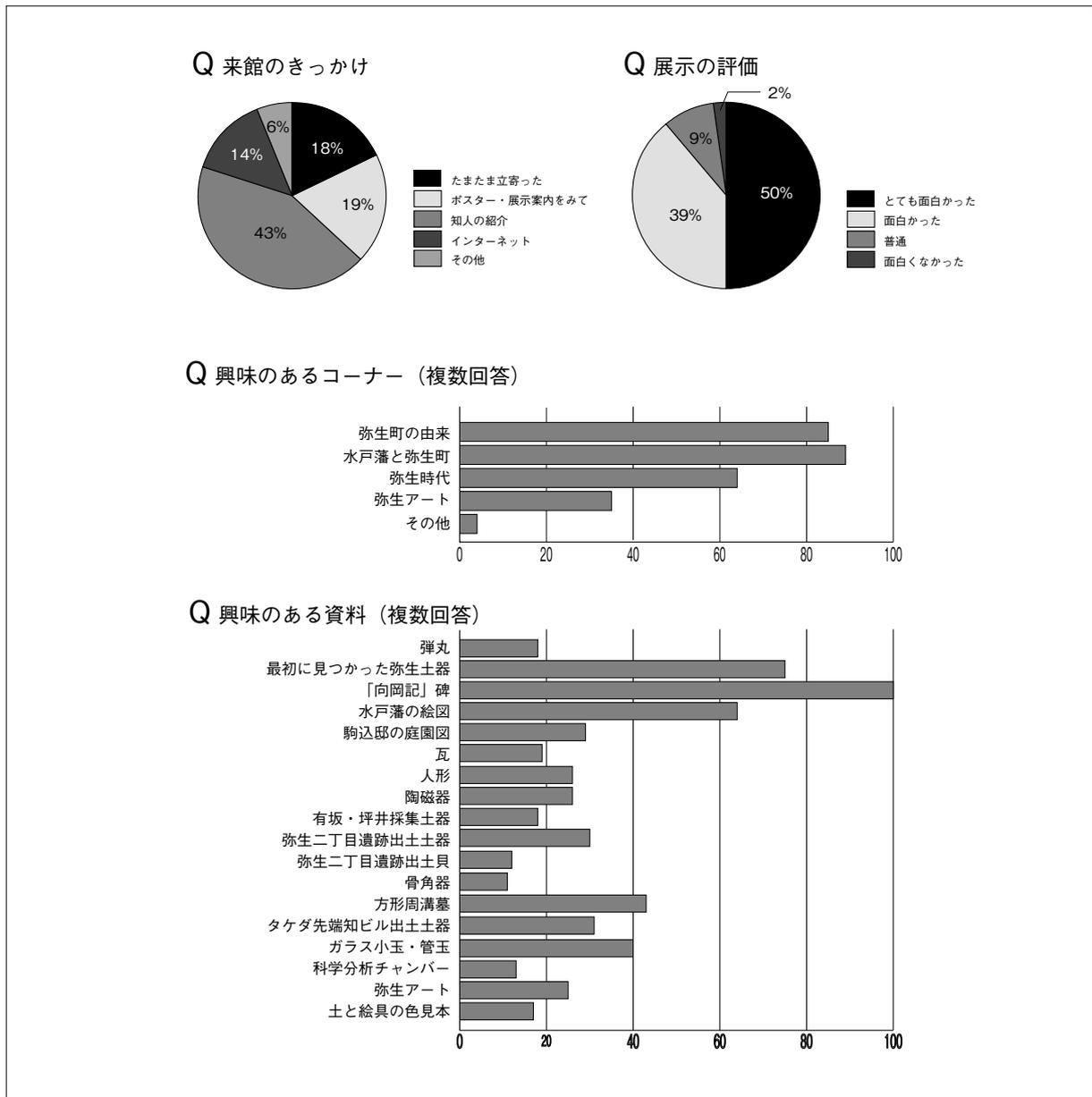
原 祐一

展示解説、遺跡・史跡見学会実施日

4月27日、5月1、11、15、17、22、31日、6月4、9、10、11、26日

来館者に対してはアンケート記入をお願いした。アンケートの作成、データ集計は原が行った。

アンケート結果



第1図 アンケート結果

感想

- ・「向岡記」復元の飛白体の再現がとても興味深かった。(4月29日)
- ・以前から来ようと思っていた。教員(小・中)です。ルビがなく子供に不便です。(昔の科学博物館もルビがなく、子供に不親切でした)。英語の解説ももちろん必要です(4月29日)
- ・「向岡記」復元の飛白体の再現がとても興味深かった。(4月29日)
- ・「向岡記」碑の有る場所がとてもわかりづらい。もっと良い場所に移せないのか?(5月1日)
- ・飯村博先生の書に感銘を受けました。(5月3日)
- ・弥生と云ういわれと大陸とのつながりに興味を持った。(5月3日)
- ・原氏らの地道な研究成果を余すことなく伝える点で良い企画だった。ただし、重文に指定された資料を展示する上で免震台などの保護装置が無いこと、他の資料も露出展示であったり、アクリルケースにビスが使われているなど、盗難、破損に対する意識が欠けていることがことは残念である(5月6日)
- ・地元が茨城のため水戸藩、水戸徳川の展示はとても興味をもち面白かった。また、弥生時代のガラス小玉などとてもきれいで楽しかった。弥生と聞いて、弥生時代の事の展示かと思ったら弥生町という土地の展示で予想以上に楽しかった。(5月8日)
- ・地元、というか、その地に対する解説が興味深く、また「向岡記」の現代語訳では、現在の東大周辺にも少し感じられるような地元に根付いた情景を感じることができました。文京区に弥生町という地名が有ることを知りませんでした。文京区在住。(5月8日)
- ・駒込邸の絵図の展示について、壁に直貼りをして周囲を囲み、アクリル板で密封された展示をしてありました。この場合、本紙に対して負荷が掛かる可能性が高く、できれば中性紙ボード等にヒンジ止めをして、少しでも安全に展示する方法をとったほうが良かったのではと思います。可能であれば額装をするか、平台に展示するべきものと思います。(5月15日)
- ・講座や史跡ツアーがあるのでより深く興味がわく。(5月17日)
- ・弥生式土器の最初の発見地がどこか興味があったのですが、五つの候補であっても具体的に分かって、年寄りながら生きてきたかいがあった。(5月25日)
- ・資料報告の類が、東京大学学術機関のリポジトリ等で公開されているとよいと思いました。例えば発掘調査の現地報告会などにOCWの形でインターネット公開できないでしょうか。(6月4日)
- ・弥生時代の墓が大きくて迫力がありました。(6月17日)
- ・永らく、水戸様と加賀様の土地関係、浅野家のことがよくわかりました。(6月19日)

まとめ

今回の回答が総来館者の何割が回答したかデータがないため、このデータが来館者の動向、感想を反映しているかについては検討課題としたい。

アンケート結果・感想は今後の埋蔵文化財調査室が行う展示、広報活動の貴重なデータとしたい。

3. 資料の提供・貸出

年度	貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料
2011	東京国立博物館	貸出	常設展示 平成館考古展示室 資料展示	御殿下記念館地点 391号出土 色絵花卉文大皿片 ほか 計65点
	国立歴史民俗博物館	貸出	総合展示「都市の時代」 資料展示	御殿下記念館地点 678号出土 染付大皿海浜文 ほか 計28点
	江戸東京博物館	貸出	常設展「武士の暮らし・町の暮らし」 資料展示	医学部附属病院中央診療棟地点 Z35-5 出土 座り猿、理学部7号館地点 SK1 出土 焼塩壺ほか 計107点
	(株) 創樹社美術出版	出版	小木一良編 2011 『鍋島 - 誕生期から盛期作品まで』創樹社美術出版 資料掲載	医学部附属病院病棟地点出土 鍋島陶片ほか 計7点
	(株) 淡交社	出版	永田信一 2011 「土の中の仁清・乾山」『淡交別冊 - 仁清・乾山』 No.59 淡交社 資料掲載	教育学部総合研究科地点 SU83 出土 仁清印水指
	明治大学博物館	貸出 / 出版	特別展「漆器 JAPANWARE」 資料展示・図録掲載 (会期 2011.6.18-7.31)	工学部1号館地点 SK1 出土 漆碗 計2点
	第一合成(株)	HP 掲載	HP 掲載	小石川植物園 (KBG-10) 地点出土 土器片
	東京大学総合研究博物館	貸出 / 出版	特別展「鯉博覧会 - この不可思議なるもの」 資料展示・図録掲載 (会期 2011.7.16-10.16)	理学部7号館地点出土 ウナギ骨
	(株) アーテファクトリ	出版	デアゴスティーニ・ジャパン 2011 『週間江戸』 89号 資料掲載	医学部附属病院外来地点出土 ふぐ骨
	松戸市戸定歴史館	出版	企画展「徳川昭武の屋敷 慶喜の住まい」 図録掲載 (会期 2011.9.10-10.10)	農学部生命科学総合研究棟地点 SR1 出土 調査写真、向陵彌生町舊水戸邸繪図面
	洋泉社	出版	原史彦編 2011 『歩く・観る・学ぶ 江戸の大名屋敷 別冊歴史 REAL』洋泉社 資料掲載	医学部教育研究棟地点 SK961 出土 金箔瓦
	中野高久	出版	小泉弘編 未定 『事典 江戸の暮らしの考古学』吉川弘文館 資料掲載	工学部14号館地点出土 人形玩具
	中野光将	調査 / 研究	調査研究	医学部附属病院地点池遺構出土遺物ほか 数点
	小野英樹	出版	『江戸の水道』同成社 資料掲載	本郷キャンパス発掘調査地点マップデータ、医学部附属病院看護宿舎地点Ⅲ期 SE89 遺構図
	(財) 三徳庵	出版	田中仙堂 2012 『茶道の研究』通巻675号 資料掲載	医学部附属病院病棟地点出土 古九谷百花手、古九谷幾何学手陶片
	ニューサイエンス社	出版	ニューサイエンス社『月刊考古学ジャーナル 特集 近世都市の考古学』2012年1月号 資料掲載	医学部附属病院病棟地点出土 羽子板
(株) CAL	マスメディア	MRO 開局60周年記念「加賀百万石の名残をとどめる東京」(放映日 2012.3.7)	御殿下記念館地点 391号 色絵芙蓉手花籠文皿ほか 計9点	
(株) 青月社	出版	青月社『季刊 聚美』第三号 資料掲載	医学部附属病院病棟地点出土 古九谷五彩手陶片	

第3節 室員研究・活動報告

堀内 秀樹

【科研費など外部競争資金】

- ・科学研究費 基盤研究 (C) 『都市江戸の貿易陶磁器需要と地域間貿易ネットワークに関する総合的研究』平成23年度～25年度

【著書・論文・研究ノート】

- ・「東京大学埋蔵文化財調査室と本郷キャンパスの発掘調査」『弥生誌 向岡記碑をめぐって』 pp.94-99頁、2011年4月29日、東京大学総合研究博物館
- ・「都市江戸における貿易陶磁器消費の一例 -江戸幕末の植木屋出土の貿易陶磁器-」『貿易陶磁研究』第31号 pp.131-142、2011年9月24日 日本貿易陶磁研究会

【研究発表・講演・講座】

- ・2011年5月7日
「本郷キャンパスの発掘調査と埋蔵文化財調査室」(特別展示『弥生誌』連続講座)

成瀬 晃司

【研究発表・講演・講座】

- ・2011年6月7日
「加賀藩本郷邸の調査と成果」(第1回金沢城調査研究所学習会)
- ・2012年3月17日
「発掘調査からみる加賀藩本郷邸」(品川区品川歴史館平成23年度歴史講座『江戸と品川の大屋敷を探る』)

原 祐一

【著書・論文・研究ノート】

- ・「向ヶ岡弥生町に建設された警視庁(局)射的場と射的場関連遺構」『銃砲史研究』第370号 pp.41-50 日本銃砲史学会編
- ・「『向陵彌生町舊水戸邸繪圖面』と水戸藩駒込邸の研究」『松戸市戸定歴史館企画展徳川昭武の屋敷慶喜の住まい』 pp.54-55 松戸市戸定歴史館
- ・『弥生誌一向岡記碑をめぐって』堀内秀樹・西秋良宏編、東京大学総合研究博物館発行
- ・「水戸藩駒込艇の景観を復元する」『修復のお仕事展Ⅱ～伝えるもの・想い～Ⅱ 報告書』 pp.16-20 あくさいず

【研究発表・講演・講座】

- ・2011年5月27日
「水戸藩駒込邸の研究 -邸内の土地利用状況、造園法について-」日本考古学協会第77回大会
- ・2011年6月5日
「東京大学浅野キャンパスで行った文化財の保存修復の経緯と東京大学総合研究博物館特別展示弥生誌 向岡記碑をめぐって」文化財保存修復学会第33回大会(連名 石原道知、堀江武史、堀内秀樹、

西秋良宏・洪恒夫、石井龍太、門脇誠二)

・2012年1月8日

「甦った向ヶ岡弥生町の歴史 ―地域史研究と史跡・遺跡の保存活用の意義―」(NPO 法人文化財保存支援機構主催シンポジウム『今、文化財が社会に出来ること』)

・2012年2月19日

「一遺跡の空― 竹内啓展」(日本橋高島屋 ギャラリートーク)

追川 吉生

【著書・論文・研究ノート】

・「明治大学記念館前遺跡から出土した漆器椀」『漆器-JAPANWARE-』pp.45-46、明治大学博物館

・「発掘が語る江戸城物語」『歴史リアル』3、pp.20-23、洋泉社

・「城門・見附の機能と役割」『歴史リアル』3、pp.28-29、洋泉社

・「総論・近世都市の考古学」『考古学ジャーナル』623、pp.3-6、ニューサイエンス社

【研究発表・講演・講座】

・2011年6月16日

「江戸城本丸跡」(明治大学リバティーアカデミー・時空の交差点)

・2011年6月25日

「江戸の漆器椀 - 遺跡出土からみる、江戸の食器としての漆器椀」(明治大学リバティーアカデミー・漆アカデミー)

・2011年6月30日

「富士塚 - 江戸の富士信仰を訪ねて -」(明治大学リバティーアカデミー・時空の交差点)

・2011年7月14日

「四谷大木戸跡と新宿御苑」(明治大学リバティーアカデミー・時空の交差点)

・2012年1月29日

「地下に眠る城下町・江戸」(都立中央図書館連続公開講座)

・2012年2月4日

「発掘された大名屋敷」(都立中央図書館連続公開講座)

附 埋蔵文化財調査室要項

東京大学埋蔵文化財運営委員会は、全学委員会の見直しに伴い、以下の通り廃止され、埋蔵文化財調査室は、キャンパス計画室下部組織に改組された。

東京大学における全学委員会の見直しに伴う関係規則の整理等に関する規則（平成22年3月25日東大規則第133号）（抜粋）

（略）

（東京大学埋蔵文化財運営委員会規則の廃止）

第17条 東京大学埋蔵文化財運営委員会規則（平成元年7月11日制定）

埋蔵文化財調査室規則

平成元年7月11日

評議会可決

（設置）

第1条 キャンパス計画室の下に埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

（業務）

第2条 調査室は、東京大学構内の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査（以下「遺跡調査」という。）に関し、次の各号に掲げる事項を処理する。

- （1）遺跡調査に対する総括的指導助言
- （2）文化庁等に提出する報告書の作成、監修及び指導
- （3）遺物等の保管及び管理
- （4）遺跡調査の方法に関する調査研究
- （5）前各号に定めるもののほか、研究報告書の作成等遺跡調査に関し必要と認められる事項

（室長）

第3条 調査室に室長を置く。

2 室長は、東京大学専任の教授又は准教授のうちから総長が委嘱する。

3 室長は、調査室の業務を総括する。

（室員）

第4条 調査室に室員若干名を置く。

2 室員は、室長の指示に従い、調査室の業務に従事する。

（庶務）

第5条 調査室の庶務は、本部施設企画課において処理する。

附 則

この規則は、平成8年5月21日から施行し、改正後の埋蔵文化財調査室規則の規定は、平成8年5月11日から適用する。

附 則 この規則は、平成22年4月1日から施行する。

埋蔵文化財調査室組織表

室長（人文社会系研究科教授）	大貫静夫
室員（キャンパス計画室准教授）	堀内秀樹
室員（キャンパス計画室助教）	成瀬晃司
室員（キャンパス計画室助手）	原 祐一
室員（キャンパス計画室助手）	大成可乃
室員（キャンパス計画室助手）	追川吉生
事務補佐員	青山正昭
事務補佐員	今井雅子
事務補佐員	大貫浩子
事務補佐員	加藤理香
事務補佐員	香取祐一
事務補佐員	小林照子
事務補佐員	杉浦あかね
事務補佐員	田中美奈子（2011年6月～）
事務補佐員	渡辺法彦

第 2 部 2012 年度調査室事業概要

第 I 章 埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）

2012 年度は、本郷地区、駒場 I 地区において、以下の通りの調査を実施した。

本郷地区では、事前調査を本郷 125 クリニカルリサーチセンター A 棟 I 期など 3 件、試掘調査を 1 件、立会調査を 9 件行った。このうち 2013 年度にまたがって継続している調査は、事前調査の本郷 134 工学部 3 号館施設設備（下水他）である。

事前調査を行った本郷 125 クリニカルリサーチセンター A 棟 I 期では旧石器時代、縄文時代、古墳時代（住居跡 5 棟）、江戸時代（加賀藩本郷邸、富山藩邸）が出土している。

〈事前調査〉

- ・ 2012 年 12 月 17 日～継続 本郷 125 クリニカルリサーチセンター A 棟 I 期（担当：追川、小川）
- ・ 2012 年 11 月 5、13 日 本郷 130 工学部 3 号館施設整備（ガス）（担当：成瀬、堀内）
- ・ 2013 年 3 月 18、27 日～継続 本郷 134 工学部 3 号館施設設備（下水他）（担当：堀内）

〈試掘調査〉

- ・ 2013 年 2 月 20 日 本郷 127 工学部 4 号館屋外排水管改修工事（担当：原）

〈立会調査〉

- ・ 2012 年 7 月 10 日～14 日 本郷 121 農学部 1 号館北側舗装改修工事（担当：原）
- ・ 2012 年 7 月 14 日 本郷 122 理学部 2 号館北側舗装改修工事（担当：原）
- ・ 2012 年 9 月 4、10 日 本郷 123 春日門門扉やりかえ（担当：大成）
- ・ 2012 年 9 月 26、27 日 本郷 124 農学生命科学研究科閉鎖系温室新営工事（担当：原）
- ・ 2012 年 12 月 17 日 本郷 126 原子力別館北側雨水配管改修その他（担当：原）
- ・ 2012 年 12 月 25、26 日、2013 年 1 月 21 日、2 月 1、3 日 本郷 129 理学部 2 号館舗装改修工事（担当：原）
- ・ 2013 年 1 月 21 日、2 月 1、20 日、3 月 7、11、12、14、15、18、19 日 本郷 128 農学部 1 号館北側他舗装改修工事（担当：原）
- ・ 2013 年 3 月 25 日 本郷 131 医学部モニュメント（担当：追川）

駒場地区では、2 件の試掘調査、2 件の立会調査を行った。

〈試掘調査〉

- ・ 2012 年 7 月 30 日～8 月 3 日 駒場 I 25 理想の教育棟 II 期棟（担当：堀内）
- ・ 2012 年 9 月 24～27 日 駒場 I 26 コミュニケーションプラザ横共同溝埋設工事（担当：小川）

〈立会調査〉

- ・ 2012 年 7 月 23～25 日 駒場 I 24 屋外トイレ新営工事（担当：堀内）
- ・ 2013 年 2 月 28 日 駒場 I 27 倉庫新営工事（担当：香取、堀内）

第1節 本郷構内の事前調査

1. 本郷 103 春日門横教育研究棟 (HKK11)

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2011年12月1日～2012年7月20日

調査面積 940㎡

調査担当 大成 可乃 小川 祐司

1. 調査の経緯と経過

調査地点は春日門北側に位置する(1図)。文献資料などによると江戸時代の調査地点は、明暦の大火以前は同心屋敷、大火以後は加賀藩邸に該当し、絵図面との照合からは長屋などが建ち並んでいた場所である事が推定された。また元禄16(1703)年の火事で焼失したとされる徳川綱吉の御成に伴う御殿が存在した場所である。本地点北側に近接するインキュベーション施設地点(現・産学連携プラザ、東京大学構内調査一覧番号68【略称】INC)、その東側に隣接するベンチャープラザ地点(現・アントレプレナープラザ、東京大学構内調査一覧番号76【略称】HVP06)では、礎石建物遺構、雨落ち溝、地下室、便所、土坑などが検出されている。また当地点東側を文京区が調査されており(本郷台遺跡群第2地点)、そこでも地下室、井戸、大型柱列、炉址(焼土土坑)などが検出されている。以上のような状況から、当地点においても周辺地点と同様の遺構の存在が想定された。



1図 調査地点位置図

東京大学施設部より依頼された東京大学埋蔵文化財調査室では、2011年3月13日から18日にかけて試掘調査を実施した。その結果、調査対象となる整地面が3～5面あることが確認され、主に大型遺構が良好に遺存している状況が確認された。この調査成果を受けて施設部と埋蔵文化財調査室が協議後、2011年12月1日～2012年7月20日の約8ヶ月で約940㎡の調査を実施した。

2. 調査の概要

調査区内に平面直角座標系(日本測地系)第IX系を基準とした杭を5m毎に設定したが、その杭はINCやHVP06との関連性に考慮し、両地点のグリットを南側へ延長し、設定した。東から西へZ～B、北から南へ5～11の数字を組み合わせ各杭の名称とし、北東隅の杭を基準杭とした。

重機により表土掘削を実施したところ、ほぼ調査区全体で現地表面下-1m前後で最初の調査対象面が検出され、6、7グリットの境付近より北側では地山まで含めて生活面が3面、7グリット以南では8面あることが確認された。ただしA6グリット東側半分は近現代に削平され、重機掘削時にすでに地山が検出される状態となっており、遺構確認はすべて地山(8面)で実施した。

検出遺構総数は1,519基で、INCやHVP06などと比べて遺構数は非常に多いが、出土遺物量は遺

物収納箱 265 箱であり、本郷キャンパス内の調査地点の中でも遺構総数に比して遺物総量が少ない地点であった。以下、各生活面ごとに概要を述べるが、1 面は局所的な分布に留まり、またその面で確認された遺構が近代遺構であったことから本報告では割愛した。

(1) 2 面 (67 図)

建物址などはほぼ皆無で、地境溝と考えられる溝、下の遺構の影響でできたと思われる窪地をゴミとともに整地し、埋めたような土坑などが多く確認されている。遺構の分布状況をみると SD101 を境に東側に集中する状況が確認され、主軸は真北方向よりわずかに東へ振れているものが多い。なお 11 グリットで本面の遺構が認められないのは、近代に 3 面まで削平されていたためである。

地下室 (SU33、159) SU33 は A10 にグリットに位置する。東西約 300cm、南北約 340cm、深さ約 250cm を測り、平面形は方形を呈す (2 図)。坑底には不整楕円形のごく浅い土坑や直径 15cm ほどの円形ピットを伴う。東、南壁には幅約 100cm、奥行き約 30cm の立面形が隅丸方形を呈す棚状の凹みが穿たれていた (3 図)。覆土の観察からは数回にわたりゴミが廃棄された状況が確認された。遺物の年代をみると 18 世紀後半代には廃絶していた可能性が高い。SU159 は A8 グリットに位置する。東西 150cm 以上、南北約 115cm、深さ約 250cm を測る。平面形は長方形を呈す。北東方向にドーム状の天井部を有す室部が設けられていたが、開口部から室部奥壁までの距離が 30cm 弱とごく短く、奥壁や天井部の調整が雑で、工具痕が観察された (4 図)。開口部も壁面は垂直に丁寧に成形されているが、坑底は工具痕が遺存し凹凸が顕著であったことから、構築途中で放棄された遺構の可能性もある。なお本遺構と 3 面に帰属する SK190 からは用途不明の石製品 (5 図) が 1 点ずつ出土している。

溝 (SD101、195) SD101 は A8 から A10 グリットに位置し、南北にのびる溝である。東西約 60cm、南北約 27m、深さは局所的に異なるが平均約 80cm と深く、断面形は箱形を呈す。溝の南北端は垂直に立ち上がり、止まっている状況が確認された (6 図)。以上のような状態から、現段階では地境溝と推定している。なお本遺構の途中には 5 面に帰属すると判断された SP459 の大型の礎石が検出されたが、SD101 の坑底はこの石の手前で一旦立ち上がっており、石を回避して掘削された状況が確認された。SD195 は A8 グリットに位置し、東西 500cm 以上、南北約 50cm、深さ約 30cm を測る。SD101 に直交する形で検出された東西にのびる溝である。SD101 と同じく断面形は箱形を呈す。

瓦積み土坑 (SK19、29) SK19、29 は A10 グリットに位置する。SK19 は東西約 60cm、南北約 100cm、深さ約 30cm を測り、平面形は隅丸長方形を呈す。SK29 は東西約 120cm、南北約 115cm、深さ約 50cm を測り、平面形は隅丸方形を呈す。ともに掘り方は垂直に立ち上がり、覆土には多量の瓦片が平らに積まれた状況が確認された (7 図)。なお覆土には瓦片の他に玉砂利や陶磁器片なども少量含み、それらが瓦と瓦の間を埋めるように覆土とともに転圧された状況が確認されていることから、SK19、29 は瓦廃棄土坑ではなく、何かの基礎として構築された可能性もある。

土坑群 A7 グリットに位置する。平面形が隅丸方形あるいは円形の土坑が南北、東西ともに約 210cm 間隔で南北に 3 基、東西に 3 基以上並ぶ (8 図)。各土坑の深さは平均 50cm 弱で、いずれも立ち上がりは緩やかで、断面形は碗形を呈す。覆土のしまりは弱く、ロームブロックをやや多く含む覆土で一気に埋まった状況が確認された。坑底に凹凸が遺存する土坑もあり、礎石の抜き穴とも考えられるが、比較的平らに整形されているものも混在することから性格不明の土坑群である。

(2) 3 面 (68 図)

2 面とは異なり柱穴列が多く確認された。また砂利・瓦片が敷き詰められた通路状の遺構も検出さ

れた。ただしA、Bグリットの境界付近の遺構の多くは、この通路状遺構でバックされており、3面は通路状遺構の構築前後2時期の生活面があった可能性もある。ただ遺構の主軸をみると多くが真北方向に軸を有すものであり、通路状遺構の構築前後での主軸の変化は認められないようである。

通路状遺構 11グリット東半分からA10からA8、B7グリットの境界付近に南北に広がる。本遺構の砂利層と同時に埋められたと考えられる遺構（覆土が砂利層主体）が、調査区内で数基確認（68図溝灰色、SK47、SD67、SK184、SE207、SK327、SK375など）されている。なお北側に隣接するINCにおいても覆土が砂利層主体の遺構が確認されている。

大型土坑（SK3、190） 10～6グリットのA、Bグリットラインの境界付近に位置し、通路状遺構にバックされていた遺構である。SK3は東西約210cm、南北約16m、深さが400cm以上、SK190は東西約220cm、南北18.75m以上、深さ約380cmを測る、平面形が長方形を呈す大型土坑である。この2基は東西約150cm、深さ150cm弱を測る、断面形がU字状を呈す短い溝のような部分で連結している（9図）。ともに断面形は箱形を呈し、覆土はロームブロック主体、しまりはやや弱く、一気に埋められた状況が確認された。なお局所的ではあるが、最上層に貝、骨などの自然遺物と陶磁器などがまとめて廃棄された状況が確認される箇所もある。SK3の南端は9、10グリット境付近で西側に折れることが確認されたが、その部分と坑底については安全確保が困難であったことから調査を断念した。SK190は断ち割り調査により坑底を確認したところ、比較的フラットで、箱形の断面形は坑底ではその幅が少し狭くなり、全体的には細長い逆台形状を呈すことが明らかとなった。

建物址 A7、A8グリットに位置する建物址1のピットはいずれも掘り方がなく、3面整地過程で同時に構築された状況が確認された。南北方向に約180cm間隔で7基、東西方向に160cm間隔で1～2基のピットが並ぶ（10図）。各ピットは覆土中に瓦片を数段積み重ね荷重を支えるような構造である。瓦片の段数、規模などは各ピットで差があり、建物基礎としての位置で、荷重がどのくらいかかるかなど様々な要素を加味し、臨機応変に対応して瓦片を積んだ可能性もある。ちなみに瓦片の上に礎石が検出されたピットはないが、いずれのピットも中央が窪んでいる状況が確認されていることから、根石代わりに瓦片を敷き詰め、その上に礎石が置かれていた可能性はある。なおこのピットと同構造のピットからなる柱穴列が4面でも確認されており、それが建物址1と柱筋も揃うことから、建物址1の帰属面については遺物なども併せて検討する必要がある。A11グリットに位置する建物址2は通路状遺構にバックされた遺構である。1辺約40～50cmの方形を呈すピットが南北方向に約60cm間隔で2基以上、東西方向に約180cm間隔で6基以上並ぶ（11図）。南側のピットの方が浅いことから控えの柱列である可能性がある。北側の柱列は、ほぼ全てのピットで柱痕が確認された。

井戸（SE207） A10グリットに位置する。掘り方は二重構造を呈し、外側は平面形が1辺約250cmの隅丸方形を呈し、その中央付近に直径約100cmの円形の掘り方を有す。本遺構は通路状遺構にバックされ、掘り方部分は内外ともに玉砂利が充填されていた。通路を構築する際に同時に埋められ廃絶した可能性が高い（12、13図）。

炉状遺構（SF273、386～388、376、445） SF273はA9グリット、SF386～388、SF376と445はA10グリットに位置する。いずれも掘り方は隅丸方形あるいは隅丸長方形を呈す。周囲は粘土やローム土などで枠をめぐらし、その中に炭化物や焼土粒を含む白色ないし灰白色の灰が充填された状況で検出された遺構である。SF273は道路状遺構でバックされ、他の4基は3層整地層掘削中に確認された（14～18図）。SF386～388は東西160cm以上、南北220cm以上の方形の掘り方内に炭化物、焼土粒混じりのローム土を貼り、その外周に幅約10cmの粘土枠をめぐらし、その枠内にSF388、387、386の順に作り替えが行われたことが明らかとなった（15図）。最後に構築されたSF386は、

枠内中程を一辺約 110cm の方形に掘り込み、その周囲に幅約 10cm の粘土枠をめぐらし構築されていた。灰を除くと中央に火床と割石が検出された (17 図)。SF376 は SF445 を作り替え構築されたものである (16 図)。SF445 は東西 70cm 以上、南北約 120cm 以上を測り、遺存状況は悪く本来の形状は不明であるが、坑底を除く全体に粘土が貼られていたようである。SF376 は SF445 の北側立ち上がりから南へ 40cm ほどの位置に東西約 80cm、南北約 90cm の方形に掘り込み、その全面に粘土を貼り、坑底付近には更にその上に瓦片を数段敷き詰め灰を充填し、炉状遺構としたようである。瓦片上には火床と思われる痕跡が 1 箇所検出された (18 図)。

地下室 (SU332) B10 グリットに位置する。試掘坑や SK3 で切られているが、遺存部分は南北約 180cm、東西 160cm 以上、確認面からの深さは約 360cm を測り、平面形は方形を呈す (19 図)。東、南、北壁面はほぼ垂直に整形され、南北方向の断面形は細長い箱形を呈す。西側にはさらに通路状の細長いプランが検出されたが、調査区西壁での確認であったため断面観察のみにとどめた。西側部分も地表面下約 360cm で坑底が確認され、その部分は白色化した水つきのローム土が検出された。後述する 5 面の SU1205 も坑底が白色化したローム土に達しており、地下室として利用したのであれば水気の多い層位まで掘削する必要があったのかは疑問がある。

溝 (SD67、188、216、328、444) SD67 は B9 グリットに、SD188、SD216 は Z11 グリットから A11 グリットに、SD328 は Z10 グリットから A10 グリットに、SD444 は Z10 グリットから Z11 グリット、A10 グリットに位置する。遺構の主軸をみると SD188 を除き概ね真北方向に主軸を有す。SD67 は幅約 70～80cm、深さ約 25cm を測り、通路状遺構にパックされていた。SD188 は幅約 40cm、深さ約 15cm を測り、北西から南東へ円弧を描くように検出された。通路状遺構を切る。SD216 は幅約 50～70cm、深さ約 30cm、SD328 は幅約 50cm、深さ約 15cm、SD444 は幅約 50cm、深さ約 40cm を測る。いずれも比較的しっかりと掘り方を有す溝であり、屋敷境あるいは地境などに伴う溝か。

木組土坑 (SK375) A8 グリットに位置する。東西約 110cm、南北約 150cm、深さ約 125cm を測る、平面形が長方形を呈す土坑である。通路状遺構にパックされ、本遺構の最上層にも砂利が充填されていた (20 図)。掘り方内に幅約 2cm の板材痕跡が確認され (21 図)、北西、北東隅に釘が遺存していたことから木枠を有す土坑であった可能性が高い。

性格不明遺構 (SX412、450) A7 グリットに位置する SX412、450 は、平面形がやや歪な方形を呈す遺構である (23 図)。SX412 は一辺が約 410cm、深さ約 110cm、SX450 は一辺約 370cm、深さ約 50cm を測る。ともに覆土の主体はローム土であり、立ち上がりから流れ込むような状況が確認されたが、SX412 には最下層およびロームの間層に砂利を多く含む層が認められた (22 図)。SX412 は壁面、坑底ともに比較的しっかりと掘り方であったが、SX450 は坑底の凹凸が著しく、掘り方も不明瞭であった。両遺構の下には 5 面や 6 面で確認される地下室 (SU586、SU699) があることや覆土の状況から、地下室の影響で窪地となっていた部分を 3 面整地時に埋めた場所である可能性が高いが、SX412 については、掘り方や坑底が比較的しっかりと掘り方をしていたことを加味すると、窪地を単に埋めただけでなく、窪地を再掘削し、砂利とロームで版築状に埋め戻した遺構とも推測されるが、もしそうだとすると何の目的で手間を掛けて埋める必要があったのかという疑問が生ずる。

(3) 4 面 (69 図)

4 面は焼土に覆われた生活面であり、この面で確認される遺構はこの焼土を切った状況で確認された。9 グリット以南では焼土が一面に広がり、それ以外でも焼土層が局所的に集中して認められた。また 11 グリットではこの焼土層中に多くの焼瓦片が集中する箇所も認められた (24 図)。しかし瓦

片以外の遺物は非常に少なく、被災した建築材（柱、壁土など）なども確認されなかった。INCやHVP06では被熱した遺物が廃棄された遺構が確認されていることから、本地点の被災したものが両地点へ運ばれ、廃棄された可能性もある。なお本地点では遺物量が少なく火事の年代が比定できていないが、調査担当者によるとINCやHVP06で出土した被熱遺物の年代観をみると元禄16（1703）年の火事に比定されるということであり、本地点の焼土もその火事の焼土である可能性はある。

通路状遺構 11グリットから9グリット北半分から7グリット内の調査正面壁よりにL字状に検出された。11グリットのそれは砂利層、ローム層、瓦片の順に硬く版築されていたが、それ以外の部分では砂利もやや散漫で、しまりもさほど強いものではなかった。後述するSD413は本遺構を切り、SD396、SD462、SU591、柱穴列3は本遺構の砂利層にパックされた状況で検出された。

溝（SD396、413、417、462、481、511） SD396、413、417、462は11グリットに、SD481、511はA9グリットに位置する。SD396、462以外は真北方向に主軸を有す。SD396、462は湾曲しながらのびる溝で、ともに幅約40cm、深さはSD396が約20cm、SD462が約10cmと浅い。SD413も幅約40cm、深さ約15cmの浅い溝である。SD417は幅約50cm、深さ約25cmを測り、断面形は逆台形を呈す溝である。坑底には一辺5cm強の四角い杭穴が複数検出されたが、その検出場所に規則性は認められなかった（25図）。SD481は幅約20cm、深さ約10cmを測り、断面形は浅いU字状を呈す溝である。SD511は幅約50cm、深さ約20cmを測り、断面形は浅い箱形を呈す溝である。西側は攪乱され不明であるが、東側は止まっている状態が確認された。

柱穴列1～4 11グリットでSD417を挟み、その北、南側で東西にのびる柱穴列1、2、B9からB7グリットに南北にのびる柱穴列3、A7、A8グリットに南北にのびる柱穴列4が検出された。遺構の主軸をみると、柱穴列4が真北よりわずかに東へふる以外、3遺構とも真北方向に主軸を有す。柱穴列1は、平面形が隅丸長方形を呈すピットが約150cm間隔で6基以上並ぶ。個々のピットの深さは東から約43cm、約50cm、約43cmと1つおきにやや深く、断面形はいずれも箱形を呈す。柱穴列2は直径約30cmの円形ピットが、約180cm間隔で8基以上並ぶ。個々のピットの深さはばらつきがあるが、東側ほど深くなる傾向がある。断面形は緩やかなU字状を呈す。柱穴列3のピットはB8グリット以南では平面形がひょうたん形を呈すピット、B7グリットでは平面形が隅丸長方形を呈すピットが約180cm間隔で南北に12基並ぶ（26図）。これらのピットはいずれも深さ約1mを測り、覆土のしまりがやや弱い。ひょうたん形を呈すピットには一辺約10cmの柱痕跡が坑底に達する状況が確認されたが（27、28図）、隅丸長方形を呈すピットには柱痕跡は確認されなかった（29、30図）。柱穴列4は直径約60～70cm、深さ約20cmを測るピットが南北に約180cm間隔で7基並ぶが、北から4基目と5基目の間隔はそれより広いことから柱筋を揃えた南北方向に並ぶ柱穴列であった可能性もある。掘り方はいずれも浅い碗形を呈し、瓦片が掘り方全体に円形に重ねられていた。なおこの積み重ねられた瓦片の中央に礎石が置かれたピットも確認されている（31図）。

カマド状遺構（SF469-2、440）ともに掘り方全体とその周囲に灰白色シルト質粘土が貼りつけられ、その中に炭化物や焼土粒をやや多く含む白色の灰が充填した状態で検出された。A9グリットに位置するSF469-2は東西約100cm、南北約80cmの隅丸長方形を呈す。灰を除くと南西隅に馬蹄形に整形された粘土枠が確認されたが、その部分は被熱し、赤化していた（32図）。A10グリットに位置するSF440は一辺約110cmの隅丸長方形を呈す。東側立ち上がりの粘土枠に切石2個が南北に並べて貼り付けられ、そのすぐ内側にSF469-2と同じく馬蹄形に整形された粘土枠が2箇所確認され（33図）、その先端に丸瓦片3個が粘土で固定されていた（34図）。馬蹄形の粘土枠と丸瓦片部分は被熱し、赤化していた。なおSF440は、検出時には北西隅以外は灰白色シルト質粘土にパックされ、北西隅には瀬戸・

美濃系播鉢が灰に埋まった状態で検出された (35 図、SF421)。この播鉢の直下でも火床が検出されており、SF440 の廃絶後、必要な部分以外は粘土で覆い播鉢を入れ炉状遺構に転用したのか。

地下室 (SU591、601) SU591 は Z11 グリットに位置する。開口部は東西 140cm 以上、南北約 165cm、深さ約 320cm を測り、平面形が不整形を呈す。坑底では西から北側が円弧を描くようにふくらむ (36 図)。最上層には通路状遺構の覆土と思われる砂利層が堆積し、検出時にはそれが一部落ち込んだ状態が確認された。覆土は大きく 3 つに分けられ、上層は通炉状遺構の覆土、中層は瓦片や貝殻、骨などの自然遺物を多く含むしまりの弱い層が東から西へ流れ込み、西側立ち上がり付近では、その中に大きなローム塊が確認された。下層はローム塊を主体とする層が比較的フラットに堆積していた (37 図)。以上のような状況から、SU591 は東側に入口があり、北西方向に室部を有す地下室と推定されるが、廃絶後、ロームを主体とする覆土で埋められ、その後ゴミ穴として 2 次利用され、4 面整地段階でその凹んだ部分が完全に埋められたのではなかろうか。SU601 は A7 グリットに位置し、東側立ち上がりは調査区外へのびる。開口部は東西 65cm 以上、南北約 140cm の隅丸方形を呈し、確認面からの深さは 110cm を測る。断面形はフラスコ形を呈す (38 図)。断面観察では、焼土を多く含む覆土が北から南へ流れ込む状況が確認された。火事の後始末をしたものか。

土坑 (SK460、609) A10 グリットに位置する SK460 は南北約 150cm、東西約 65cm のやや歪な小判形を呈し、深さ約 60cm を測る。覆土の大半は瓦片と割石がしめる土坑である (39 図)。A9 グリットに位置する SK609 は東西約 90cm、南北約 240cm、平面形が隅丸長方形を呈し、深さ約 80cm を測る。上層はローム土と灰白色シルト質粘土を主体とする層、下層は割石がわずかな覆土とともに数段敷き詰められた状況が確認された (40 図)。両遺構ともに覆土の状況などから何らかの基礎遺構とも考えられる。

(4) 5 面 (41 図、70 図)

5 面は火事で被災した建物址などが確認された面である。様々な形状の礎石あるいは根石と考えられる石が検出されたが、それらの多くが被熱し、割れた状況も確認された。検出された遺構の多くはピットであり、調査段階で柱穴列と判断されたものも数基あるが、明確に建物址として認識できたものはなく、検討課題の 1 つである。遺構の主軸は概ね真北方向に主軸を有す。なおピットの分布状況を見ると 4 面で厚い焼土層が確認されていた 9 グリット以南に集中している。

通路状遺構 (SR698、851) SR698 は A11 グリットに位置する。後述する SD697 の東から北側に約 200cm 幅で拵がっていた。玉砂利と瓦片が敷き詰められ、その表面は炭化し、焼け焦げたような状況が確認された。玉砂利と瓦片を含む覆土は、5 層整地層のローム層直上に 3～5cm ほどの厚みで敷かれていた。SR851 は A9 グリットから B7 グリットに位置し、500cm 前後の幅で南東から北西方向に緩やかな円弧を描くように検出された (41 図、中央白色部分)。北西端は攪乱、南東端は調査区外へのび、遺存状態が良いところでは上面は玉砂利が密に敷き詰められ、版築状に砂利層、間層、砂利層、間層、瓦片の順に突き固めた状況が観察された。完掘後、坑底からは何条もの轍状の溝が検出され、それらは SR851 とほぼ同方向へのびるが、深さ、幅、長さなどは不規則である (42 図)。これらの溝が検出されたのが 6 面直上であることから、藩邸造築時に作業道のような形で利用したところを 5 面整地時に玉砂利や瓦片を版築状に突き固め、邸内の通路として利用したとも推測される。

柱穴列 1～5 東西へのびる柱穴列を 3 列 (柱穴列 1～3)、南北へのびる柱穴列を 2 列 (柱穴列 4、5) 確認している。柱穴列 1 は東西 100cm 前後、南北 70cm 前後、深さ 100cm 前後を測る、平面形が隅丸長方形を呈す大型のピットが約 200cm 間隔で 5 基並ぶ。柱痕を有すものもあり、それらを見る

と柱は幅10cm強で坑底にまで達している。覆土はいずれもしまりがやや弱い(43,44図)。柱穴列2、3は礎石を有すピットで構成されているが、使用されている石をみると、丸石、割石、間知石など様々で、その大きさも均一ではないことから転用である可能性が高い。ただしどのような石であっても天板は平らに整形されている。礎石は約180cm間隔で東西に並ぶ。柱穴列4、5は南北約70cm、東西約40cm、深さ約40cmを測り、平面形が隅丸方形を呈すピットが約180cm間隔で4は6基、5は7基並ぶ。柱痕を有すものも多く、掘立柱の柱穴列である。

地下室(SU586、824、854、1205) SU586はA7グリットに位置する。東西約400cm、南北約480cm、深さ約340cmを測り、平面形が隅丸方形を呈す。下層には破碎礫、炭化した木材片などを含む層がレンズ状に堆積し、上層はローム土で版築したような状況が確認された。上層のローム土掘削中、瓦片を坑底に敷き詰めたピットと角石を円周状に3個配石したピットが南北に約180cm間隔で並んで検出された(45図)。地下室としての機能停止後、破碎礫や木材片などが廃棄されるなどゴミ穴のように利用していたものを、ある時点でローム土を入れ版築し、上屋を付設するために瓦片を詰めたピットを構築し、半地下室状の遺構として作り替えた可能性も考えられる。SU824はZ11グリットに位置する。東西330cm以上、南北約300cm、深さ約250cmを測り、平面形状が隅丸方形呈す(46図)。地下室として機能停止後はゴミ穴として利用され、5面整地時に窪地となっていた部分を版築状に埋め戻したような状況が観察された。北壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西壁は湾曲し、整形も雑であった。坑底は、北側には階段状のテラスを1段有し、西側は凹凸が著しく、落ち込んでいる状況が確認された。なお坑底中央付近には小判形のプランが確認されていたが、それは後述するSU1205という別の地下室であることが判明した。西側壁面や坑底の状況、SU1205の存在から、SU824は地下室としては機能せず、構築途中で掘削が断念され、その後、ゴミ穴とされたとも推測される。SU1205は東西200cm以上、南北約160cmを測る。坑底はSU824の坑底から100cmほど下で確認されたが、その坑底には白色化したローム土が検出された(47図)。北側の立ち上がりは開き気味に垂直に立ち上がり、壁面は比較的フラットに整形されていたが、北西隅から西側は袋状にハンクし、壁面も凹凸が著しい状態であった。南側は調査区外へ更に100cm以上ハンクすることが確認された。SU854はA7、A8グリットに位置する。東西約140cm以上、南北約250cm、深さ約180cmを測り、確認できた開口部平面形は楕円形を呈す(48図)。覆土上層は焼土粒や塊、著しく被熱した瓦片、金属滓、壁土などが北から南へ流れ込み、下層はロームブロックを多く含む覆土が堆積している状況が確認された(49図)。完掘後、南側が入口、北側が室部と考えられたが、その境の坑底には小さな段差を有す。天井は遺存してなかったが、室部の壁際のごく浅い溝状のものがめぐり、中央より一段低くされていた。水はけを意識したものか。室部の西壁立ち上がりはわずかにアーチ状を呈すことから、室部天井はドーム状を呈していた可能性がある。

溝(SD697、800、801) SD697はA11からB11グリットに位置する。東、西、南端は調査区外へのびており全体的な形状は不明であるが、調査区内で検出された部分は50図のような複数のコーナーを有す状況が確認された。幅50～60cm、深さ約70cmを測る。溝内は焼土や焼瓦片などが堆積し、部分的に炭化した樋状の痕跡も確認された(51図)。SD697の東から北側には通路状遺構(SR698)が検出されたが、SD697に囲まれた西側部分にはSR698は拡がらず、5層整地層であるローム土が緩やかなマウンド状に確認された。SD697を完掘したところ、坑底からは5cm角の坑穴が多数検出されたが規則性はあまり認められない。SD800、801はA8からA6グリットに位置する(52図)。SD800は幅約90cm、深さ50～60cmを測り、断面形はU字状を呈す比較的大型の溝である。南北に約22mのびる事が確認されたが、南端は前述した柱穴列1を超えてのびない。また北端は攪乱さ

れ、INCまで続くかは不明である。SD801は800の坑底で検出された南北方向にのびる溝で、幅40～50cm、深さは深い部分で約50cmを測るが、A7グリット以南では検出されなかった。位置関係からSD801はINCで検出されたSD377に続くと推定している。

方形土坑 (SK608、797) SK608はA11、SK797はA8グリットに位置する方形土坑である。SK608は東西約85cm、南北55cm以上、深さ約60cmを測り、SK797は東西50～70cm、南北約75cm、深さ約50cmを測る。この2つの遺構は掘り方内に炭化した材が坑底と壁面で確認され、その周囲からは釘も検出された(53図)。また、ともに炭化材の直下に灰白色シルト質粘土層が確認された。浸透枿のようなものが埋められた施設であったのか。

(5) 6面 (71図)

6面で確認された遺構は溝、ピットが中心である。遺構数も少なく、2～5面までは遺構分布密度が薄いA11グリットの南側でもピットや土坑などが確認された。遺構の主軸も真北以外の軸を有するものが多いようである。以上のような状況から、1～5面とは異なった土地利用が行われたことが推測される面であり、将来的には出土遺物の様相や年代観を確認し、遺物の方からも当地点の土地利用の変化が裏付けられるのかを検討していきたい。

溝 (SD929、979、995など) 溝はいずれも断面がU字状を呈すもので、掘り方は雑である。SD929はA7グリットに位置し、南北にのびる溝である。幅約20cm、深さは10cmほどで、北側ほど浅い。SD979、995はA9、Z9グリットに位置し、ともに東西にのびる溝である。SD979は幅約15cmで、深いところで約20cmを測るが、西側ほど浅い。SD995は幅約50cm、深さは約30cmを測り、6面で検出された溝の中では最も深い。SD979と同じく西側ほど浅くなる傾向が認められた。なおSD995の南側には長さは異なるが、幅、深さともに酷似する短冊状のごく浅い溝(SD880、928、958、964)が、ほぼ等間隔に東西に並んで検出された。いずれも深さ10cm弱の浅く、短いものである。

柱穴列 A9グリットに位置する。東西90～200cm、南北75～90cm、深さ80～90cmを測る、平面形が小判形ないし隅丸長方形を呈す大型のピット(54、55図)が、東西に約180cm間隔で6基並ぶ。柱穴列東端のピットは半分が調査区外へ、西側は3面のSK3で壊されている。なおZ10、A10グリットでこの柱穴列のピットと規模や形状が類似する大型のピットが4基確認されているが、A9グリットの柱穴列からは500cm以上離れていることから、1つの建物跡と認識すべきか否かは検討の余地がある。

地下室 (SU699) A7グリットに位置する。東西約410cm、南北約380cm、深さ約165cmを測る、平面形が隅丸方形を呈す地下室である(56図)。四方の壁面はほぼ垂直に整形されているが、工具痕が顕著である。坑底も同じく工具痕が顕著であるが、東、南、北壁際には幅20cm弱のごく浅い溝状の掘り込みが認められた。水はけを意識したものか。坑底直上の地山のローム土は鬼板化し、鉄分が沈着した状況が確認された。断面観察では下層はロームブロックを多く含む覆土が水平に堆積し、その上にローム土を貼り床状にしている状況が確認された。しかしローム土の厚さは均一ではなく、また中央付近のみに限られていたため、調査時には貼り床と考えるには至らなかった。なおこのローム土の上には灰色細砂が15cm程の厚さで確認された。以上の状況からSU699は地下室として構築されたが、廃絶後、半分ほど埋め、ロームを貼り、細砂が入れられるなどして、水はけを意識した施設として作り替えられた可能性もある。

(6) 7面 (72図)

6面同様、遺構は少なく、検出される場所も局所的であり、切り合いが確認される遺構も少ないことから、頻繁に作り替えなどが行われたりするほどの空間利用があったとは考えにくい面である。遺構の大半は素掘りのピットであったが、建物址として認識できたものは少ない。

柱穴列 B7グリットに位置し、180cm間隔でピットが5基並ぶ。各ピットは東西30～40cm、南北約60cm、深さは40～50cmを測り、平面形は小判形を呈す。なお本遺構の北、南側には同じ主軸上にピットが数基確認されており、本来は長い柱穴列であった可能性もある。

井戸 (SE1111、1318) ともに付帯施設を持たない素掘りの井戸である。SE1111はA10グリットに位置し、径約160cmを測る円形の井戸である。南、北側の相対する位置に、立面形がカマボコ形を呈す足掛け穴が30cm間隔で穿たれている。SE1318はA9グリットに位置し、径120cmを測る円形の井戸である。東、西側の相対する位置に、1111と同じく立面形がカマボコ形を呈す足掛け穴が30cm間隔で穿たれている(57図)。

地下室 (SU1050) B8グリットに位置する。東西190cm以上、南北約170cm、確認面からの深さは約220cmを測る(58図)。いずれの壁面も工具痕は顕著である。北、南側の壁面はほぼ垂直に立ち上がり、東側壁面はハングし、アーチ状に立ち上がる(59図)。西側立ち上がりは調査区外にあり状況は不明であるが、東西断面形がフラスコ形を呈す地下室か。

大型長方形土坑 (SK1104) A11、A10グリットに位置し、東西約170cm、南北約600cm、深さ45cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈す(60図)。断面形状は浅いU字状を呈し、坑底、壁面は凹凸が顕著であった(61図)。覆土はレンズ状に堆積し、上層には比較的多くの陶磁器が含まれていたが、それら陶磁器の年代観をみると17世紀後半頃には廃絶した遺構と判断される。

(7) 8面 (73図)

8面とした遺構には、A6グリット東側のように近現代にロームまで削平され、確認面がロームとなった遺構も含む。遺構の多くは8グリット以北で確認され、小ピット、植栽痕を中心に、上水遺構、地下室、溝、溝状土坑などが確認された。調査段階で覆土や形態などから植栽痕と判断された遺構が、調査区西壁付近とA7からA9グリット中央付近に南北に広がる状況が確認されることから、意識的な植樹が行われた可能性もある(73図、横線)。

上水遺構 SD1488はA6からA8グリットに位置する。プランは東西約120cm、南北約260cmの溝状に確認されたが、確認面から深さ150cmあたりで北、南側それぞれがトンネル状に掘削され(63図)、坑底では南北に18m以上のびる事が確認された。本遺構北側は深さ約400cmの大型の攪乱に、南側は3面のSK190に切られており、この遺構が調査区内からどのように広がるかは確認できなかった。なお本遺構は坑底が地表面下約400cmで確認されるなど、調査の安全確保が困難と判断されたことから部分的なトレンチ調査にとどめた。

トンネル状に掘削されていることが確認できたA6グリットでは幅約70cm、確認面から坑底までの深さは約320cmを測る。東西壁面はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈す。坑底から10cmほど上のあたりで約20cm幅で炭化した木樁が南北にのび、その両側に長さ約20cmの鉄釘が立った状態で検出された(64図)。鉄釘は左右両側に2列ずつ、それぞれの列の釘は約20cm間隔で立っている状況が確認された。掘り方よりの釘は足の部分を上にした状態で、その内側の釘は材が付着した頭を上にした状態で検出された。釘の位置や頭の検出状態が異なるのは、木樁の構造を示している

も推定される。すなわち頭を上にした状態で検出された釘は天板と側板を打ち付けた釘で、足を上にした状態で検出された釘は底板と側板を打ち付けた釘の可能性があり、検出された木槿がいわゆる寄せ木式であった事を示唆しているのではなかろうか。

地下室 (SU1352) SU1352はA6、A7グリットに位置する。東西約130～160cm、南北約260cm、深さ約210cmを測り、平面形は不整形を呈す(63図)。西、北壁はほぼ垂直に立ち上がり、南から東壁は弧を描くように拡がり、東壁は東へ大きくハングした状況が確認された。いずれの壁面も工具痕が顕著であったが、湾曲した東壁には立面形が扁平なカマボコ形を呈す棚状の凹みが2箇所穿たれていた。坑底南西隅は人1人が立てるほどの幅でステップ状に1段高くされ、その中央が僅かに窪んでいた。本遺構の覆土の堆積状況や壁面、坑底の状況などから、構築途中にSD1488の存在が明らかとなり、地下室としての構築は放棄され、最後はごみ穴として利用された可能性が高い。本遺構からはワインボトルの破片やボタンなども出土しており、幕末から明治初めには廃絶していたと思われる。

溝 SD1161はB6からB7グリットに位置し、南北にやや蛇行してのびる溝である。幅約90cm、南北約11m以上、深さ40～50cmを測り、断面形状は浅いU字状を呈す。坑底や立ち上がりの凹凸は顕著である(62図中央)。遺構の主軸は真北からわずかに西へふっている。

溝状土坑 (SK1160、1451、1483、1498) SK1160はB8グリット、SK1451はB6からB7グリット、SK1483、SK1498はB6グリットに位置し、4基の遺構はほぼ南北に並ぶ。規模は異なるが平面形状が細長い長方形を呈すこと、坑底や壁面の凹凸が顕著であること、断面が箱形に近い形状を呈すことなど共通点が多い。中でもSK1451は最も規模が大きく、東西約70cm、南北約450cmを測り、平面形は南北に長い長方形を呈す。南北両端の深さは約30cmで、中央付近は深さ90cmと深くなっている。北側立ち上がり付近の坑底は、緩やかな階段状を呈す(65図)。このように坑底の一部がテラス状を呈す状況は、SK1483やSK1498でも確認された。なおSK1160は坑底直上に炭化物が検出されたり、坑底に杭穴状のものが検出されるなど、他の遺構とは異なる特徴も有す(66図)。

3. 成果と課題

今回の調査地点は本郷構内の遺跡の中でも極めて攪乱が少なく、江戸時代の生活面が7面、遺構総数が1,500基を超えて確認されるなど、加賀藩邸南端の土地利用を考える上で大きな成果が得られた。遺構の検出状況をみると、春日通りに近い場所すなわち調査区南側11グリット付近に遺構が密に検出される状況がなく、また検出された溝や通路状遺構の位置などもあまり変化がなかった。藩邸縁辺部で利便性があまり良くなかったという事もあるかもしれないが、街道に面した場所ということに常に意識し、藩邸の造作などが余り頻繁に行われなかった場所だった可能性もあろう。

最後に今回の調査成果と課題についてまとめてみたい。

- 1) 火事で被災した面を確認
- 2) 上水の存在を確認
- 3) 18世紀代の炉やカマド状遺構を検出

1) の火事については火災層からの遺物が少なく、現時点では火事の年代を比定できていない。周囲の調査において確認されている元禄16(1703)年の火事であるならば被災した状態で検出された5面で検出された遺構は、「1. 調査の経緯と経過」で触れたようにその火事で焼失したとされる綱吉の御成御殿に関連する遺構の可能性がある。御成御殿が描かれた絵図面などと照合すると、当地点は

御成門門前の空閑地から御成書院等の殿舎あたりに該当することが想定されるが、調査では明確に照合できる遺構は確認できなかった。確認されたピットの規模、構造をみると、礎石を伴うものと素掘りのものが混在し、その規模や構造も御殿を調査した医学部教育研究棟地点（東京大学構内調査一覧番号24）で検出されたピットとは規模、構造ともに大きく異なるものであった。このような違いは、短期間の利用を前提にした御成御殿と、藩主の居住空間として長期利用を前提にした御殿との違いということもあると思われる。また上屋の荷重の違いで基礎構造を変えている可能性もあるかもしれないが、同じ生活面に構造が異なるピットが存在するという事は、検出された全てのピットが綱吉のために準備された御成御殿に伴うものであったのかという疑問も生じさせる。ピットの検出状況を見ると、非常に近接して構築されているものや切り合いのあるものも確認されていることから、何らかの建物の増改築が行われたとも推定される。文献資料によると綱吉の御成後、多くの大名、旗本、門跡などを招待し9回の饗応を行ったと記載されているが、その際の御殿の建物状況についての記載はない。最後の饗応後、御成御殿が火事で焼失するまでの1年数ヶ月の間、御殿以外で利用されることがなかったのか、増改築されることがなかったのかなど、文献資料も合わせて詳細に検証していく必要がある。

2) 加賀藩邸内に上水施設が付設されていた事は、総合研究棟（文、経、教、社研）地点（東京大学構内調査一覧番号54）や情報学環・福武ホール地点（東京大学構内調査一覧番号78、【略称】HJF06）などで上水遺構が検出されていることからすでに明らかとなっている。HJF06のそれは2本確認されていて、出土遺物の年代観から千川上水の導水施設と報告されている。千川上水が利用されたのは元禄9（1696）年から享保7（1722）年であり、この後いったん上水としての利用が停止されるが、天明元（1781）年から天明6（1786）年に農業用水として再び機能していたとされる。当地点で確認されたSD1488は覆土がローム土主体であり、出土遺物も少なく単体で遺構年代観を得ることは難しいが、本遺構を切るSK190が18世紀後半代には埋められていた状況が確認されていることから、SD1488はそれ以前の遺構と推定され、SD1488も千川上水の導水施設であった可能性もある。

3) 炉状遺構は医学部附属病院入院棟A棟地点（東京大学構内調査一覧番号23、【略称】HW）において天和2（1682）年の火事で焼失したとされる長屋に伴うものがすでに確認されている。HWでは当地点で確認されたものと同じく、周りを粘土で囲い、その中に灰が充填された炉状遺構の他、様々な形態の炉状遺構が確認されている。本地点で確認された炉状遺構は検出状況などから18世紀代の遺構であると推測されるが、この年代の炉状遺構が東大構内で調査されたのは本地点が初めてであり、HWで検出された17世紀代の炉状遺構との比較、検討も行いたい。

石組を利用したカマド状遺構は、法学部4号館地点（東京大学構内遺跡調査一覧番号2）でC2-1号組石遺構として報告されている例が東大構内における唯一の例であり、本地点のSF440が2例目である。C2-1は切石を積み上げ半円形にした石組が2基連なった状態で検出され、その周囲には多くの粘土が確認され、検出状況などから2基1対の竈として構築されたものではないかと報告されている。また石組内からは焼土、炭化物塊などが検出されたと報告されている。火床と思われる部分が2基1対で構築されたと推測される事、切石の使用、またその固定に粘土を使用しているなど本地点のSF440と共通する点もあるが、切石の使用箇所や焚き口付近に丸瓦を立てて使用しているなどの構造上の違いもある。またSF440はその検出状況からカマドから炉状遺構へ作り替えられた事例と推測されるが、このような事例が他にもあるのかもあわせて調査していきたい。

以上の調査成果以外にも、19世紀代の遺構、遺物が少ないことからその頃の藩邸南端の土地利用が希薄であった可能性があることや、10グリット以南で大規模な盛土造成が確認されたことなど、

これまでの周辺調査では確認されていない成果も得られており、本報告ではそれらも含めて藩邸南端の当時の様子を復元していきたいと考えている。

【参考文献】

追川吉生 2004 「インキュベーション施設建設に伴う埋蔵文化財調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4

追川吉生 2006 「ベンチャープラザ地点 (HVP06) 発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』6

文京区教育委員会 2011 『本郷台遺跡群 第2地点』

東京学芸大学近世史研究会編 2006 『千川上水・用水と江戸・武蔵野～管理体制と流域社会』 名著出版



2図 SU33 完掘



3図 SU33 南壁テラス検出状況



4図 SU159 坑底付近北壁



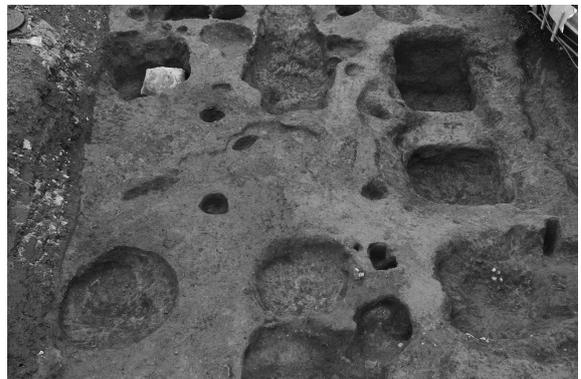
5図 SU159 出土石製品



6図 SD101 完掘



7図 SK29 瓦検出状況



8図 土坑群

1. 春日門横教育研究棟 (HKK11)



9 図 SK3 (上)・SK190 (下)



10 図 建物址 1



11 図 建物址 2



12 図 SE207 内側掘り方断面



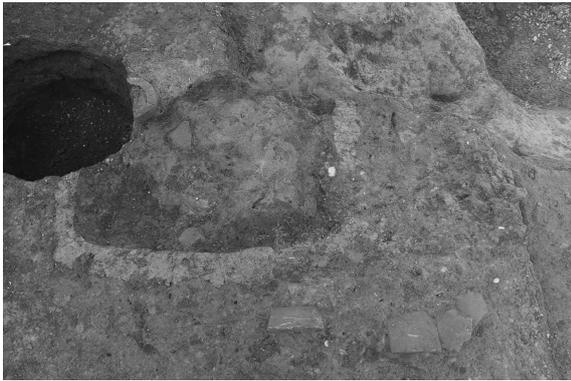
13 図 SE207 完掘



14 図 SF273 検出状況



15 図 SF386・387・388 検出状況



16 図 SF376・445 検出状況



17 図 SF386 内側完掘



18 図 SF376 内側瓦検出状況



19 図 SU332 上端完掘



20 図 SK375 上層断面



21 図 SK375 木柁検出状況



22 図 SX412 断面



23 図 SX412 (上)、450 (下) 完掘



24 図 11 グリット瓦検出状況



25 図 SD417 完掘



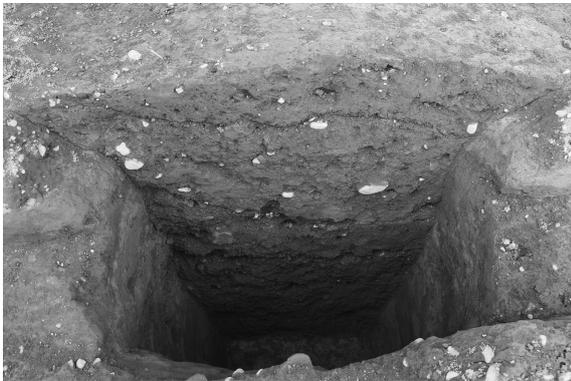
26 図 柱穴列 3



27 図 SP295 (右)・SP296 (左) 断面



28 図 SP295 (右)・SP296 (左) 完掘



29 図 SP349 断面



30 図 SP349 完掘



31 図 SP473 瓦検出状況



32 図 SF469-2 内側完掘

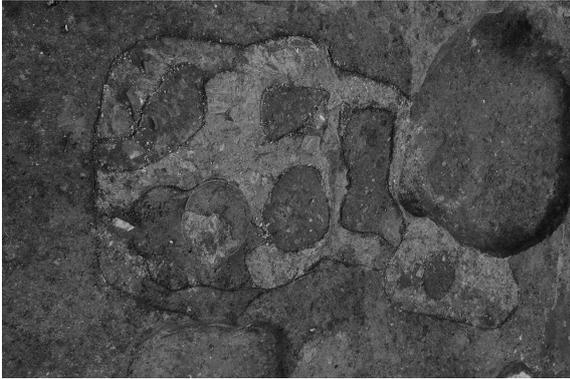
1. 春日門横教育研究棟 (HKK11)



33 図 SF440 内側完掘



34 図 SF440 焼き口検出



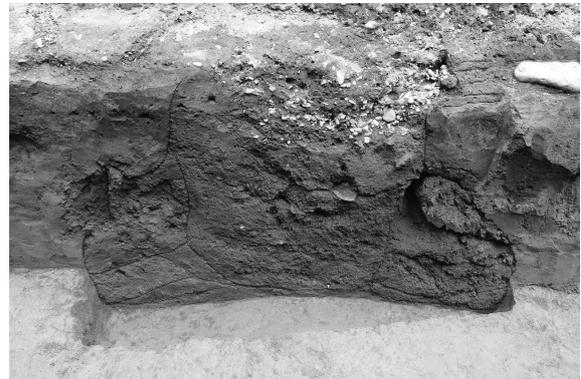
35 図 SF421 検出状況



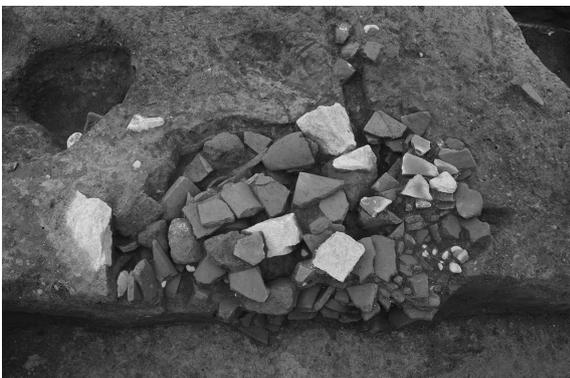
36 図 SU591 完掘



37 図 SU591 断面



38 図 SU601 断面



39 図 SK460 1 段目瓦検出状況



40 図 SK609 割石検出状況



41 図 5 面全景



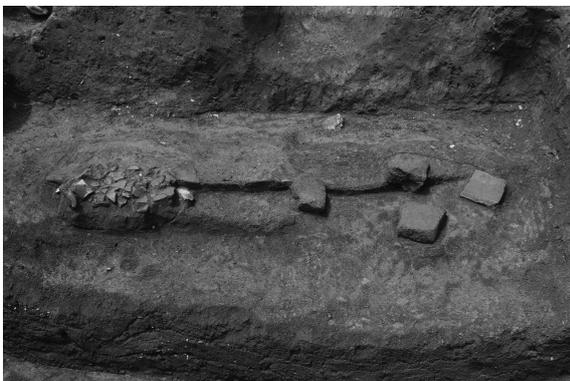
42 図 SR851 完掘



43 図 柱穴列1 大型ピット (SP791) 断面



44 図 柱穴列1 大型ピット (SP791) 完掘



45 図 SU586 内ピット検出



46 図 SU824 完掘

1. 春日門横教育研究棟 (HKK11)



47 図 SU1205 完掘



48 図 SU854 完掘



49 図 SU854 断面



50 図 SD697 完掘



51 図 SD697 断面



53 図 SK608 炭化物検出



52 図 SD800 (上)・801 (下) 完掘



54 図 大型ピット (SP951) 断面



55 図 大型ピット (SP951) 完掘



56 図 SU699 完掘



57 図 SE1318 完掘



58 図 SU1050 完掘 1



59 図 SU1050 完掘 2



60 図 SK1104 完掘

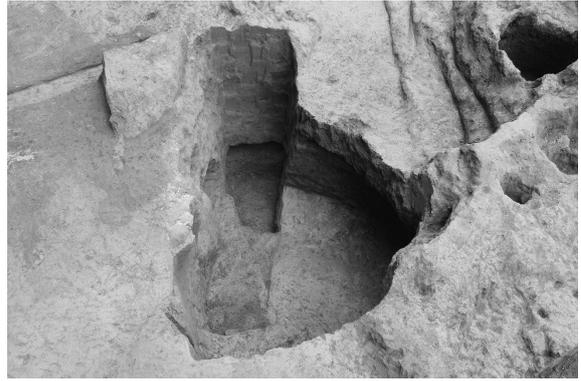


61 図 SK1104 断面

1. 春日門横教育研究棟 (HKK11)



62図 B7グリット8面(地山)全景



63図 SU1352完掘、SD1488検出状況



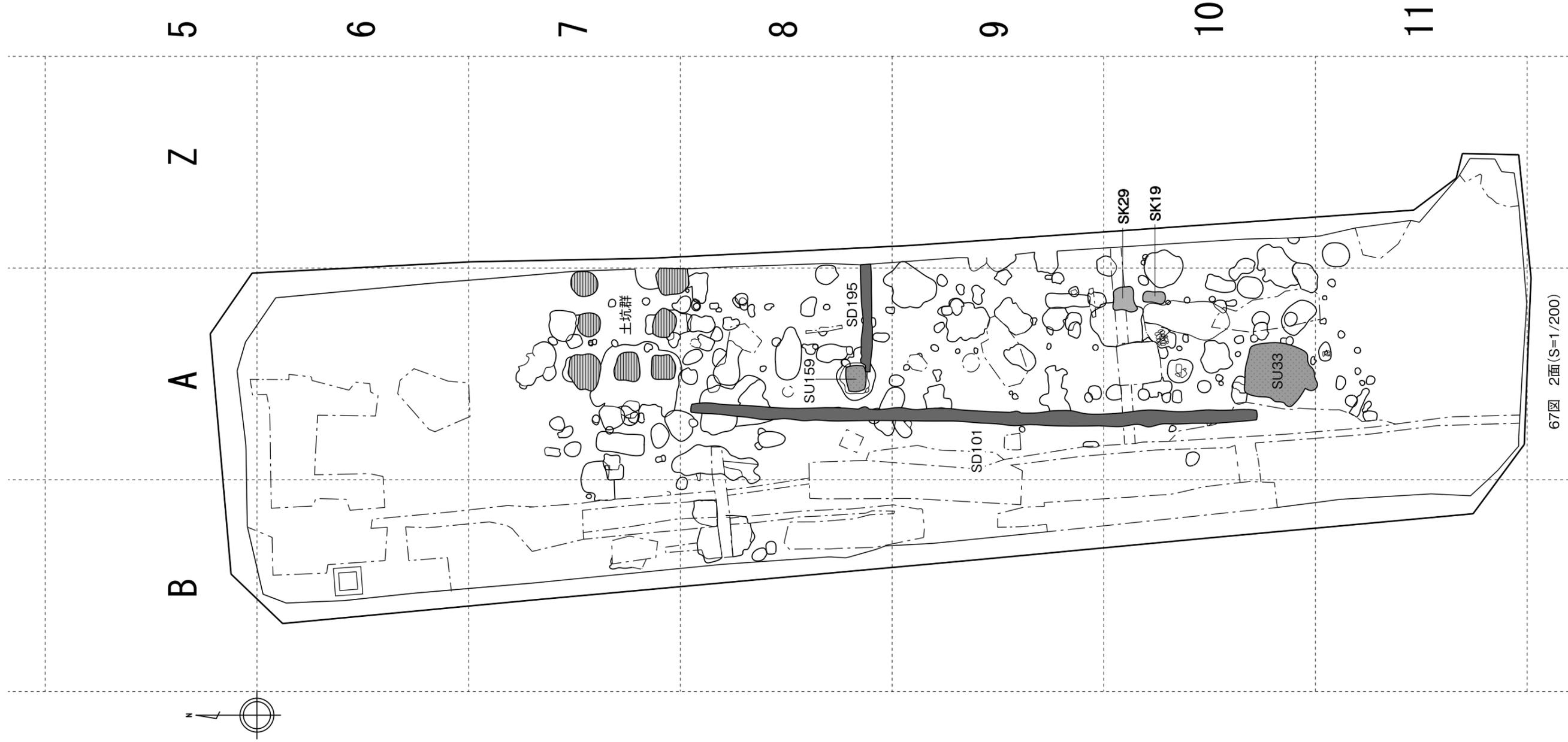
64図 SD1488木樋、釘検出状況



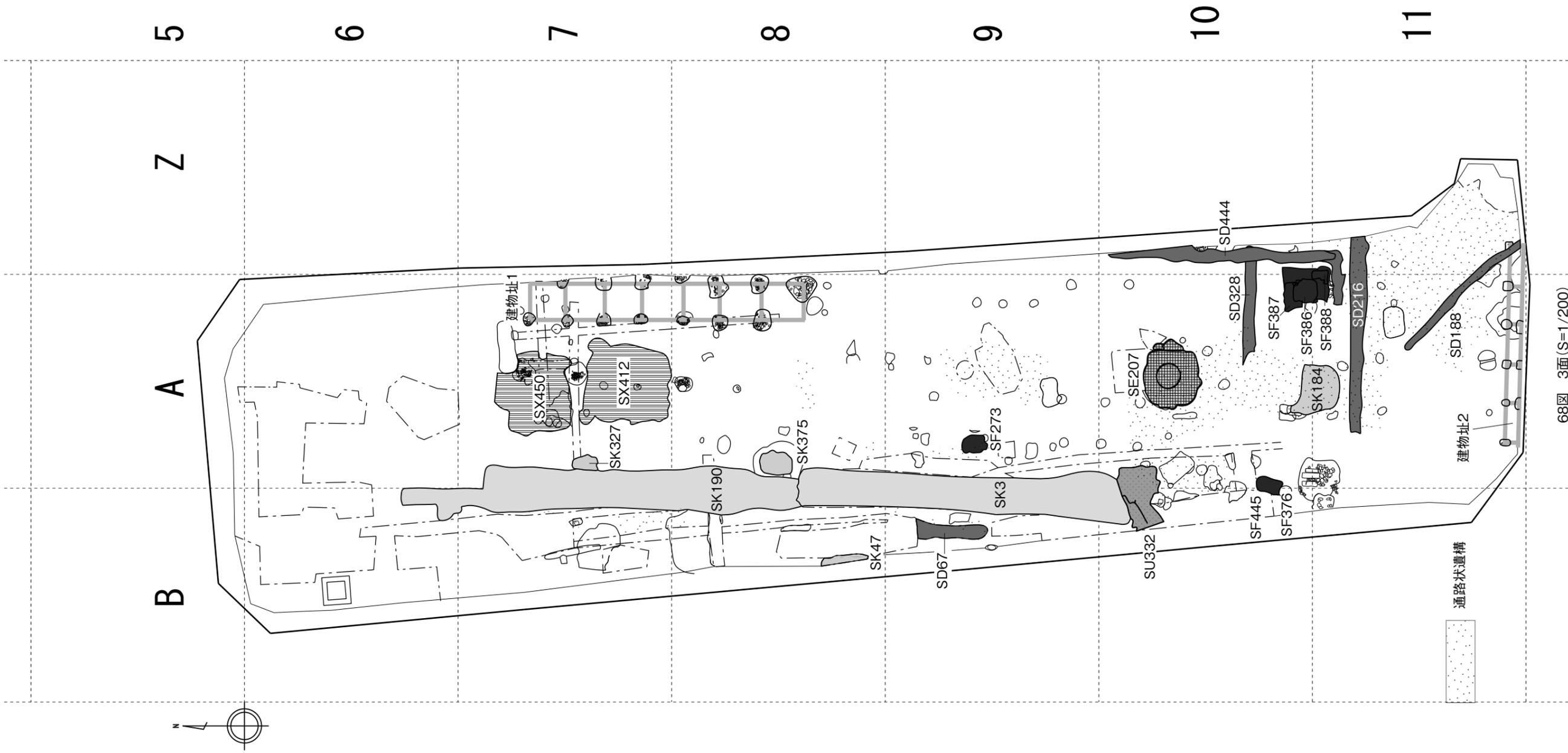
65図 SK1451完掘



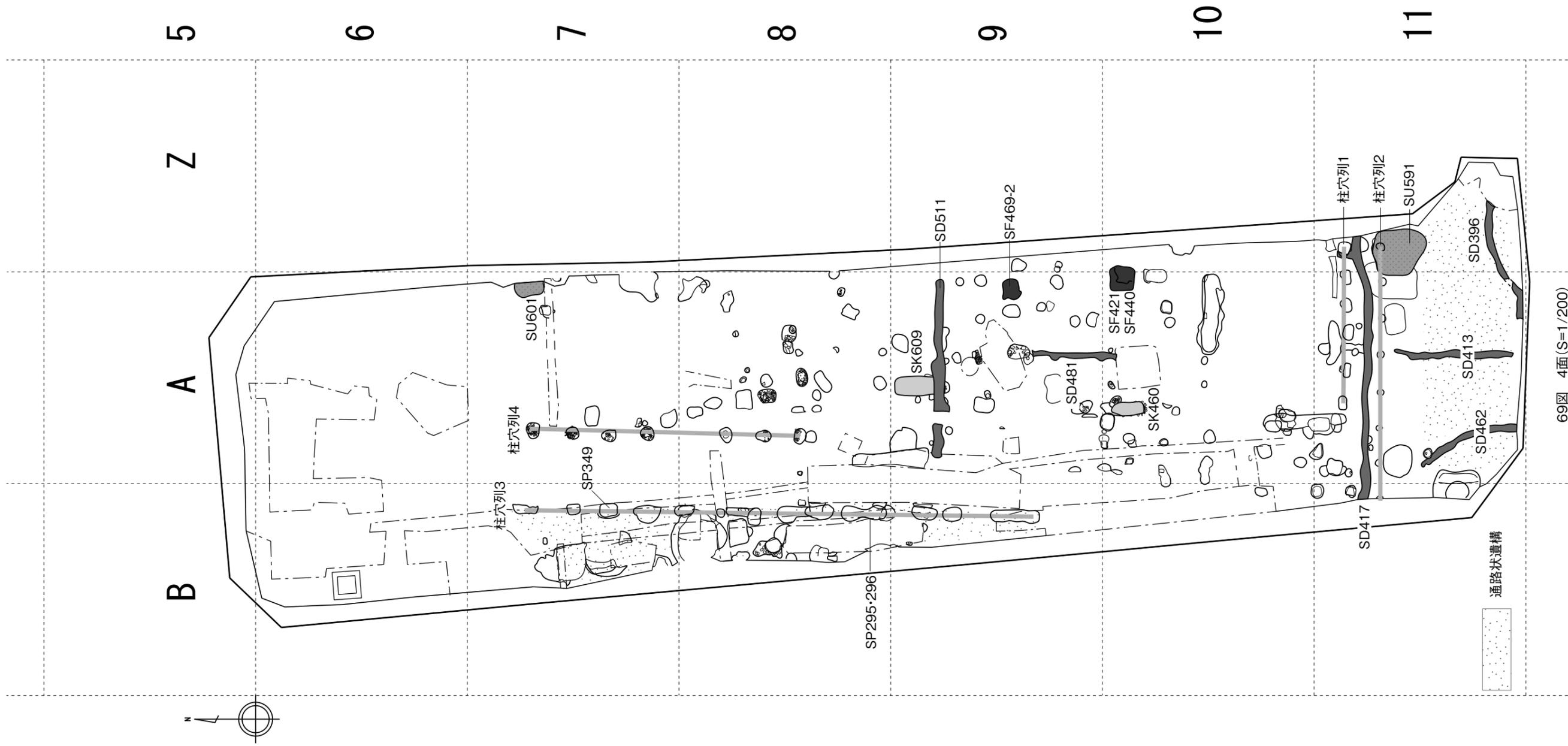
66図 SK1160炭化物検出状況



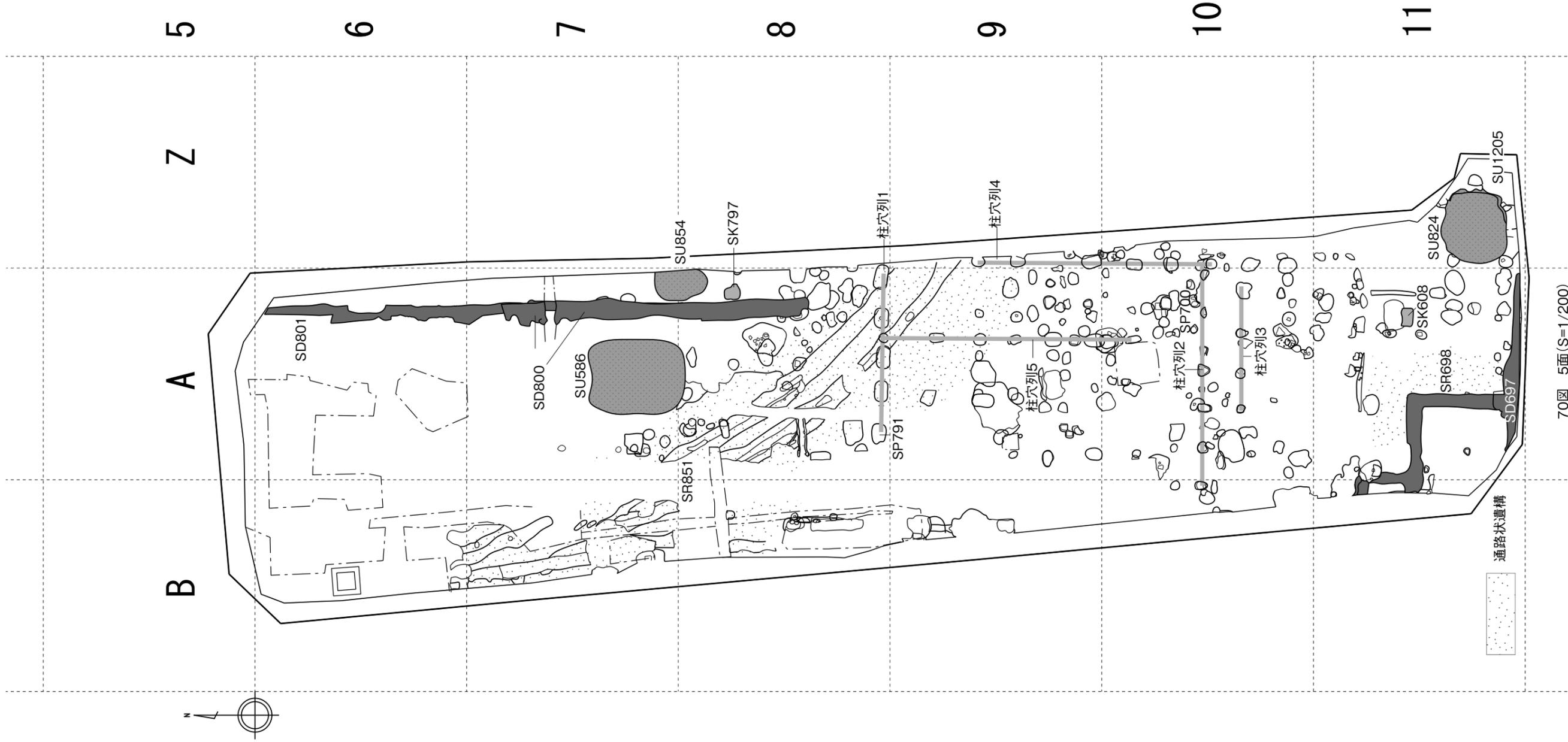
67图 2面(S=1/200)



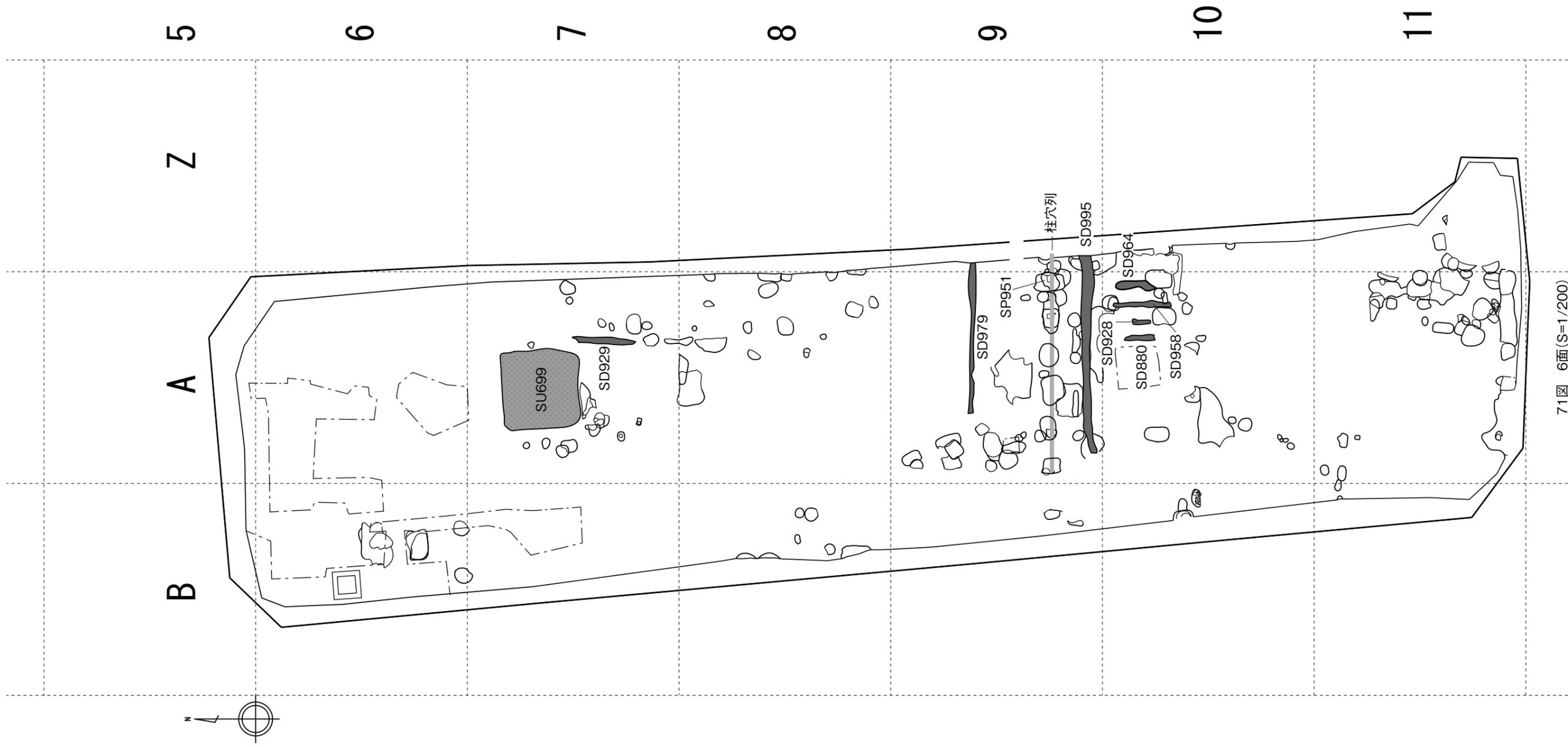
68図 3面(S=1/200)



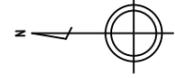
69图 4面(S=1/200)



70图 5面 (S=1/200)



71图 6面(S=1/200)



B

A

Z

5

6

7

8

9

10

11

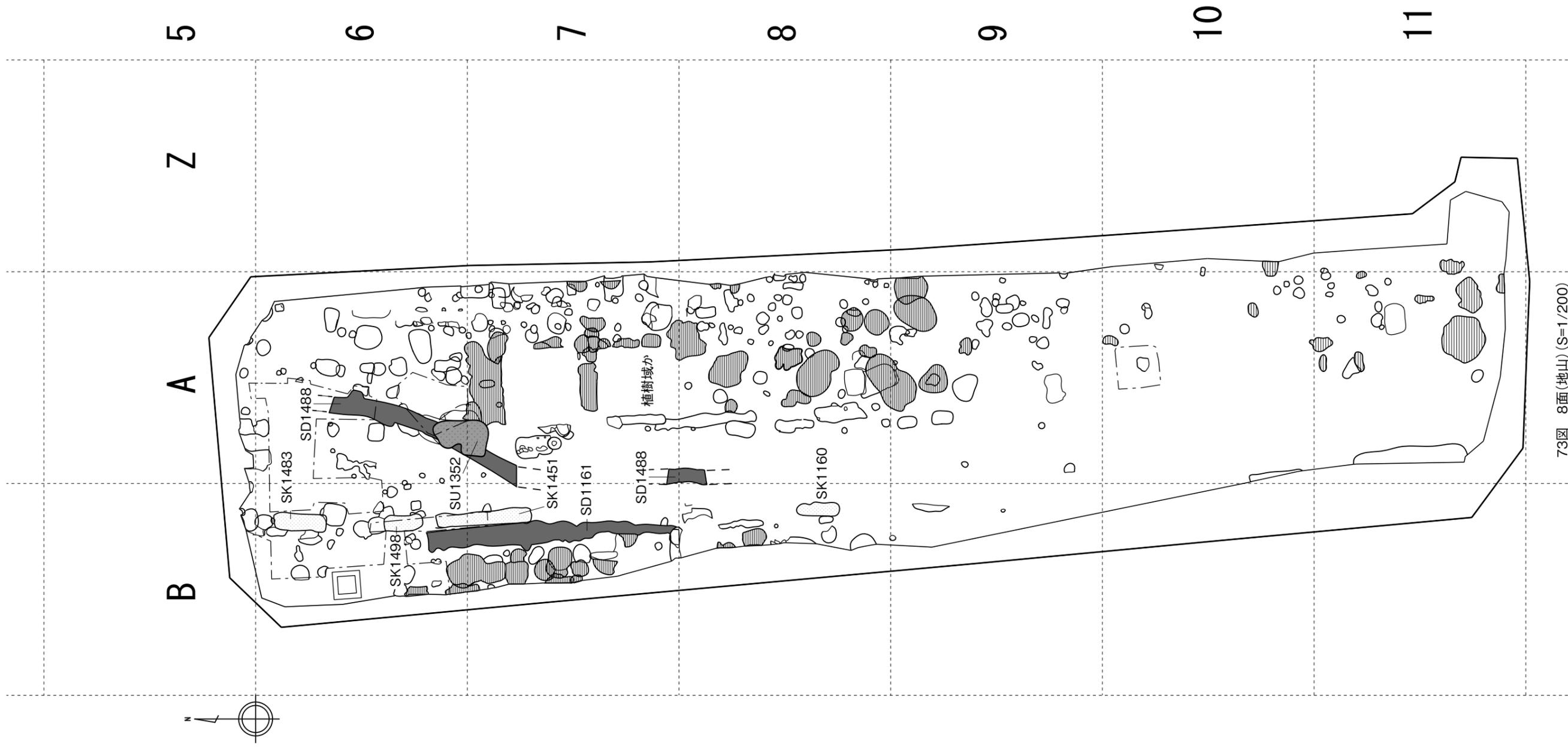
柱穴列

SU1050

SE1318

SE1111

SK1104



73図 8面(地山) (S=1/200)

2. 本郷 113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期1次 (HHWB12)

所在地 東京都文京区7-3-1 (文京区No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2012年3月1日～11月30日

調査面積 2,786㎡

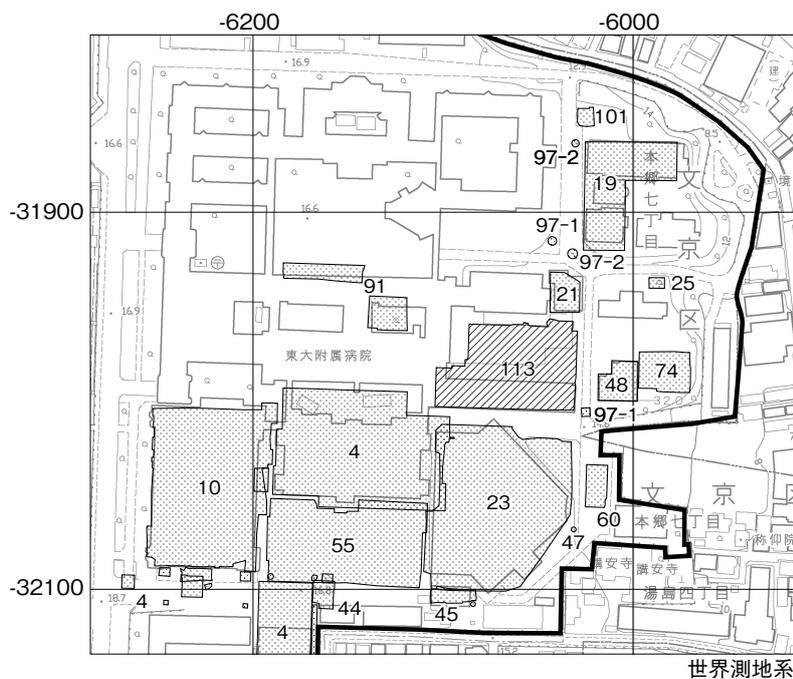
調査担当 成瀬 晃司

1. 調査の経緯と経過

東京大学は、医学部附属病院入院棟A北側に位置する、中央病棟・深部治療棟跡地に入院棟Ⅱ期の新営を計画した(1図113)。建設地点は、「文京区No.47 本郷台遺跡群」とする周知の遺跡として登録されているため、文化財保護法第93条に基づく事前発掘調査の必要があった。そのため本学施設部との協議の結果、平成24年3月1日から同年11月30日にかけて調査を実施することとなった。調査は深部治療棟と中央病棟の解体進捗状況などから便宜上ANライン付近を境に南側をA区、北側をB区とし、さらにA区のうち25ライン以西をC区と分割して調査を行った(10図)。

2. 調査の方法と概要

調査区には5mメッシュのグリッドを設定した。グリッド軸は立体駐車場地点(1図91)での設定軸を基準としたことから、本地点内のグリッド番号は中途からの値となっている。但し、立体駐車場地点のグリッド座標値は、2001年8月の構内地上点(文京区多角点測量点)を既知点とした結合多角測量成果を用いているが、2011年12月に実施したGPS測量で、構内地上点の座標値に誤りがあることが確認された。本地点の座標値は2011年12月測量成果を基準にしたことから、立体駐車場地



1図 調査地点の位置 1/4000 (113が調査地点)

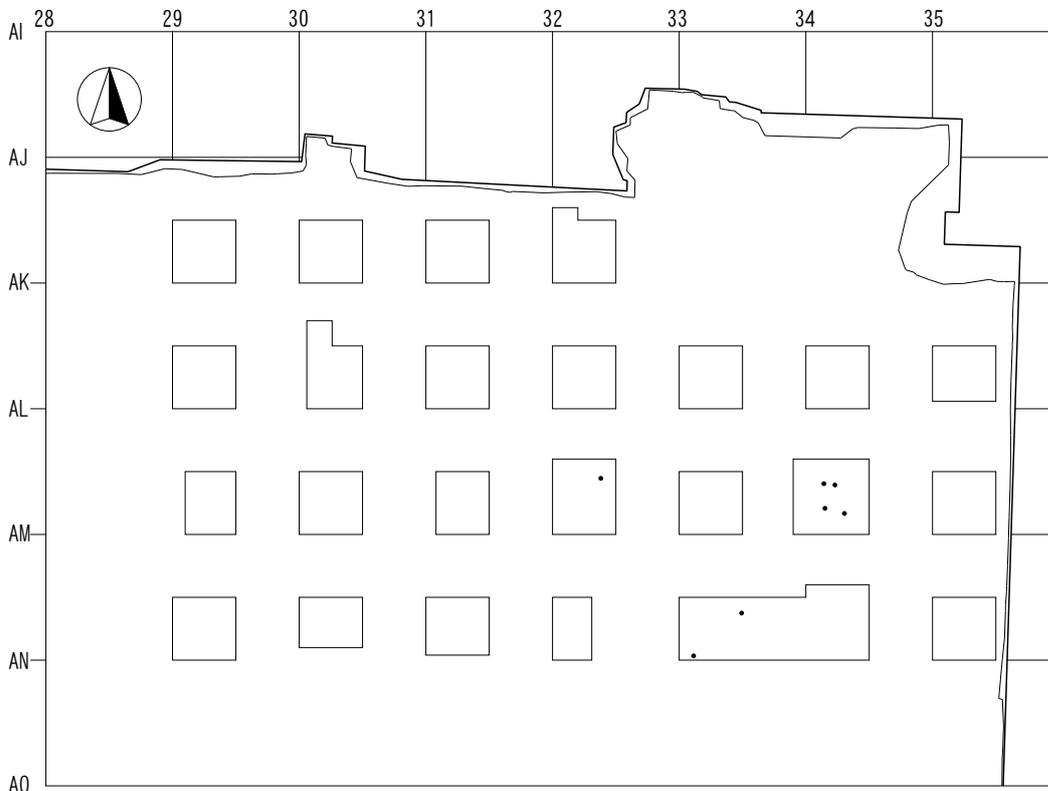
点グリッド座標値とはX軸で+0.255m、Y軸で+0.627mのずれが生じている。

本地点の調査では、江戸時代、古墳時代、縄文時代、旧石器時代の遺構、遺物が確認された。江戸時代では、加賀藩下屋敷及び富山藩上屋敷に関する柵列、地下室、井戸、炉跡、溝、植栽痕などの遺構422基を検出し、陶磁器、土器などの遺物がコンテナ60箱出土した。古墳時代では、前期～中期にかけての竪穴式住居10軒、後期の竪穴式住居1軒を検出し、土器、勾玉などの遺物がコンテナ10箱出土した。縄文時代は炉穴、ピットなどの遺構47基を検出し、コンテナ1箱の土器が出土した。旧石器時代では、立川ロームⅣ層中より、石器類7点が出土した。

しかし全体的には調査地点の大半を占める旧建物範囲において、その基礎による攪乱がローム層中に及んでいたため、ピットなどの小遺構は全て削平され、地下室、井戸などの大形遺構がかろうじて遺存する状況であった。特に本地点は東に向かう緩斜面上にあるため、西側では立川ロームⅨ層レベルまで旧建物建設時の削平が及んでいる状況であった。以下、時代区分に従い概要を記載する。

(1) 旧石器時代

本地点周辺では、看護師宿舎Ⅲ期地点(1図74)、ドナルド・マクドナルド・ハウス地点(1図101)の調査で立川ロームⅦ層より石器類が出土していることから、立川ロームⅩ層上面までを対象として、各グリッドの南西域に2.5m四方のテストピットを設定し、調査を行った。28ライン以西は前節でも述べた様に、すでに立川ロームⅨ層が露出していたことから調査対象外とした。調査の結果、AL32～34グリッドの立川ロームⅣ層からチャート製のフレイクが5点、AM33グリッドの同層から黒曜石製のフレイクが2点出土した(2図)。しかし、その散漫な分布状況から本地点内を定点とした活動は行われていなかったといえよう。

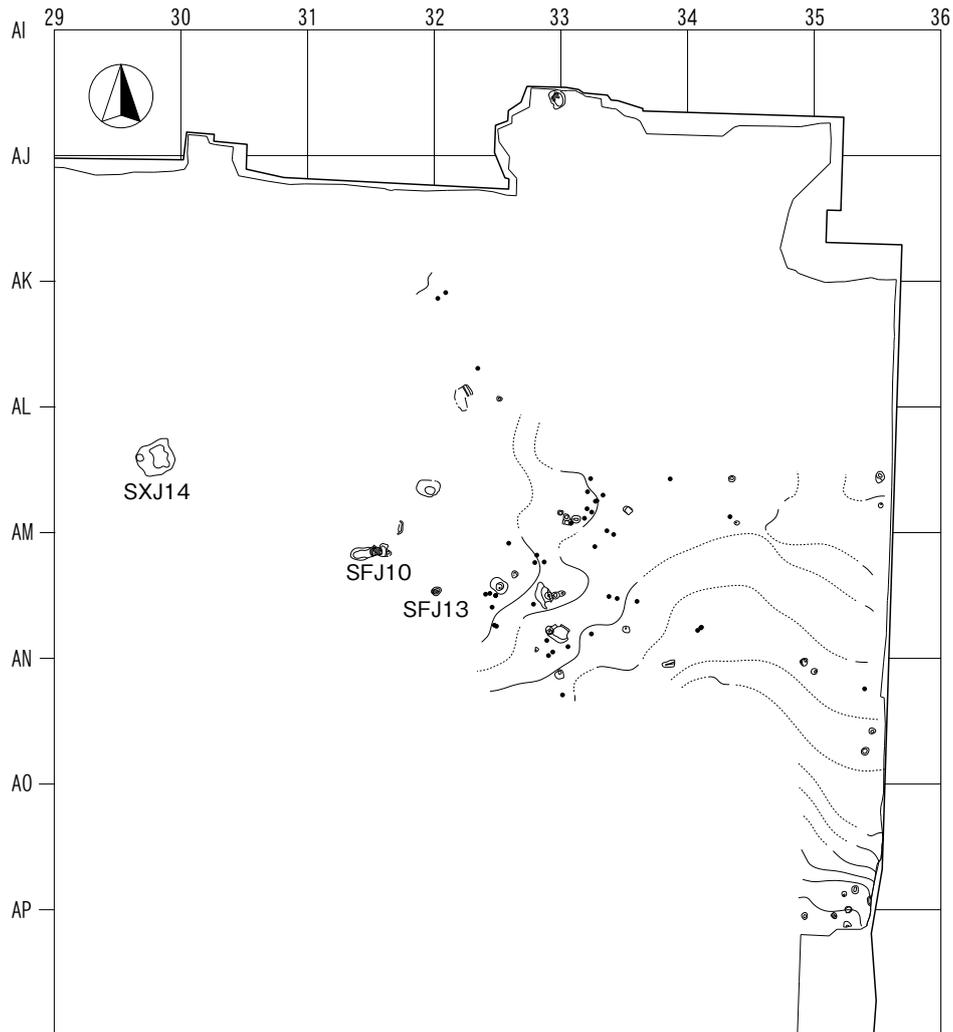


2図 旧石器時代遺物分布図(1/300)

(2) 縄文時代

31ライン以东では谷地形の影響を受け、縄文時代前期～後期初頭に比定される沖積層（淡色黒ボク土）が遺存しており、層中から前期前半に比定される土器片が数十点出土した。またⅢ層直上からは撚糸文土器片が1点出土した。

遺構では、炉穴 SFJ10・SFJ13（AN31・32グリッド）、風倒木 SXJ14 の他は、ピットが数十基検出されたにすぎない（3図）。詳細な年代、性格は不明である。



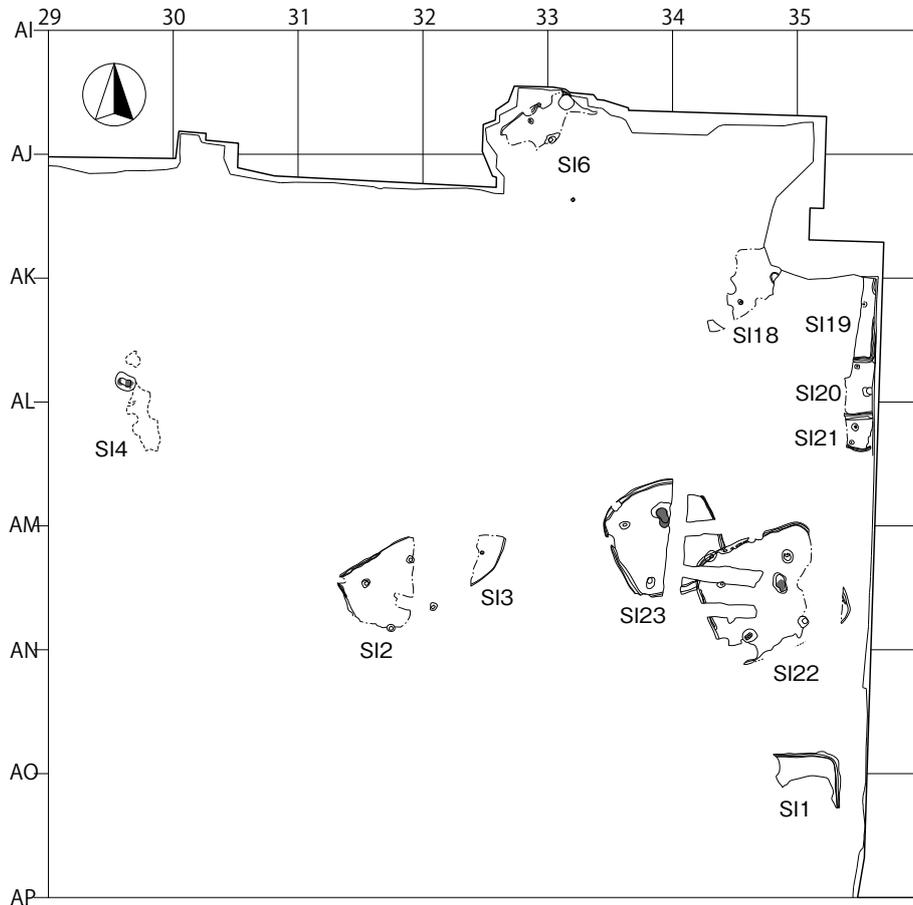
3図 縄文時代遺構・遺物分布図 (1/300)

(3) 古墳時代

11軒の竪穴式住居が検出された。そのうち古墳時代後期に帰属する住居は1軒（SI6）で、そのほかは前～中期に帰属する（4図）。SI2は中期に帰属する住居である。覆土中からは半完形の壺2個体を含む土器片の他、滑石製の勾玉が1点出土している（5図）。柱穴は4基検出されたが、炉は攪乱のため遺存していない。SI19、SI20、SI21はかなり密に重複し、21→20→19の順で構築されている。SI4、SI18は攪乱による削平によって床面のみが遺存していた。SI4にはかろうじて炉が遺存し、炉

内には甕口縁部が埋設されていた(6図)。SI22、SI23は本地点では最も良好な遺存状態で検出された住居で、前期に帰属する。SI22が新しい。SI23は壁溝の内側に環状の溝を巡らす特徴的な掘方構造を呈している。炉は最低3回の作り替えが行われたと考えられる。また、覆土には、三角埋土直上に純焼土層が堆積しており、埋没過程において上屋が罹災し焼失したことが窺われる(7図)。一方、SI22も貼床直上に焼土、炭化材が拡がり、火災住居であることが確認されたが、貼床の締まりが弱いこと、炉床がほとんど被熱していないことから、居住後短期間で罹災したことが推定される(8図)。

本地点周辺における古墳時代前～中期の竪穴式住居の検出事例は、看護師宿舎Ⅰ～Ⅲ期地点(1図19、48、74)、MRI-CT棟地点(1図21)、看護師宿舎ゴミ置き場地点(1図25)、ドナルド・マクドナルド・ハウス地点(1図101)、入院棟A地点(1図23)、基幹整備(流域⑧排水)B区地点(1図97-1南)があり、特に看護師宿舎Ⅱ、Ⅲ期地点南側を東流する開析谷北側の舌状台地上で濃密な分布を示している。そのなかでも看護師宿舎Ⅰ～Ⅲ期地点、MRI-CT棟地点では、多量の遺物が出土しているが、本地点検出住居は攪乱の影響を受けているとはいえ、比較的良好な遺存状態を示すSI2、SI22、SI23でさえも遺物量は少ない。



4図 古墳時代竪穴式住居分布図(1/300)



5 図 SI2 出土勾玉



6 図 SI4 炉内埋設土器出土状況



7 図 SI23 焼土・炭化材検出状況



8 図 SI22 焼土・炭化材検出状況

(4) 江戸時代

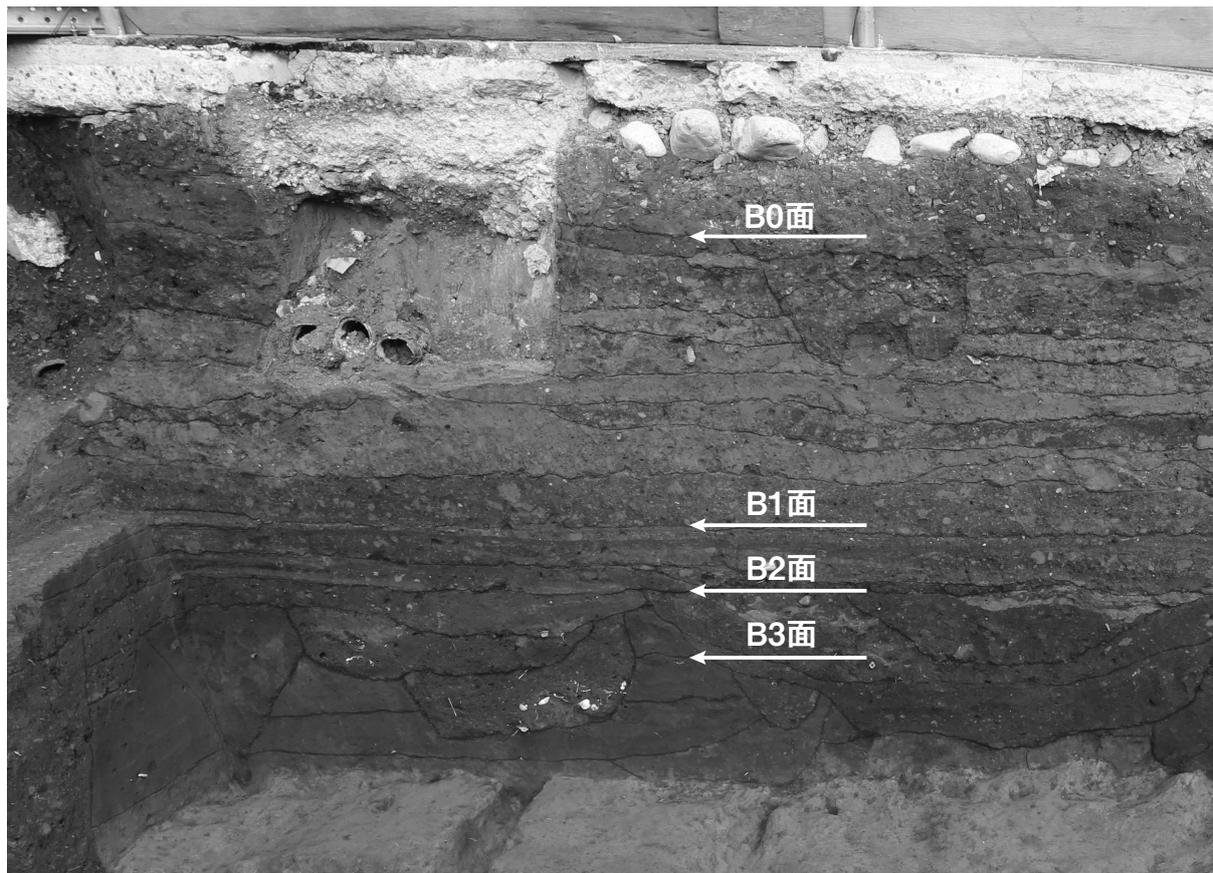
基本層序

繰り返し述べている様に、本地点は旧建物基礎による攪乱の影響を受け、江戸時代の盛土層は 32 ライン以東で部分的に認められるに過ぎない。さらに調査直前に解体された立体駐車場へ下るスロープが南北方向に取り付けられていたため、江戸時代盛土最上層は AJ・AK35 グリッドにわずかに遺存していたのみである。以下、確認された遺構面・盛土層の概要を述べる (9 図)。

B3 面は、近世最下面で、沖積層上の切土面である。

B2 面は、黒褐色土を盛土した整地面である。使用された黒褐色土はほとんど含有物が認められず、入院棟 A 地点 (1 図 23) の E 層、第 2 中央診療棟地点 (1 図 55) の 8 層に近似している。本郷邸初期開発段階の造成土で、寛永 16 (1639) 年の富山藩邸建設関連もしくはそれ以前の開発行為によるものと考えられ、出土遺物の年代観も併せ、1620～30 年代前半と推定される。

B1 面を形成する B1 層は、厚さ約 20cm を測る版築層で、表面は砂利を用いて整地されている。この普請によって本地域一帯がほぼ平準化されたと考えられる。そして砂利敷き硬化面が拡がる様相から、天和 3 (1683) 年以降の屋敷割改変に伴って作事された御表門から表御殿玄関に至るオープンスペースにあたと推定される。また看護師宿舎Ⅰ期地点 (1 図 19) では、B1 面に比定される C 面直上に元禄 16 (1703) 年の藩邸全焼に伴う一括廃棄資料が認められたことから、B1 面の下限もそこに求められる。



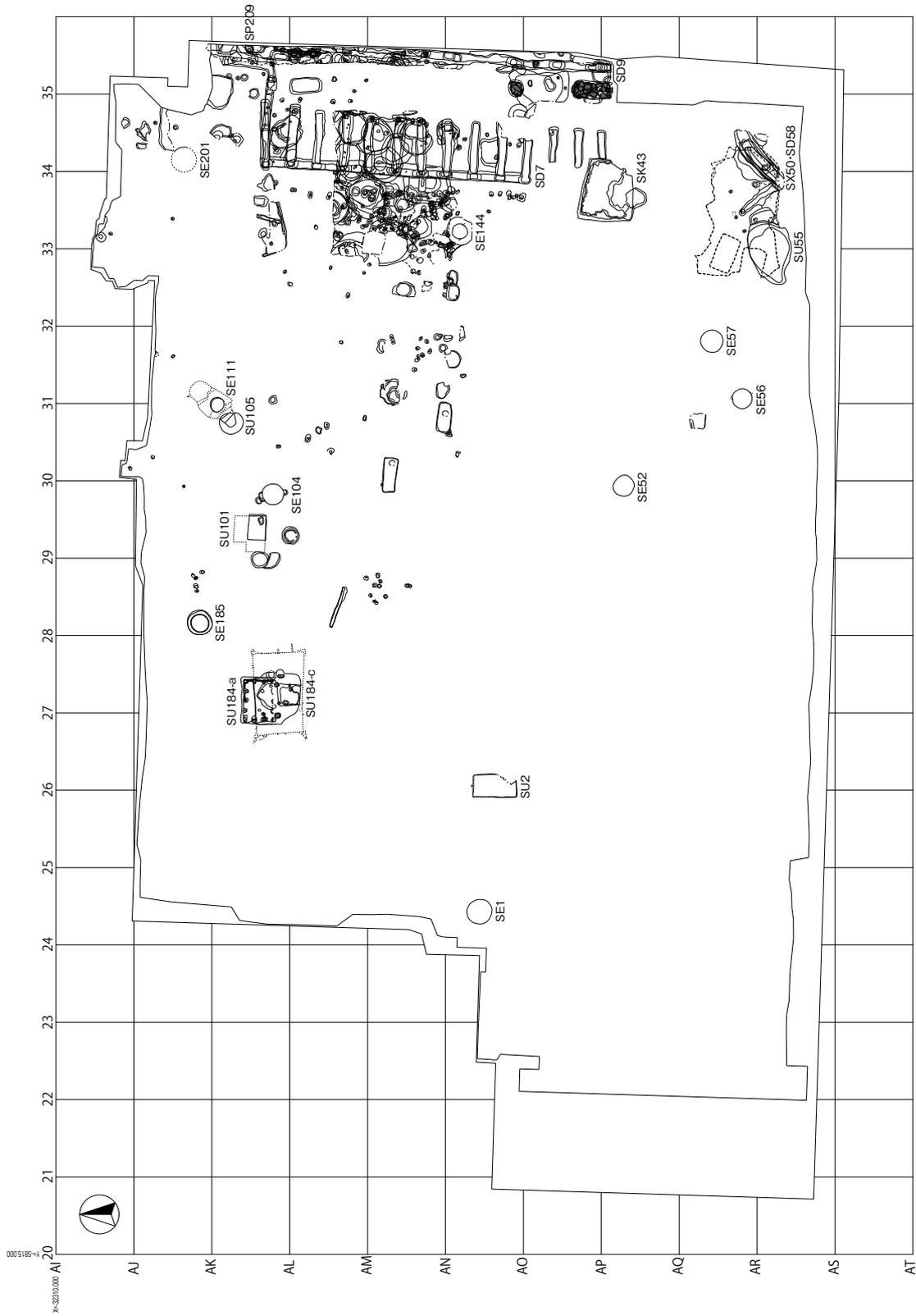
9 図 江戸時代の基本層序（調査地点東壁面）

B0面は硬化整地面で T.P.14.5m（地表面下約 50cm）で検出された。B1面からは約 1 m の嵩上げが行われているが、全体的にロームブロック主体の類似土壌で構成されていることから、一度に造成されたと考えられる。表面には焼土層が認められ、藩邸罹災に伴う面であることが窺え、その標高から看護師宿舎 I 期地点、MRI-CT 棟地点で検出された A 面に対応すると推定される。看護師宿舎 I 期地点 A 面では礎石建物基礎と植栽痕、池跡が検出され、藩邸奥向きの殿舎と庭園の存在が確認された。また遺構面直上や礎石には被熱した痕跡が認められ、出土遺物の年代観より文政 8（1829）年もしくは弘化 3（1846）年の藩邸火災によるものと推定される。

検出された主な遺構（10 図）

地下室・半地下室は、4 基検出された。SU101 は長方形の開口部から北壁と西壁にオーバーハングする室部を有する。SU105 は円形の開口部から北東方向に階段状の不整形室部が伸びる特異な形態を呈している（11 図）。SU184 は半地下室（SU184-a）と地下室（SU184-c）が重複しており、a が新しい（12、13 図）。a の覆土中には東大編年 VI b 期に比定される大量の陶磁器類が廃棄されており、瀬戸・美濃や志戸呂の皿、京・信楽の平碗、肥前染付大皿などがまとまって出土している。c は床面規模東西約 500cm、南北約 300cm、確認面からの深さ約 400cm を測る大形の地下室である。床面ほぼ直上に宝永の火山灰が廃棄されており、18 世紀初頭に廃絶されたと考えられる遺構である。

井戸は 9 基検出された。SE56、SE144（14 図）は直径約 100cm で、壁面に足掛け孔を有する古い形態を呈す。SE185 は井戸側を有する井戸で、井戸側上部が炭化していたことから火災に伴い廃絶されたと考えられる。遺物はなく廃絶年代は不明である（15 図）。



10 図 江戸時代の遺構 (1/400)

採土坑と推定されるSU55は、不整楕円形を呈する遺構で（16図）、坑底は本郷砂層に至る。出土遺物は少ないが、総織部皿（17図）、金箔カワラケ片が含まれていることから、初期造成段階の土砂利用に関する遺構と推定される。

SD58は地境施設と考えられる溝状遺構で、東大編年Ⅳa期の遺物を伴う（18図）。本遺構埋没後に同位置に構築されたSX50は断面皿状の溝状遺構で、溝底は被熱し、覆土には多量の焼土を含む。SD58の廃絶年代観から、元禄16年の火災が想定される。

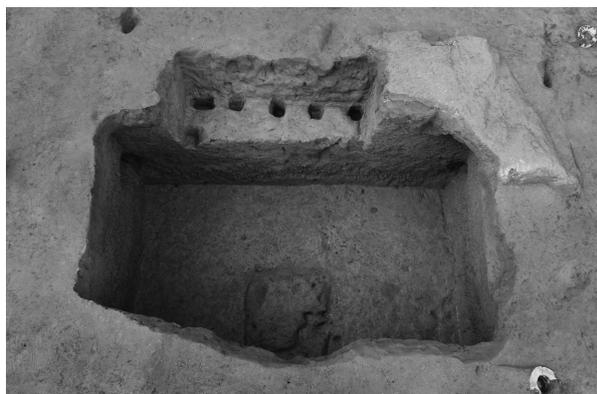
SK43は不整形の大形土坑である。覆土中には東大編年Ⅲb期に比定される陶磁器類と共に、アカガイを中心としてサザエ、アワビ、ハマグリなどの多量の貝類が廃棄されていた（19図）。貝種組



11図 SU105



12図 SU184-a



13図 SU184-c



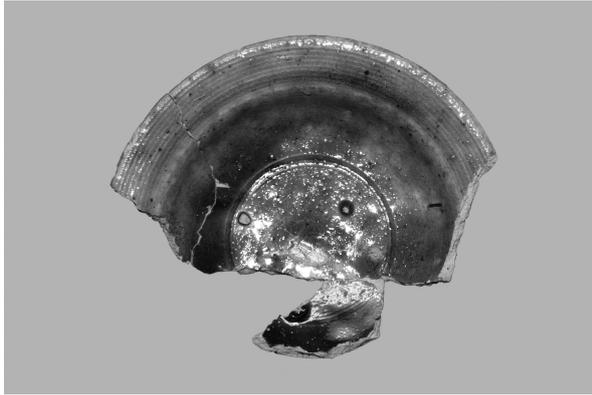
14図 SE144（壁面に足掛け穴がみえる）



15図 SE185（井戸側が黒く炭化している）



16図 SU55



17 図 SU55 出土総織部皿



18 図 SD58



19 図 SK43 覆土堆積状況 (中に貝層)



20 図 SK43 キツネ頭骨出土状況

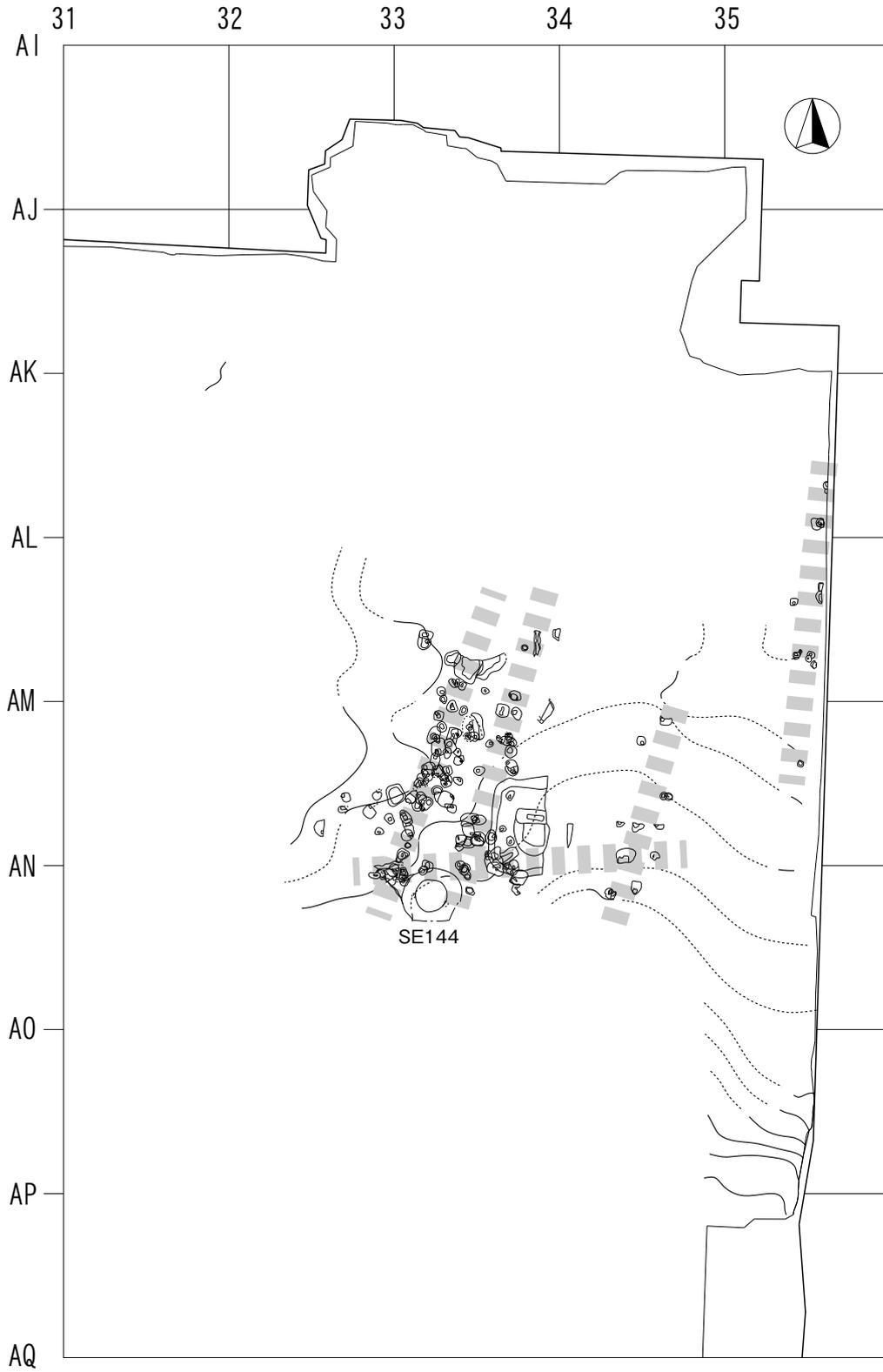
成が偏っていることから、藩邸内での宴に利用された食材と推定される。また貝層直下からキツネと考えられる動物骨が複数個体出土した。そのうち1体はほぼ原形を止めた状態で確認されたが、その脇には頭骨が3体分まとまって廃棄されていた(20図)。この状態から藩邸内において解体作業が行われていたことが推定される。

盛土層残存範囲における土地利用の変遷

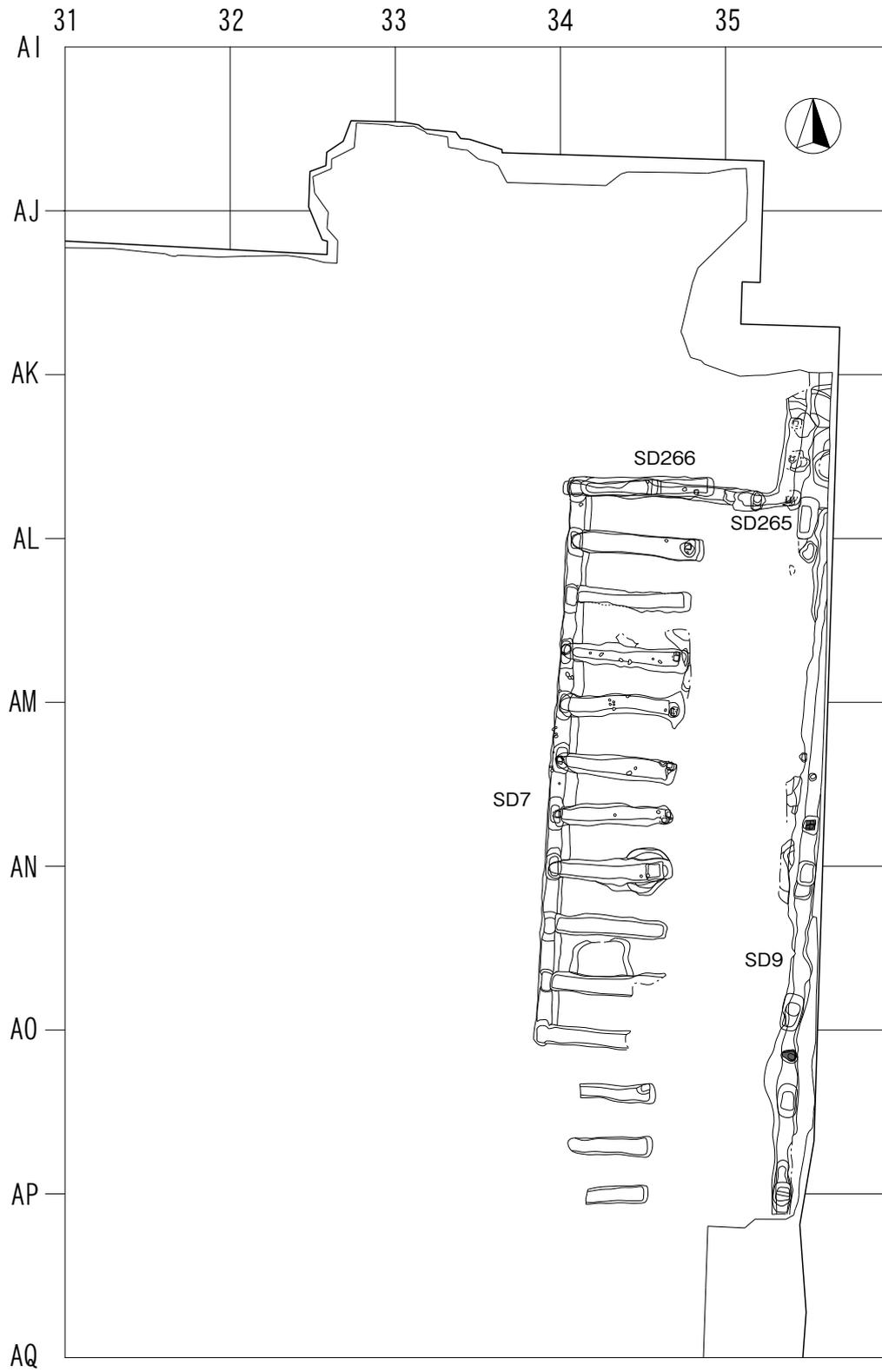
AK～AN・32～35グリッドでは、近代以降の攪乱を免れ、かろうじて江戸時代の盛土層が遺存していた。しかし、先述した基本層序に観られる遺構面のうち、B0面遺存状況はAK35グリッド内で2㎡弱とかなり悪い。よって本節では元禄16年下限を想定したB1面以下の様相と土地利用変遷について概説したい。

自然堆積層上のB3面では柵列と推定されるピット列群が検出された(21、23図)。各々のピットは複数基が重複した状態で検出され、頻繁な建て替えが行われたことを物語っている。またAL～AN・33グリッドに位置する南北方向に伸びるピット群と、AM～AN・32～34グリッドを東西に伸びるピット群はほぼ旧地形の等高線に沿って、AM～AN・34グリッドとAK～AM・35グリッドに位置する南北に伸びるピット群は、ほぼ直交して構築されており、いずれの柵列も旧地形に規制されていることが判る。

B2面の主な遺構として溝を伴う地境遺構がある(22、24図)。35ラインに位置するSD9は溝底にピットが並び、一部に切石を用いた礎石が残存していることから、柵列を伴う地境溝と考えられる。34ラインに位置するSD7は、東西方向の主軸を有し南北方向に並ぶ長方形土坑列と、南北方向に伸



21 図 B3面の遺構 (1/200)
(等高線は10cm間隔)



22 図 B2 面の遺構 (1/200)

びる溝の重複遺構で、前者が新しい。各土坑は東西長約400cmを測り、東西両壁際に柱穴を有す。各々は芯々約170cmの間隔で配列されていることから塀跡と考えられる。また南北方向の溝も溝底にピットを伴い、SD9同様柵列を伴う地境溝と考えられるが、柱穴位置が長方形土坑列の配置とほぼ一致していることから同一要因の規制下で建て替えられたと推定される。さらにSD7廃絶後にSD266、続いてSD265が構築されている。SD265もやはり柱穴を伴う地境溝で、当区域が邸内における区画帯として機能していたと考えられる。SD266より染付筒形碗、SD9より砂目積み痕を有す染付碗が出土したことから(25図)、これらの地境遺構群の年代観は1620～1630年代前半、すなわち寛永16(1639)年の富山藩邸建設以前の本郷邸初期開発段階と考えられる。

B2面の遺構には上述した地境関連遺構の他に、炉跡、植栽痕なども検出されている。このうち植栽痕はB1面へとつながる遺構となる。



23図 B3面のピット列群



24図 B2面の地境遺構



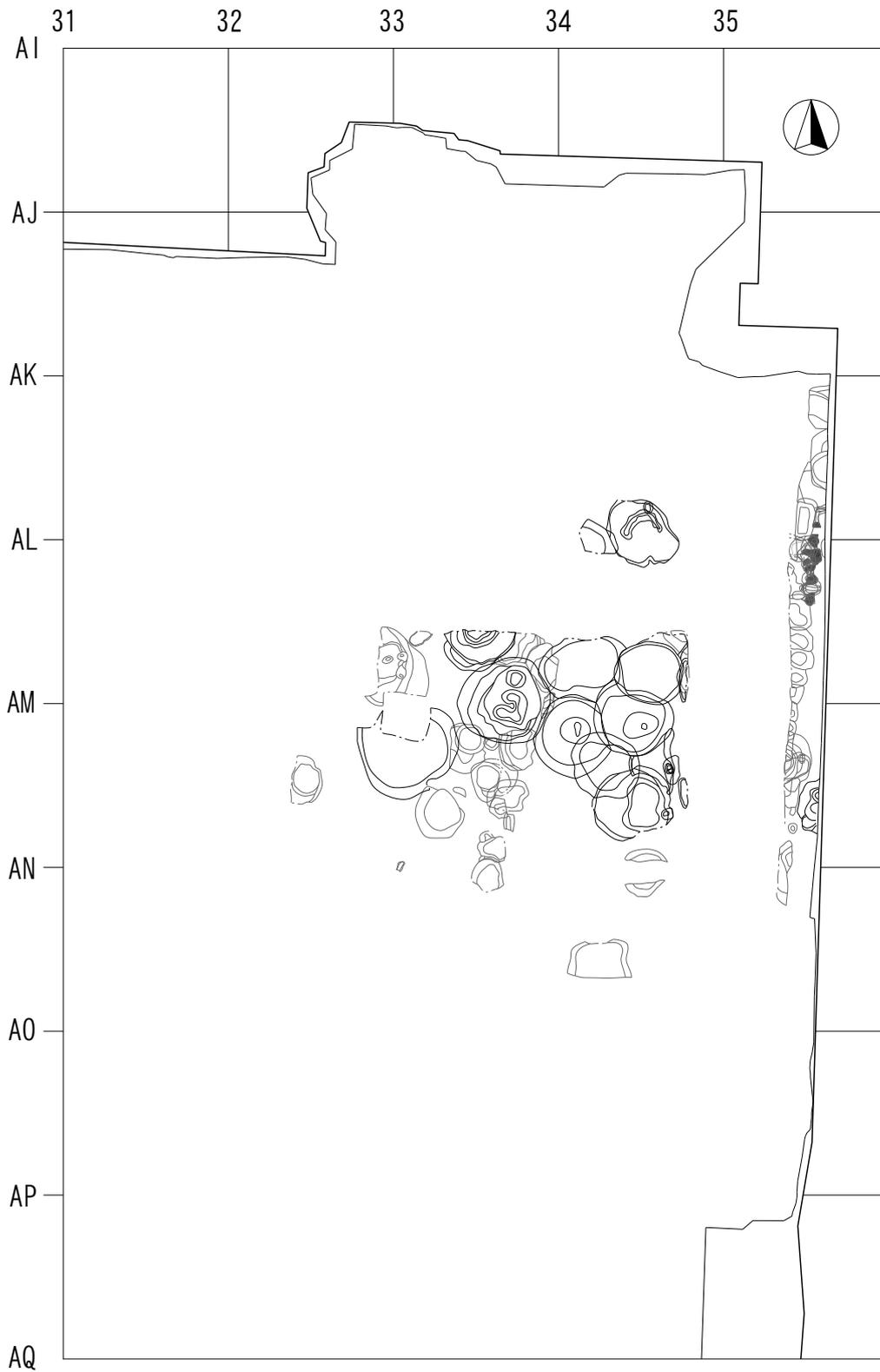
25図 SD266 (左)、SD9 (右) 出土遺物



26図 B1面の植栽痕群

B1面は厚さ約20cmを測る版築層上硬化面を指すが、AL～AM・32～34グリッドではB2面直上で硬化面が確認された。本硬化面の標高レベルは版築層下面レベルとほぼ等しいことから、本エリアでは版築層は攪乱によって削平されているものと思われる。

本遺構面からは夥しい切り合いの植栽痕群が検出された(26、27図)。図示した植栽痕群は黒色で表記したB2面直上硬化面を切る遺構と、灰色で表記した硬化面にパックされている遺構に大別される。この検出状況から当区域が植樹帯を形成していたことが窺われるが、その上限はB2面段階において本区域が地境機能を終了した時点と想定され、下限については版築層が遺存する35ライン以東において、版築面上硬化面から掘り込まれた植栽痕が皆無であることから、それ以前までの様相と考えられる。先述した様に、B1面を形成する版築層の上限は天和3年の屋敷割り改変に求められ、植



27 図 B1 面の遺構 (1/200)
(灰色表記は B2 面地境遺構廃絶後の遺構)

栽痕群は富山藩邸成立から天和2年の火災前までの様相と考えることができる。またこの段階の当区域は富山藩邸南東部の緩斜面上にあり、庭園として利用されていたことも想定される。

このように当区域は、拝領当初は邸内の区画帯域として、富山藩邸成立後から天和2年の火災までは植樹帯（庭園）として変遷したといえる。

3. 調査の課題と展望

本調査地点は、近代以降の攪乱・削平によって、遺構の遺存状態はかなり悪い状態であった。しかしその中にも今後の加賀藩邸・富山藩邸研究に対するいくつかの視座が得られたことは大きい。

ひとつには、本郷邸東域緩斜面地における藩邸初期開発の様相である。柱穴列から溝へと変遷する区画施設のあり方と主軸方位に観られる旧地形との関連は、溝、箱薬研溝、柱穴列などの初期区画施設が検出された看護師宿舎Ⅰ～Ⅲ期地点などの近接調査地点の成果と合わせ考えていく必要がある。特に元和2・3（1616～17）年の本郷邸拝領後の記録は、寛永3（1626）年に「初めて周囲を木柵をもって囲む」、翌寛永4年に「利常の子利次・利治や生母福寿院等、国元より出府して居住する。また、邸内に多く長屋を造営して、小田原町・メッタ町に賃居していた微臣を収容する」、寛永6（1629）年に「寛永3年から造営の御成御殿完成」等断片的資料しか残されていないが、記録上では寛永3年が本郷邸開発元年と位置付けられ、寛永16（1639）年の富山・大聖寺両藩邸成立までの初期開発の様相復元が課題となる。

もうひとつに天和3年以降の土地利用のあり方である。確かに著しい攪乱を受け、地下室、井戸などの大深度遺構しか遺存していない状況ではあるが、AOライン以北では、28ライン付近まではピット、溝などの小遺構も存在し、SU101、SU184-cなどは天井部も遺存しているので、地下室や大形土坑などが構築されていれば、どんな形でも遺存可能な状況である。それにも関わらず遺構分布が著しく疎であることは本来的に遺構が希薄な区域と考えられる。また、地下室の形態や、井戸の分布状況からも詰人空間の様相は認められない。それらの要素を合わせると、本地点は文政8年以降の藩邸様相を描いた絵図にある様に、本地点南東部付近に位置する御表門からALライン付近以北に建設された殿舎に至るオープンスペースとしての機能が、散漫な遺構分布に顕れていると指摘できよう。また元禄16年の火災で廃絶されたSU2、1760～70年代に廃絶されたSU184-aなどの遺構配置は、絵図からは読み取れない文政8年以前の邸内様相を復元する資料として重要な情報を提示していると評価できる。

江戸時代以前の遺構・遺物に関する成果も多く得られた。開析谷によって形成された病院地区北側の舌状台地上には小規模ながらも旧石器時代の石器包蔵地が拡がっていることや、縄文時代早期末の炉穴や前期前半までの遺物包含層が拡がっていることが再確認された。特に縄文に関しては近接調査地点でも早期末の炉穴、前期前半の竪穴式住居が検出されていることからその成果を踏まえて今後の検討を要する。

古墳時代に関してもやはり本台地上に前期～中期にかけてかなりの規模の集落が形成されていることが追認された。弥生町遺跡からの変遷をはじめ、勾玉を所有する集落居住者相、後期以降の規模縮小など、本台地上に展開する古墳時代集落の復元・研究は、今後の大きな検討課題である。

3. 本郷 115 図書館前クスノキ移植 (HTP12)

所在地 東京都文京区7-3-1 (文京区No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2012年5月7日～6月18日

調査面積 60㎡

調査担当 追川 吉生

1. 調査の経緯と経過

東京大学総合図書館では敷地北側に地下書庫増築を計画している。予定地には2本のクスノキが植えられているが、学内での協議によりこれらは移植保存されることが決定した。移植の準備は昨年からはじめられ、根切り作業に伴う埋蔵文化財の立会調査は2011年6月9日～15日にかけて実施している(本107)。クスノキの移植作業は2012年6月に予定され、その移植先として医学部2号館(本館)の前庭が決定した。

ここは江戸時代には育徳園の一部であり、御守殿として利用されていた時期もある。また心字池の周囲には、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が存在しており(文学部四号館など)、移植予定地についても該期の遺跡が存在することが予想された。そこで埋蔵文化財調査室では5月7日～6月18日の日程で発掘調査を実施した。なお移植先の選定に時間を要したこと、調査面積が狭小であることから試掘調査は行っていない。



1 図 調査区位置図

2. 調査結果

2本のクスノキの移植に伴う調査のため、調査地点内に5m×6mの調査区を2カ所設定した。北側の調査区を第1地点、南側の調査区を第2地点と呼称する。

第1地点

現・育徳園に隣接しており、本地点から10mほど北東から心字池へと向かう傾斜が始まっている。しかし調査地点のローム層の堆積状況は水平で、現地表面から1.6mの深さでローム層を確認した。表土直下にはコンクリートの土間やレンガ基礎の一部が残されていた。これらは、昭和初年まで存在した動物室や第一医院のものと思われる。江戸時代の遺構は現地表面から0.8mの深さから検出され、5面の生活面を確認した。

本地点は溶姫入輿以後、育徳園から御守殿へと組み込まれた範囲の一角にあたる。しかし、地下室や井戸、便所などの建物に伴う遺構は検出しなかった。該期の生活面(1面)では礎石(SB07)が1基検出している。これが御守殿の建物遺構に関連する可能性がある。しかし礎石は単独で、これと対応する礎石は認められなかった。

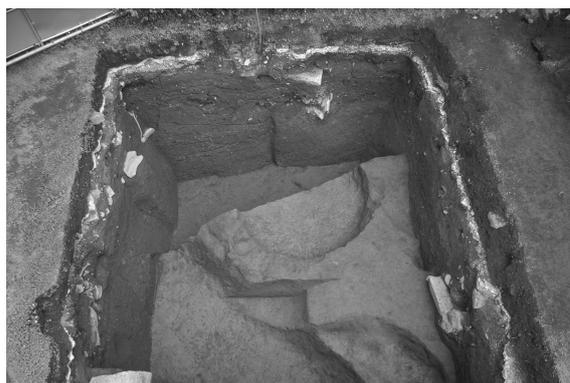
1面～4面は石組遺構が主体である。SG01は間知石を用いた石組遺構だが、胴木や掘り方は認められないため、現地点では石垣と認定することはできない。SG03は石の中央部にスリットを設けた石樋である。

5面では植栽痕と性格不明な掘り込みを検出した。掘り込み(SU16、SU21)は調査区外に続いているため、遺構の規模や本来の形状は不明である。あるいは庭園造成に関わる壇切りだったのかもしれない。また該期の本地点は松姫(吉徳室・綱吉養女)の御守殿の場所にもあたる。遺物がほとんど出土しない(2調査地点をあわせてもタバコ1箱)ため、各面の時期を特定することは困難であるが、庭園と御殿(御守殿)の両面から検討を加えていく必要がある。

第1地点は旧石器時代の遺跡が存在する可能性が高いことから、立川ロームⅦ層まで掘削した。しかし石器類の出土は見られなかった。



2図 SG1・SG3 検出状況



3図 SU21・SU26 検出状況

第2地点

1999年度に実施した総合研究棟地点(本54)の東側に隣接し、御守殿の建物遺構の検出が期待された。

3. 図書館前クスノキ移植 (HTP12)

しかし表土直下には法医学教室のレンガ基礎が調査区のほぼ全面にわたって埋まっており、調査はローム面が辛うじて削平をまぬがれた部分だけを対象とした調査になった。

狭少な調査面積にもかかわらず7基の遺構を検出した。SB31はレンガ基礎直下のため、礎石自体はすでに無く、検出したのは南北1.4m、東西0.6m(西側が壊されている)の掘り方と、1段の根石のみだった。掘り方の規模や根石の状況から、御殿に伴う基礎と思われる礎石跡と思われる。これ以外の遺構は土坑とピットだった。



4 図 2区全景



5 図 SB31 検出状況

第Ⅱ章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節 調査資料の整理

1. 整理事業概要

本年度は、発掘調査報告書刊行にむけて以下のような整理作業を行った。

- ・本郷 15 薬学部新館出土遺物接合
- ・本郷 20 総合研究博物館出土遺物観察表作成
- ・本郷 23 医学部附属病院入院棟 A 遺構図版作成
- ・本郷 28 薬学部資料館出土遺物実測
- ・本郷 43、44、45、47 医学部附属病院基幹整備共同溝等遺構図版作成
- ・本郷 54 総合研究棟（文・経・教・社研）出土遺物実測、観察表作成
- ・本郷 55 医学部附属病院第2中央診療棟出土遺物実測・拓本、出土遺物写真撮影、観察表作成
- ・本郷 59 工学部共同溝出土遺物観察表作成
- ・本郷 58 医学部附属病院受変電設備棟出土遺物観察表作成
- ・本郷 65 法学系総合研究棟出土遺物写真撮影、トレース、観察表作成
- ・本郷 82 懐徳門出土遺物実測
- ・白山 4 農学生命科学研究科附属小石川樹木園・根圏観察室出土遺物観察表作成
- ・白山 6 理学系研究科附属植物園本園・下水・電源ケーブル埋設柵・埋設溝出土遺物接合
- ・他 19 港区医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟出土遺物事実記載、観察表作成、遺物図版作成 その他、出土自然遺物整理に関しては阿部常樹氏に依頼、行った。

2. 外部委託

(1) 基礎整理

- ・ジェットマーカーによる機械注記作業を（株）Acubeに委託し、本郷 87 東京都下水道工事、本郷 91 医学部附属病院立体駐車場、本郷 93 伊藤国際学術研究センター、本郷 94 分生研・農学部総合研究棟、本郷 97 基幹整備（流域⑧排水）B区、本郷 99 法学部3号館、本郷 101 医学部附属病院ドナルド・マクドナルド・ハウス東大出土遺物の注記作業を完了した。
- ・遺構図面の基礎整理（デジタルトレース、図版作成補助）を（有）文化財コムに委託し、本郷 78 情報学環・福武ホールの基礎整理を完了した。
- ・他 15 千葉市検見川運動場体育セミナーハウス（玄蕃所遺跡）出土石器実測、デジタルトレースを（株）盤古堂に委託し、完了した。

(2) 出土遺物写真撮影

既報告地点（本郷 2 法学部 4 号館・文学部 3 号館、本郷 3 御殿下記念館、本郷 4 医学部附属病院中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝、本郷 5 理学部 7 号館）出土遺物の写真撮影を（有）文化財コムに委託し、完了した。

第2節 調査・研究成果の公開・活用

1. 広報活動

(1) 遺跡見学会

2012年4月30日

都立稔ヶ丘高校フィールドワーク「ブラミノリ」(参加者10名)

2012年5月25日、26日

春日門横教育研究棟地点にて、調査見学会開催(両日で約150名)

2012年8月25日

徳川ミュージアムボランティアガイド研修会(参加者10名)

2012年9月30日

市川市博物館拓本部会見学会(参加者48名)

2012年10月7日、14日

修復のお仕事展Ⅳ ワークショップ「水戸藩士 立原杏所が描いた向ヶ岡と忍ヶ岡を巡る」(参加者7日 6名、14日 11名)

2013年1月6日

たいとう歴史研究会谷中七福神めぐり(参加者16名)

2013年3月12日、19日

那珂歴史研究会(参加者12日 45名、19日 32名)

(2) ホームページ

発掘調査速報、遺跡見学会案内、調査室所蔵遺物学外展示などを掲載した。

2. 教育・普及

(1) 学内外授業

2012年4月16日

春日門横教育研究棟地点にて、大貫室長授業で19名と来跡

2012年4月17日

春日門横教育研究棟地点にて、ダイワ建設約5名現場見学

2012年6月26日

春日門横教育研究棟地点にて、堀内室員文化資源学授業の一環で来跡

3. 資料の提供・貸出

年度	貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料
2012	東京国立博物館	貸出	常設展示 平成館考古展示室 資料展示	御殿下記念館地点 391 号出土 色絵花卉文大皿片 ほか 計 65 点
	国立歴史民俗博物館	貸出	総合展示「都市の時代」 資料展示	御殿下記念館地点 678 号出土 染付大皿海浜文 ほか 計 28 点
	江戸東京博物館	貸出	常設展「武士の暮らし・町の暮らし」 資料展示	医学部附属病院中央診療棟地点 Z35-5 出土 座り猿、理学部 7 号館地点 SK1 出土 焼塩壺ほか 計 107 点
	第一合成（株）	出版	文化財総合カタログ掲載	小石川植物園（KKG-10）地点出土 土器片
	（公財）徳川美術館	出版	特別展「徳川将軍の御成」 図録掲載	医学部附属病院第 2 中央診療棟地点出土 金箔瓦
	（財）放送大学教育振興会	出版	杉森哲也編 2013 放送大学印刷教材『日本近世史』 資料掲載	御殿下記念館地点「全体図」、「梅之御殿図」
	雄山閣	出版	尾関清子 2012『縄文の布』雄山閣 資料掲載	医学部附属病院病棟地点出土 漆濾し和紙
	大坂歴史博物館	貸出 / 出版	特別展「天下の城下町 大坂と江戸」 資料展示・図録掲載	医学部附属病院第 2 中央診療棟地点出土 金箔瓦ほか 計 8 点
	埼玉県立歴史と民族の博物館	出版	季節展「弥生土器の美」パネル展示（会期 2013.2.13-5.6）	浅野地区出土弥生土器、工学部武田先端知ビル地点出土 方形周溝墓
	千代田区教育委員会	貸出 / 出版	特別展『徳川将軍家の器』資料展示・図録掲載（会期 2013.1.9-3.3）	法学部 4 号館・文学部 3 号館地点 E8-2 号出土ベトナム産青花ほか 計 59 点
	大聖寺町史編纂委員会	出版	大聖寺町史編纂委員会 2013「大聖寺町史」資料掲載	医学部附属病院第 2 中央診療棟地点 全体写真
	高島 裕之	出版	近世陶磁研究会 2013「第 3 回近世陶磁研究会」資料掲載	医学部附属病院病棟地点 C2 層出土 染付雪輪牡丹文変形皿・染付雪輪牡丹文猪口
	紅ミュージアム	出版	季刊誌『紅ミュージアム通信』vol.25 資料掲載	東京大学構内遺跡出土 焼塩壺ほか 計 6 点

第3節 室員研究・活動報告

堀内 秀樹

【科研費など外部競争資金】

- ・科学研究費 基盤研究 (C) 『都市江戸の貿易陶磁器需要と地域間貿易ネットワークに関する総合的研究』平成23年度～25年度

【著書・論文・研究ノート】

- ・「発掘された水利施設」『江戸の水道』、pp.189-229、2012年6月4日、同成社
- ・「加賀藩邸への御成と陶磁器」『陶説』第715号、pp.31-34、2012年10月1日、日本陶磁協会
- ・「朝鮮通信使饗応と器」『徳川将軍家の器 - 江戸城跡の最新の発掘成果を美術品とともに -』、pp.137-144、2013年1月19日、千代田区立日比谷図書文化館（島崎とみ子と共著）

【研究発表・講演・講座】

- ・2012年6月12日
「東京大学本郷構内の遺跡工学部3号館地点の発掘調査」金沢城調査研究関連機関連絡会
- ・2012年8月4日
「天和二（1682）年被災、加賀藩・大聖寺藩江戸屋敷出土陶磁器 - 初期伊万里、古九谷様式、松ヶ谷、初期鍋島を中心に -」伊万里の会
- ・2012年9月29日
「蔵帳に書かれるもの、書かれないもの」『第33回日本貿易陶磁研究会研究集会『記録された貿易陶磁』』
- ・2012年10月19日
「近世遺跡の発掘調査 - 情報の抽出・評価・周知化 -」公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団職員研修会
- ・2013年1月12日
「天明浅間災害遺跡の資料的・歴史的価値」ハッ場あしたの会6周年記念シンポジウム
- ・2013年1月19日
「文化の普及と器具 - 喫茶と茶陶 -」日本家政学会食文化研究部会
- ・2013年2月16日 -17日
「都市江戸における肥前磁器の消費 - 初期色絵・鍋島・柿右衛門 -」第3回近世陶磁器研究会『江戸の武家地出土の肥前磁器 - 罹災資料と初期色絵・鍋島・柿右衛門 -』
- ・2012年2月28日
「文化のグランドデザインと武家儀礼の器」平成24年度文化財特別展『徳川将軍家の器』講演会

成瀬 晃司

【研究発表・講演・講座】

- ・2012年8月4日
「東京大学医学部附属病院入院棟A地点C層出土陶磁器の様相」伊万里の会
- ・2012年8月22日

「考古資料からみた将軍御成－加賀藩本郷邸の発掘調査から－」徳川美術館夏期講座『徳川将軍の御成』

・2013年2月16日-17日

「罹災資料にみる大名藩邸の陶磁器諸相－天和2年・元禄16年の加賀・大聖寺・富山藩邸資料から－」第3回近世陶磁器研究会『江戸の武家地出土の肥前磁器－罹災資料と初期色絵・鍋島・柿右衛門－』

小松 愛子

【著書・論文・研究ノート】

・『近世天台宗寺院の存立構造』学位論文2012年7月

・「寺院領主と地域社会」（塚田孝・吉田伸之編『身分的周縁と地域社会』山川出版社、2013年、pp.227-255）

原 祐一

【著書・論文・研究ノート】

・「シンポジウム「今、文化財が社会にできること」を開催して」NPO JCP NEWS NO.25、2012年5月25日、p.10

・「向ヶ岡弥生町で行った文化財の保存修復と公開」（あくさいず『第21回 芸工展2011 参加企画 修復のお仕事展Ⅲ～伝えるもの・想い～ 報告書』pp.15-21）

【研究発表・講演・講座】

・2012年5月25日

「(P19) 水戸藩駒込邸の研究 一邸内の造成と土地利用状況について一」日本考古学協会総会 pp.204-205

・2012年10月7日～14日

第20回芸工展2012参加企画 修復のお仕事展Ⅳ～伝えるもの・想い～Ⅳ Produced by あくさいず 旧平櫛田中邸アトリエ

追川 吉生

【著書・論文・研究ノート】

・「近世研究の動向」『日本考古学年報』63（2010年度版）、pp.54-61、2012年5月20日、日本考古学協会・吉川弘文館

・「『東京考古』到達点と展望（近世）」『東京考古』30、pp.122-127、2012年5月20日、東京考古談話会

・「旗本屋敷を掘る・明治大学記念館前遺跡」『古代学研究』194号、pp.47-48、2012年6月30日、古代学協会（忽那敬三と共著）

・「書評『江戸の大名屋敷』」『日本歴史』772号、pp.115-117、2012年9月1日、日本歴史学会・吉川弘文館

【研究発表・講演・講座】

・2013年1月12日

- 「明治大学ゆかりの地をめぐる」明治大学職員会研修
・2013年3月28日
「芝に残る江戸を歩く」みなと歴史講座

附 埋蔵文化財調査室要項

東京大学埋蔵文化財運営委員会は、全学委員会の見直しに伴い、以下の通り廃止され、埋蔵文化財調査室は、キャンパス計画室下部組織に改組された。

東京大学における全学委員会の見直しに伴う関係規則の整理等に関する規則（平成22年3月25日東大規則第133号）（抜粋）

（略）

（東京大学埋蔵文化財運営委員会規則の廃止）

第17条 東京大学埋蔵文化財運営委員会規則（平成元年7月11日制定）

埋蔵文化財調査室規則

平成元年7月11日

評議会可決

（設置）

第1条 キャンパス計画室の下に埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

（業務）

第2条 調査室は、東京大学構内の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査（以下「遺跡調査」という。）に関し、次の各号に掲げる事項を処理する。

- （1） 遺跡調査に対する総括的指導助言
- （2） 文化庁等に提出する報告書の作成、監修及び指導
- （3） 遺物等の保管及び管理
- （4） 遺跡調査の方法に関する調査研究
- （5） 前各号に定めるもののほか、研究報告書の作成等遺跡調査に関し必要と認められる事項

（室長）

第3条 調査室に室長を置く。

2 室長は、東京大学専任の教授又は准教授のうちから総長が委嘱する。

3 室長は、調査室の業務を総括する。

（室員）

第4条 調査室に室員若干名を置く。

2 室員は、室長の指示に従い、調査室の業務に従事する。

（庶務）

第5条 調査室の庶務は、本部施設企画課において処理する。

附 則

この規則は、平成8年5月21日から施行し、改正後の埋蔵文化財調査室規則の規定は、平成8年5月11日から適用する。

附 則 この規則は、平成22年4月1日から施行する。

埋蔵文化財調査室組織表

室長（人文社会系研究科教授）	大貫 静夫
室員（キャンパス計画室准教授）	堀内 秀樹
室員（キャンパス計画室助教）	成瀬 晃司
室員（人文社会系研究科特任助教）	小松 愛子（2012年4月～）
室員（キャンパス計画室助手）	原 祐一
室員（キャンパス計画室助手）	大成 可乃
室員（キャンパス計画室助手）	追川 吉生
教務補佐員	香取 祐一
教務補佐員	小川 祐二
事務補佐員	青山 正昭
事務補佐員	今井 雅子
事務補佐員	大貫 浩子
事務補佐員	加藤 理香
事務補佐員	小林 照子
事務補佐員	杉浦 あかね
事務補佐員	田中 美奈子
事務補佐員	渡辺 法彦

東京大学構内遺跡調査研究年報 9
2011・2012 年度

2015 年 5 月 31 日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4 - 6 - 1
<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp>
印刷 能登印刷株式会社
